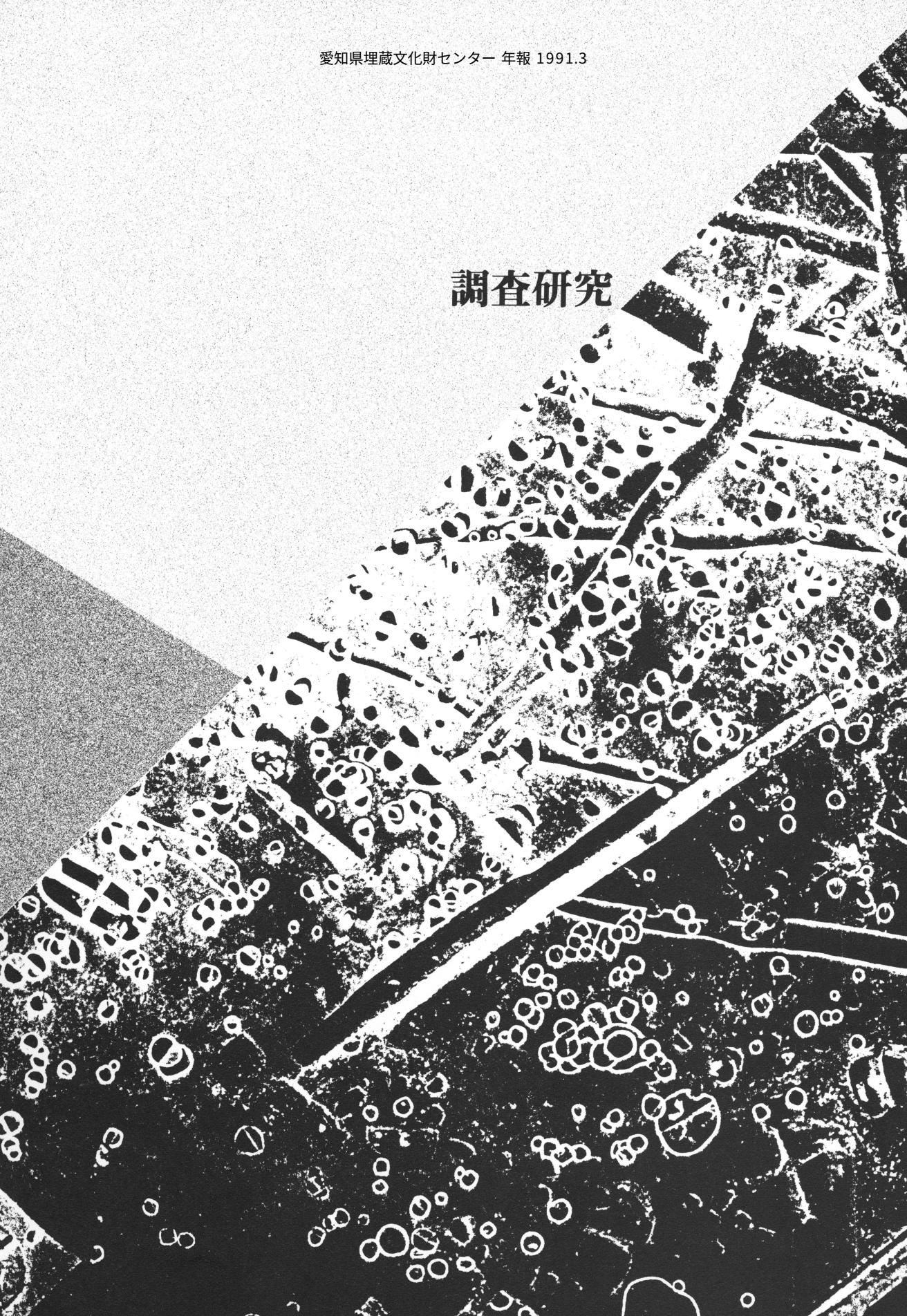
調査研究



古代尾張の土師器　～6世紀後半から11世紀の様相～

城ヶ谷　和広

Ⅰ　はじめに

尾張における古代の土師器研究はほとんど空白であるといっても過言ではない。これは三重県を除く東海地方全般に該当することであるが、まとまった古代の集落遺跡の調査例が少なかったことに起因している。土師器研究の分野で早くから注目され議論が進んでいるのは古墳時代前期を中心とした時代である。また、近年、中世集落遺跡の調査が幾つも行われ[1]、それらの成果から中世土師器の論考[2]も生まれてきた。ところが、それらをつなぐ古墳時代の後半から奈良・平安時代にかけての時代、すなわち「古代」の研究はほとんど見られないといってよい[3]。当該期の発掘調査は窯跡や古墳の調査がほとんどで、その結果、須恵器・灰釉陶器の研究のみが盛んとなり、土師器の研究はほとんど省みられることはなかった。

全国的にみると、ちょうどこの時代は律令制度が整備され、統一された律令国家が生まれていく時代である。土器においても7世紀後半頃には須恵器と土師器が互換性を持ち、規格化された法量の下での器種分化を特徴とする「律令的土器様式」が成立したことが明らかにされている[4]。宮都である飛鳥・藤原・平城宮では調査が進み、土師器を基本とする飛鳥、平城編年が作られ[5]、他地域との比較の物差しとなっている。平安京においても土師器の細緻な編年が作られ[6]、「都」の様相はかなり明確になってきている。各地においても研究は進み、特に関東などでは以前から集落遺跡の調査が多く、土師器の細かな編年も作られている。近年、北陸[7]や信濃地方[8]で、この方面の様相がいくつも明らかにされている。それに対して畿内と東国を結ぶ東海地方の様相はほとんどわかっていないのが実状である。

ところが、ようやく最近になって、いくつかの当該期の集落の調査が行われ、日常容器について新しい知見をえられるようになってきた。なかでも清洲城下町遺跡の下層からは6世紀から11世紀にかけて継続的な集落が見つかっている。出土土器も須恵器のみならず土師器についてもかなりの割合で出土し、おおよその変遷をたどることは可能となってきた[9]。そこで、充分な資料を手にしているわけではないが、とりあえずこれらの成果を基にして尾張とその周辺地域を含めた、いくつかの調査例を加えて6世紀後半から11世紀にかけての土師器について検討し、空白となっている「尾張古代の土師器」の変遷を少しでも明らかにしてみたいと思う。なお、6世紀後半から11世紀としたのは6世紀後半から尾張に特徴的な土師器甕が出現し、その軌跡が連続していくからであり、11世紀としたのは、とりあえず灰釉陶器の最末期〈百代寺〉様式までとするからである。

II　集落出土の土師器の様相

近年の尾張における古代の集落の調査は土師器についてもいくつかの資料を提供している。この章ではそのなかの代表的な遺跡及び遺物について紹介することにする。

a　清洲城下町遺跡[10)]

清洲城下町遺跡は西春日井郡清洲町に存する中世から近世にかけての清洲城及び城下町を中心とする遺跡であるが、その下層より6世紀後葉から12世紀にかけての集落が検出された。この集落は掘立柱建物数棟、竪穴住居70軒以上で構成される濃尾平野における平均的な集落遺跡であると考えられる。9世紀代に一時遺構がなくなるが、10世紀に再び掘立柱建物を中心とする遺構が出現する。竪穴住居などからはかなりまとまった資料が出土している。土師器についても量的に安定しており、その変遷を知る上で良好な資料が得られた。それらは遺構、遺物のあり方などから大きくA・Bの2期に分けられ、さらにA期は6小期に、B期は3小期に分けられている。なお、黒褐色砂質土層はB－2期の掘立柱建物を覆う包含層である。

b　朝日西遺跡[11)]

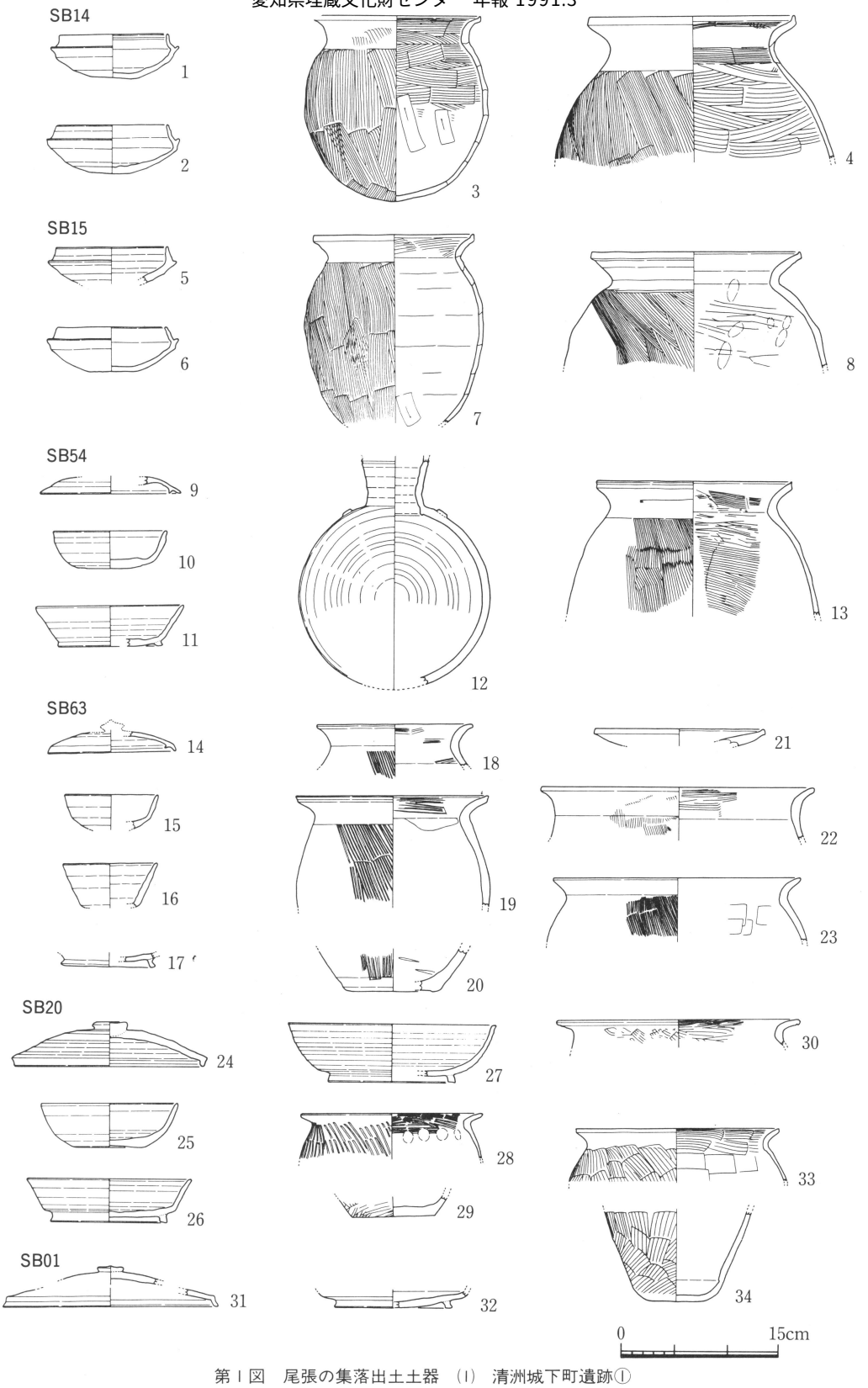
朝日西遺跡は清洲町に存する中世を中心とする遺跡であるが、その遺構のなかに10世紀に遡る遺構群が見つかっている。10世紀後半～11世紀の集落出土の資料は余り多くなく、貴重な資料であると言えよう。

c　名古屋城三の丸遺跡[12)]

名古屋城三の丸遺跡は名古屋市中区にある近世名古屋城三の丸郭内の武家屋敷を中心とする遺跡であるが、下層からは弥生時代から中世の遺構が検出された。古代の遺構は掘立柱建物5棟、竪穴住居約50棟を中心とするものであるが、出土遺物のなかに緑釉陶器及び素地ではあるが古いタイプの緑釉四足壺などが出土しており、より拠点的な集落の可能性もある。遺物は竪穴住居などから良好な一括資料も出土している。時期的には7世紀末から10世紀のもので、3期に区分されている。出土資料のなかで中心となるのはII－2期（8世紀中葉から9世紀前葉）とII－3期（9世紀中葉から10世紀）である。

d　大渕遺跡[13)]

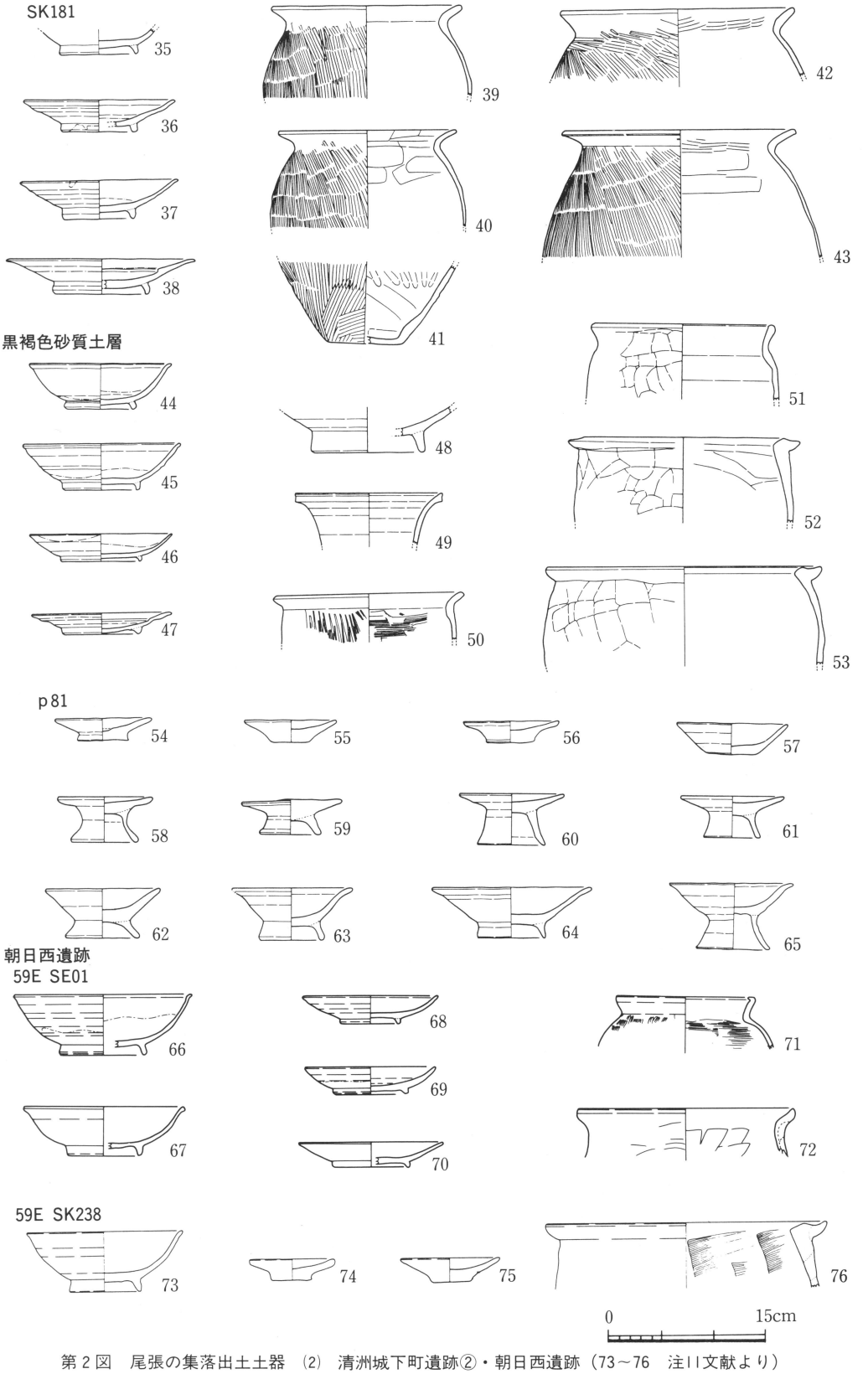
大渕遺跡は海部郡甚目寺町にある、主として古代から中世の集落遺跡で住居はすべて掘立柱建物で構成されている。最も古いものは6世紀後葉ぐらいのものもある。愛知県下においてこの時期に掘立柱建物のみで構成される集落遺跡はほとんどない。遺物の面から見ると大渕遺跡は掘立柱建物で構成されるため、まとまった遺物は井戸出土の資料などが中心となるが、土師器は完形の甕もいくつかあり、比較的よく復元され、特に7世紀前後のものは良好な資料が多い。



第Ⅰ図　尾張の集落出土土器　(1)　清洲城下町遺跡①

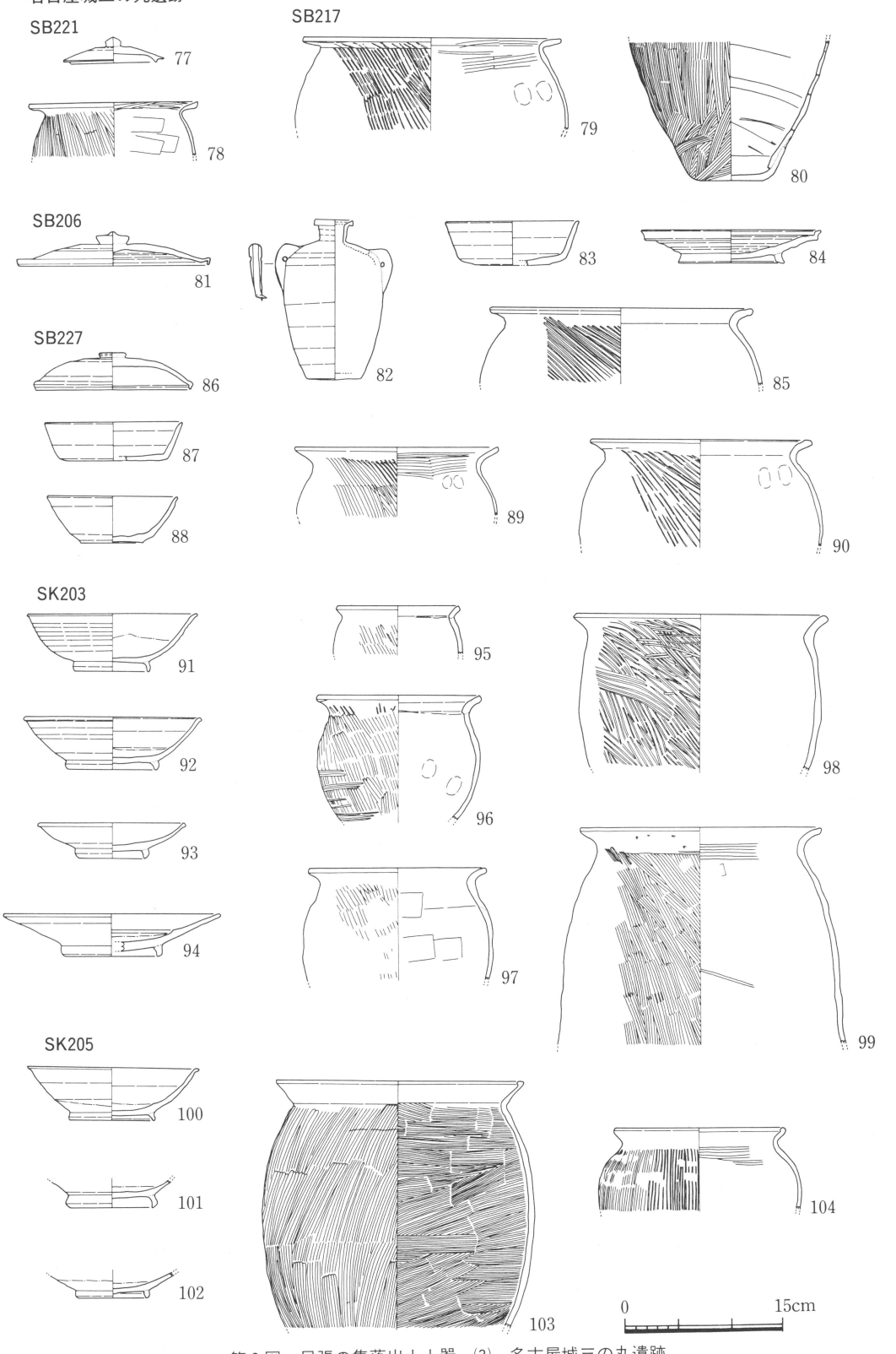
清洲城下町遺跡

SK181

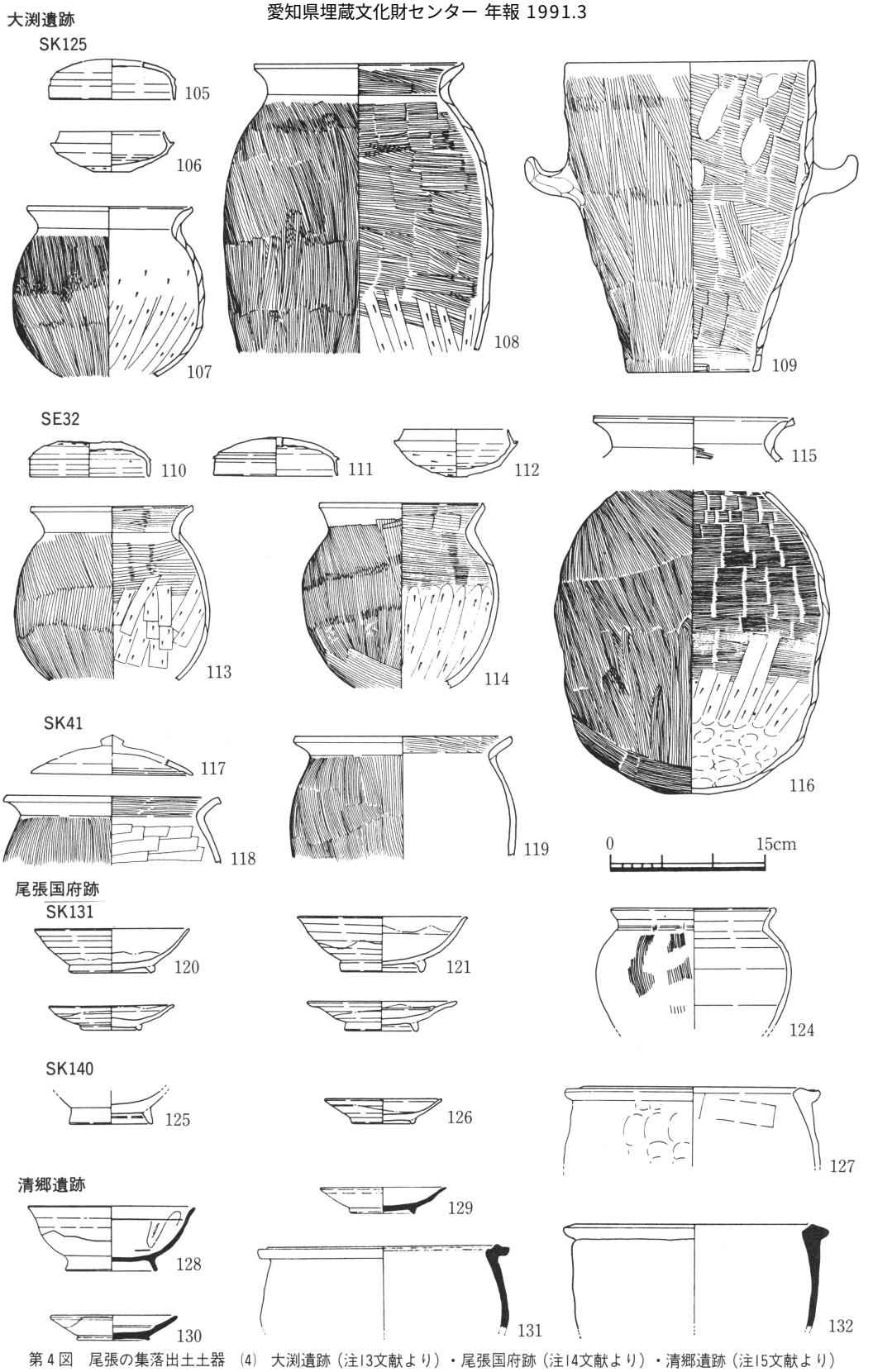


第２図　尾張の集落出土土器　(2)　清洲城下町遺跡②・朝日西遺跡（73～76　注11文献より）

名古屋城三の丸遺跡



第3図　尾張の集落出土土器 (3)　名古屋城三の丸遺跡



第4図　尾張の集落出土土器　(4)　大渕遺跡（注13文献より）・尾張国府跡（注14文献より）・清郷遺跡（注15文献より）

e　尾張国府跡[14)]

尾張の国府は稲沢市国府宮を中心とする地域が推定されているが、遺構上ではっきり建物等は見つかっていない。ただ、出土する遺物のなかには緑釉陶器や陶硯などが多数みられ、国府の存在が強く推定されているところである。遺構は奈良時代に遡るものは少なく、中心となるのは平安時代の後半である。調査は継続的に実施され、遺物も所々で検出される土坑等のなかに良好な資料がある。

f　清郷遺跡[15)]

清郷遺跡は一宮市に存する遺跡で昭和37年の調査で初めて古代の土師器が注目され、“清郷型”甕（鍋）が提唱された遺跡である。土師器といっしょに灰釉陶器も多数出土しており、時期的には10世紀以降に下るものであるが“清郷型”甕（鍋）はこの時代の中心的な器種となった。

Ⅲ　各時期の土師器の変遷

当該期の土師器は供膳具として杯・皿・高杯が11世紀代を中心にみられる。これらはすべてロクロを使ったもので一部は12世紀代までのこる。それ以外は全て煮炊具で、甕・鍋・甑がある。鍋・甑は少ないが、甕は全出土土器の中でもかなりの割合を占める。[16)]甕の形態にはバラエティーがあるが、量的にも最多く、各時期に普遍的に出土する器種としては体部が球型で小型のもの（甕Ａ）と長胴型丸底のもの（甕Ｂ）、長胴型平底のもの（甕Ｃ）がある。そこでこれらの器種の組合せと型式変化を中心として６世紀後葉から11世紀末までをⅣ期９小期に分類し、各時期の様相を見てみる。

１）Ⅰ期

Ⅰ期は甕では甕Ａ、甕Ｂが中心となる時期である。両者とも口縁部の形態及び技法で共通する要素が多いが、それらの変化によりⅠ期はさらに３小期に細分される。他の器種としては甑、鍋がある。

Ⅰ－１期

Ⅰ－１期の資料として清洲城下町ＳＢ14、大渕ＳＫ125等がある。

甕Ａは口径約15㎝で体部がほぼ球形をなし、口縁部は強く屈曲して立ち上がる。口縁端部はシャープに上へつまみ上げる。調整は外面を縦もしくは斜め方向の細かいハケメで調整し、口縁部外面は横ナデで仕上げている。内面は基本的に細かい横ハケメで調整し、体部内面下半は縦方向のヘラケズリを行う。甕Ｂは体部が少し長胴である以外は口縁部の形態、調整技法等は甕Ａと同じである。甑は体部が逆「ハ」の字状になり２つの把手がつくもので、底部には帯状の粘土を張り付ける。調整技法は甕と同様細かいハケメ調整を用いる。鍋も口縁部の形態等は甕と共通していて２つの把手を付けている。

Ⅰ－2期

Ⅰ－2期の資料として清洲城下町ＳＢ15、大渕ＳＥ32等がある。

甕Ａは口縁部の屈曲がやや弱くなり、少し直線的になる。口縁端部のつまみ上げも小さくなりシャープさがなくなる。調整技法は基本的に同じであるが少し粗雑になる傾向にある。甕Ｂも同様の傾向にあり、体部内面のハケメ調整の代わりに指ナデ等で調整するものもある。甑はⅠ期と比べ大きな差はない。

Ⅰ－3期

Ⅰ－3期の資料として清洲城下町ＳＢ54等がある。

この時期になると甕Ａ・甕Ｂは口縁部の屈曲がほとんどなくなり、直線的で、口縁部の長さも短くなる。端部のつまみ上げは短くなり痕跡程度になる。調整もさらに粗雑となる。

2）II期

II期は甕Ｃが中心となる時期である。口縁部の形態などから3小期に細分が可能である。甕Ａ、Ｂも若干残るが量的には少ない。他の器種として甑があるが量的には須恵器の甑が増加してくる。甑の形態はⅠ期と大きな変化はない。

II－1期

II－1期の資料としては清洲城下町SB63、名古屋城三の丸SB221、大渕SK41が挙げられる。

この時期には甕Ａ・Ｂも若干残る。口縁端部のつまみ上げは痕跡を残すものも見られるが、78のようにつまみ上げをせず、外に膨れるものもある。甕ＣはII－1期では器壁があまり薄くなく、ハケメも比較的細かい。口縁部は緩やかに外反する。体部内面の調整は新たに横方向のヘラ削りをもちいるようになる。この時期を中心として供膳具で搬入品の暗文土師器が極少量出土する。器種は杯Ａ、ⅢＡ、ⅢＢ、椀Ｃ、高杯などがみられる。

II－2期

II－2期の資料として清洲城下町ＳＢ20、名古屋城三の丸ＳＢ217等がある。

この時期になると典型的な砂粒を多く含んだ胎土で、ハケメの荒い甕Ｃが出現する。口縁部は短く「く」の字状に深く折り返す。体部内面はナデやヘラ削りにより非常に薄く仕上げられている。

II－3期

II－3期の資料として清洲城下町ＳＢ01、名古屋城三の丸ＳＢ206・227等がある。

甕ＣはII－2期と比べると口縁部の「く」の字状の折り返しが弱くなり緩やかに立ち上がるようになる。底部も小さく丸みを持つようになる。技法的には大きな変化はない。この時期には三河地方でよくみられる口縁部を直角に折り返すハケメを持たない甕（甕Ｅ）も少しみられる。

3）Ⅲ期

3期も甕Cが中心であるが、それに加えて次のⅣ期に中心となる器種であるいわゆる“清郷型”と呼ばれる甕Hが出現してくる。量的にはまだ少なく普遍的な現象ではない。

Ⅲ期

この時期の資料として清洲城下町ＳＫ81、名古屋城三の丸ＳＫ203等の資料がある。

甕Cは口縁部がやや肥厚し長さも長くなる。「く」の字状の屈曲も緩やかとなる。調整技法等については変化はない。甕Hは概ね口縁部を垂直に折り返すものがほとんどである。体部は浅く砲弾型でハケメで調整せず、ナデ・削りで調整するもので、器壁は厚味をもち、外面は全面に黒くススが付着することが多い。

4）Ⅳ期

Ⅳ期は甕Cがほとんどみられなくなる。かわって中心となるのは甕Hである。それに加えて「伊勢型鍋」と呼ばれる甕Ｉもみられるようになる。また特徴的なのはⅣ期になってロクロ土師器の供膳具がみられることである。Ⅳ期は甕Hの口縁部の形態や供膳具の有無などから2小期に細分される。

Ⅳ－1期

Ⅳ－1期の資料として朝日西59ＥＳＥ01、名古屋城三の丸ＳＫ205、尾張国府跡ＳＫ131等の資料がある。

甕Hが中心となるが、甕Ｉも量的に増加する。甕Hは口縁部の形態にバラエティーがあるが、現段階では資料的な制約から明確に変化を位置付けることはできない。おおよその変化の方向としては口縁部の折り返しが鈍角的なものから鋭角的なものへ、直線的なものから屈曲したものへという変化をたどるようである。甕Ｉは体部が球胴型で口縁端部を折り返すもので、最も古いタイプのものである。[17)]

Ⅳ－2期

Ⅳ－2期の資料として清洲城下町黒褐色砂質土層、朝日西遺跡59ＥＳＫ238、尾張国府跡ＳＫ140等がある。

こほ時期は甕Hは口縁部が屈曲するものが多い。甕Ｉは量的にも多くなり中世には甕Hをしのいで煮炊具の中心となるものである。供膳具はⅣ－2期になると各地で出現し一般的な器種になってくるが、量的には多いものではなく主たる供膳具とはなり得なかったものと思われる。

5）年代観

土師器において直接年代を示す材料は持ち合わせていない。従って、実年代は須恵器との共伴関係から推定する方法を用いざるをえない。須恵器の年代観についてはこの地域は

猿投窯編年がほぼ確立しており、実年代も付されている。[18]それによるとⅠ－1期はほぼ6世紀末から7世紀初頭のH－44号窯期を含むと考えられるが、須恵器杯H（蓋杯の身）の口径がやや大きく、それより遡る6世紀後半の年代が考えられる。Ⅰ－2期はこれにつづく年代で7世紀前半ぐらいの年代が考えられる。Ⅰ－3期はⅠ－17号窯期で7世紀後半代が与えられる。Ⅱ期は平城Ⅰ式の土師器供膳具がみられることから7世紀末から8世紀初頭が始まりとなり、Ⅱ－1期は8世紀前葉、Ⅱ－2期が8世紀中葉、Ⅱ－3期が8世紀後葉から9世紀前葉の年代が与えられる。Ⅲ期は灰釉陶器の形態などから9世紀中葉から10世紀前葉が想定される。Ⅳ期は10世紀中葉から11世紀頃にかけてである。

Ⅳ　尾張における土師器の特色

1）供膳具に関する問題

いま尾張における土師器の変遷をみてきたが、畿内や東国など他の地域と比較して、最も相違しているのは土師器の供膳具の欠落であろう。

尾張の場合、6世紀前半頃に土師器の椀、高杯などがみられて以来、11世紀に至るまで土師器の供膳具はほとんど「ない」といってよい。少なくとも一般的な器種として在地で生産して、供膳具に加わるということはない。尾張の食膳具は木製品を除外して考えた場合、古墳時代の終わりから古代末まで約500年間も陶器である須恵器・灰釉陶器で全てを占めてしまう。これについては三河や美濃地方でも同様なことが言える。このような現象は他の地方では全く例を知らない。西日本では須恵器生産の上昇にともない須恵器の占める割合が大きくなり、土師器の供膳具が減少する時期がある。ところがこれらは一時的なことで、8世紀後半ごろになると再び土師器は増加することになる。

この須恵器の占める割合の変化の大きな理由には窯業生産の転換の問題もあるであろう。8世紀前半頃には須恵器生産は全国的に広がり一国一窯あるいは一郡一窯といった分布となる。しかし8世紀後半には西日本ではほとんどの地域で須恵器生産が衰退する傾向にある。この背景として窯を構築して多量の燃料を必要とする生産コストの問題で説明する考え方が成り立つ。確かに大量生産・大量消費ということを考えたら肯首される見解である。しかし、このような現象を単に須恵器生産に内在する問題のみに捉らわれず、土師器自体のあり方から説明しようとする見解もある。[19]平城宮内では“宮外”と比べて土師器の割合が高い。これは律令的な官人制度に深く関わるものであるが、この様な土器のあり方を“宮的な”土器様相ととらえ、8世紀後半からの土師器の再進出をこの宮的な土器様相が地方にも波及した結果、須恵器の衰退、土師器の増加につながったとするものである。土師器の用途をより積極的に評価し、土器様相の変化の背景に政治的な側面を見いだそうとする見解である。

尾張の場合を見てみると土師器の供膳具はこの時期にはほとんど見られず、11世紀を待たないと出現しない。これは単に一般集落のみではなく尾張国府の調査でも同様である。

ところが注目されるのは“供膳形態がみられない”状況のなかでも若干出土する時期があるということである。それは在地産のものではなく、搬入品と考えられる土師器の一群である。これらは暗文を持つものもあり、胎土などから畿内産と思われるものである。[20]搬入品土師器がみられる時期は、ほぼ8世紀の前半代に限られている。このような類例はさらに増えるものと思われるが、現状では各遺跡とも出土量が数点と少ないため意味付けは難しい。いずれにしても7・8世紀という時期は律令体制の確立していった時期であり、尾張における土師器供膳具のあり方は、もう一度、律令体制における土師器のもつ意味を含めて検討してみなければならない問題であろう。

供膳具では11世紀頃になるとロクロを使った土師器が見られるようになる。このような現象は“柱状高台”を持つものなど東日本に共通する現象である。東海地方でも三重県の斎宮跡[21]や岐阜県、静岡県[22]でもいくつか見つかっており、かなり広い地域で出現するようである。但し、尾張の場合、量的には多いものでなく、出方も特殊な出方をすることがしばしば見られる。たとえば清洲城下町遺跡[23]のP81からは21点の杯・皿・高台付杯・高杯がほぼ完形で出土している。[24]それらには赤褐色で土師質のものと胎土が精良で白色のものとがあり、ススが付いているものもある。P81はこれ以外の遺物を全く含まないことから、何等かの形の祭祀行為にともなうものと考えられる。このようなロクロを使用した土師器の一群は供膳具に残るでもなく12世紀代までで消滅してしまう。

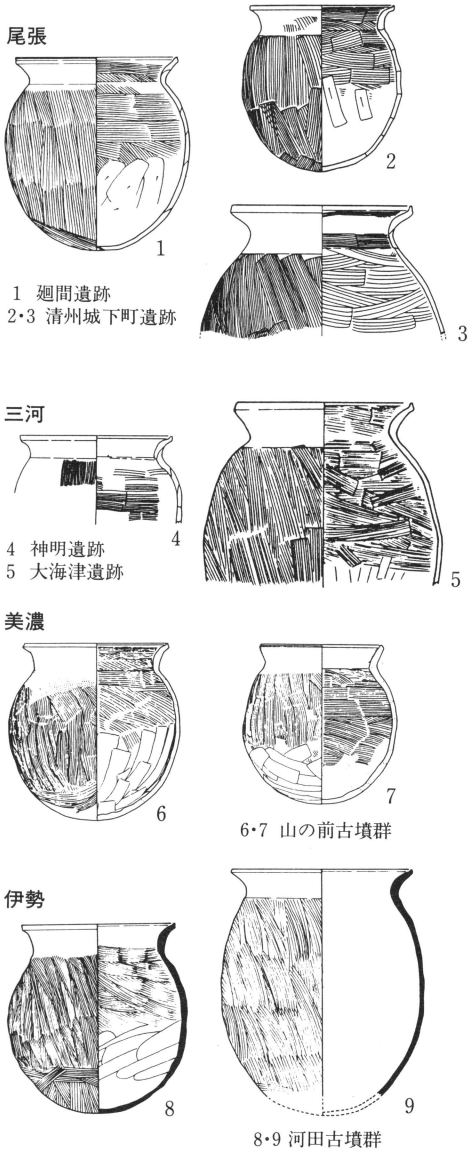
2）煮炊具の変遷

煮炊具はほとんどを土師器で占める。土師器の甕は一定量、集落遺跡から出土する。最も普遍的に出土するのは、長胴甕であり、その変化もほぼつかめるようになってきた。

全国的にみてもすでに「某国型」という形で、各地で旧国単位ぐらいで甕が識別できるようになってきている。尾張の場合を見てみると、かなり特徴的な甕がみられ、「某国型」を設定できる可能性もある。

いままで土師器甕の変化を見てきたが、その変遷を概観すると尾張では大きく甕が変わる時期が4回見られる。そこで、それぞれの画期を順番に見ていくことにする。

まず、はじめはⅠ期における口縁端部をつまみ上げる特徴的な口縁を持つ甕A・Bの出現である。この甕は口縁部の特徴以外に体部外面をたて方向の細いハケメで調整し、内面は口縁部も含めた横方向のハケメを有し、内面下半分をたて方向のヘラケズリで調整するという特徴を持つ。なお、この口縁部の形態は鍋にも共通する。7世紀になると口縁部のつまみ上げは徐々に退化し7世紀後葉になると痕跡程度になり、細かいハケメによる調整



第5図 「東海型」甕（S＝1/8）

も粗雑化する。管見ではこのような形態のものは6世紀前半には見られなかったもので6世紀中葉以降に出現したものと思われる。この甕がどの様にして出現したのかはまだわからないが、いま仮にこのような形態のものを「尾張型」と呼んでもよいのかも知れない。ただし、形態的によく類似した甕が伊勢・三河・美濃などにも見られる。伊勢のものはすでに「伊勢型」と呼ばれており[25]、さらにこれは「南勢型」と「北勢型」に分類が可能であるという[26]。いわゆる「北勢型」については安定したものではないため、今回は「伊勢型」として論を進めていく。「伊勢型」の特徴は河田古墳群出土遺物[27]のように口縁部のつまみ上げや体部の調整技法など尾張のものとほとんど同じである。両者の違いを強いてあげれば「伊勢型」は主流を占めてはいるが「別種の甕」[28]も種々存在するのに対し尾張の場合はほとんどのものがこの形をとる。形態からみれば口縁部内面の横ハケメが尾張のものはほとんどついているのに対し、「伊勢型」はないものもかなり見られるという程度のものである。これらは例外も多々あり、形態・技法で個々に区別するのはむずかしく、積極的に「尾張型」・「伊勢型」と区分するのには躊躇を感じる。いわゆる「北勢型」とされたものについては近江の影響があるらしく[29]、口縁部の形態は似ているが体部外面をヘラ削りしており、地域的な変容がみられるようである。また、三河の例も岡崎市神明5号住居址出土遺物[30]・大海津遺跡出土遺物[31]等はほぼ尾張と同じ様な形態のものである。三河ではこのタイプが中心になるのではなく、口縁部がそのまま伸びる甕など多様な甕があり、はっきりつかめない。美濃においては各務原市山の前1号墳のなかから完形でこの甕が出土している[32]。このような甕は宇田遺跡でも見られ[33]、美濃においても一般的な形態であ

ったようである。ただ、時期が7世紀に下がるが、山の前2号墳からは北勢地方にみられたような体部下半分をヘラ削りするものも出土している。年代についてみてみると伊勢、三河のものは6世紀中葉[34]、美濃の例は6世紀後半とされており[35]、伊勢・三河のものは現在・尾張で検出されているものより若干古く考えられている。しかし、尾張のものも6世紀中葉がはっきりせず、もう少し古く上がる可能性もある。このように見てくると尾張・三河・伊勢・美濃地方では6世紀後半代にきわめてよく似た形態の甕が出現していたことになる。北勢地方や美濃地方では底部をヘラ削りするという地域差[36]もあるが、“口縁部を上につまみあげ、口縁部から体部内面を横方向のハケメで調整し、内面下半分をヘラ削りするようなもの”を大きく「東海型」として設定した方がよいのかもしれない。「東海型」は形態的には畿内と近く、畿内の都城遺跡でも見られることから、この地域と畿内とのつながりは深い[37]と考えられる。

ところが、その後の状況は違ってくる。第2の転換期はII期の7世紀から8世紀にかけてである。II期ではそれまでの甕A・Bにかわって小平底で極めて長胴の甕Cが出現する。甕Cは口縁部を「く」の字状に折り返し、体部外面を斜めから縦方向の荒いハケメで調整し、体部内面はナデやケズリで薄い器壁に仕上げるのを特徴とする。口縁部は8世紀代には鋭角的に折り返すが9世紀代のものの折り返しは緩やかになる。甕Cの出現については甕Bの発展と考えるのか、まったく別の系譜のものと考えるのか、現状では結論は下し得ない。口縁部内面の横ハケメを残す点などは前代と同じであるが、底部は小平底となり、外面のハケメは荒く砂粒を多く含んでおり、器壁は極めて薄い。このような形態のものは畿内にはみられず、むしろ東の影響等を考えた方がよいのかも知れない。いま仮に、この甕を「尾張型」として設定しておきたい。[38]美濃においては甕A・Bの7世紀代に見られる型式変化および甕Cの出現と型式変化は尾張のそれとよくにており、両国の関係は深いといえるであろう。一方、伊勢においては技法や形態の上で大きな変化はみられず、前代からの型式発達が続き[39]底部は丸底で、口縁部のつまみ上げも巻き上げのような形で残っていく。この様な「東海型」を継承した形態のものを「伊勢型」と呼ぶならば、「伊勢型」甕はずっと平安時代まで続いていき、途中で大きな転換を見せた尾張とは対照的な流れとなる。三河の場合も7世紀頃になると別の形態をとる甕となり、8世紀代には口縁部を鋭角的に折り返す、ハケメを全く持たない甕（甕E）となる。このような甕は8世紀後半頃尾張でもしばしば見られるが、きわめて特徴的で、すぐ識別は可能であり、「三河型」と呼んでもよいのかも知れない。とにかく、この時期は尾張、三河、伊勢では全く別個の「某国型」の長胴甕を生み出していく。

第3番目の画期は平安時代の前葉、9世紀頃になる。III期は甕Cに“清郷型”と呼ばれ

る甕Hが加わる時期で過渡期的な様相を持つ時期である。これまで甕Cは口縁部を若干変化させながらほぼ変わることなく続いてきたが、10世紀代には衰退する傾向にある。そのころ出現した甕Hは体部をナデやケズリで調整するものでハケメによる調整は行わない。この様な特徴は「三河型」の特徴であり、口縁部の形態も「三河型」からの発展と考えた方が自然である。また、胎土分析の結果などからもこれを支持するような見解が出されている。[40]甕Hは体部があまり深くなく、甕というよりはむしろ鍋に近い形態である。伊勢についても尾張と同様に10世紀頃に長胴甕がみられなくなって行き、体部が球胴型の「伊勢型鍋」へと変化していくのである。美濃についてはこれ以降調査例も余りなく、はっきりしない。

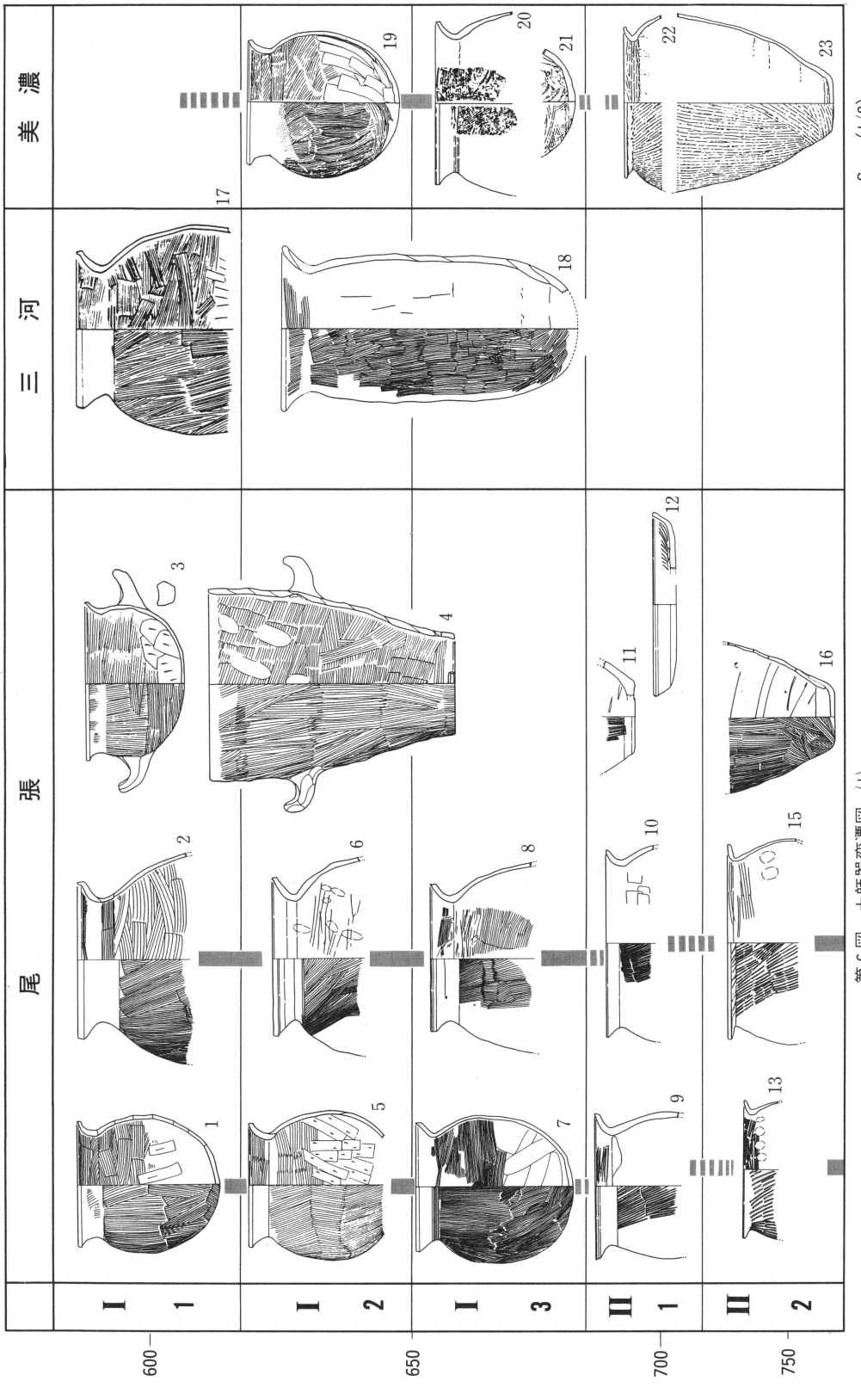
最後にⅣ期になると“長胴甕”甕Cが見られなくなり、“鍋的な”甕Hが中心となる。さらにこれに甕Iが加わる。この時期に見られる甕Iは「伊勢型鍋」と呼ばれる「伊勢型」甕を起源とする甕のうちで最も古く編年される形態である。[41]甕Iは球胴形の体部と内側に折り返す口縁端部を特徴とし、体外面は荒いハケメで調整する。甕Cの消滅により、尾張では独自の形態の甕が製作されなくなり、三河地方を起源とすると思れる甕Hを中心に、伊勢地方を起源とする甕Iが分布するのである。11世紀代には尾張や三河でも甕I「伊勢型鍋」の分布地域になる。甕Hは伊勢・尾張・三河・遠江と広範に分布するが、12世紀には衰退する。Ⅳ期のおわりの12世紀代では「伊勢型鍋」が主流となり、長く続いた“甕”から“鍋”へと変化してしまうのである。

Ⅴ　まとめ

以上、尾張とその周辺部を含めた古代土師器の様相を見てきた。これまでは調査例がないということで当該期の土師器はほとんど省みられることはなかった。しかし、近年の古代集落の調査はようやく当該期の土師器にも光を当て始めた。

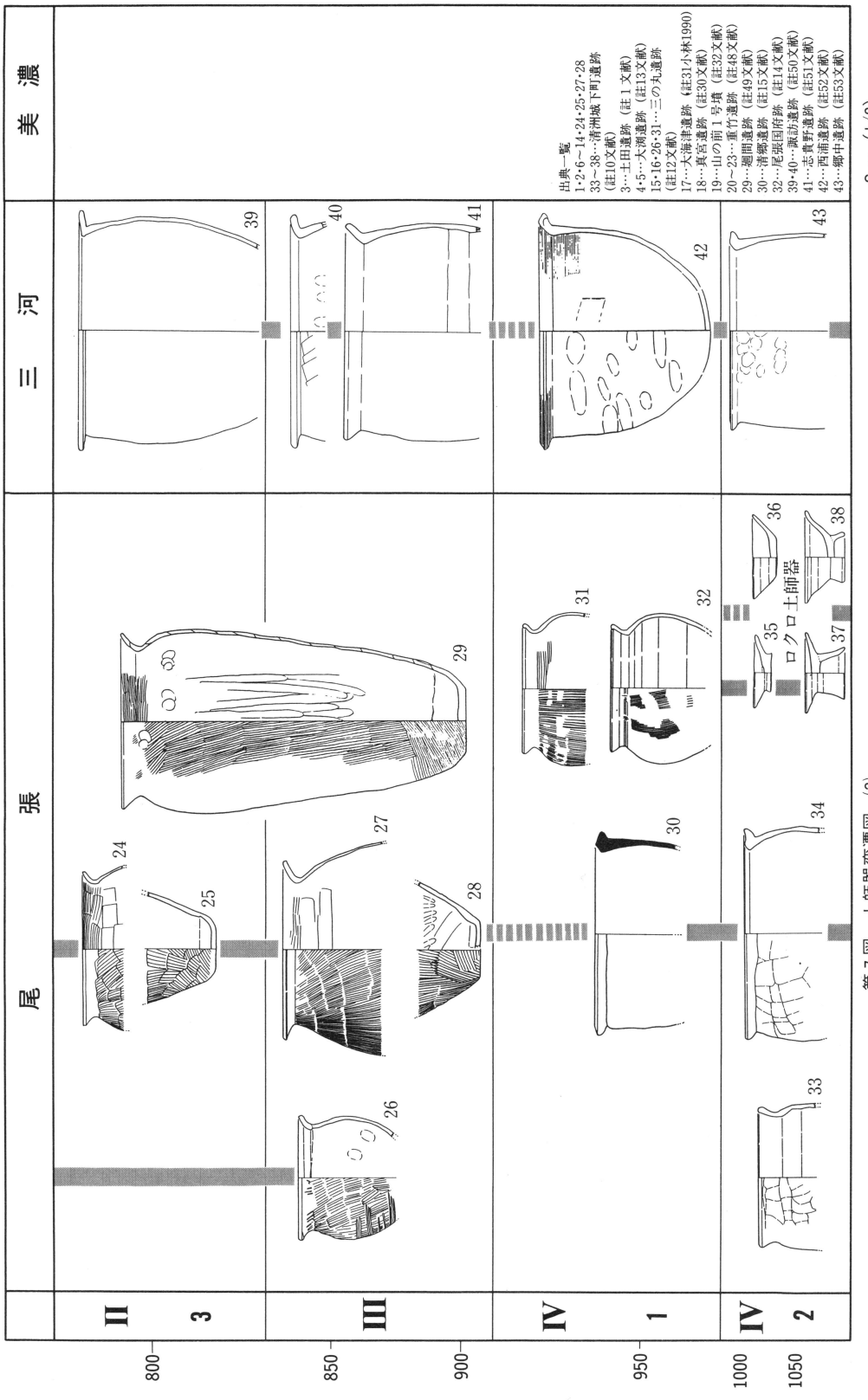
本論では尾張における古代土師器の様相をつかむためにまず、各遺跡における遺構出土資料を中心にその変遷を明らかにし、特色を抽出しようとした。その結果、6世紀後半から11世紀の間を土師器甕の組合せ及び形態から大きくⅣ時期に区分し、さらに、細かな形態の特徴から9小期に細分することができた。

また、周辺地域を含めて各時期毎に特徴的な甕の分布が変わることも看取できた。やや抽象的にまとめると次のようになる。Ⅰ期（6世紀後半から7世紀）は軽微な地域差はあるのかも知れないが東海地方西部に広く分布する共通した特徴をもつ「東海型」甕の時代といえるであろう。「東海型」甕は畿内の都城などからも出土し、畿内とのつながりも強いといえる。Ⅱ期（7世紀末から9世紀前葉）にはこの共通性が崩れ、尾張には「尾張型」甕、三河には「三河型」甕、伊勢には「伊勢型」甕というように「某国型」長胴甕の時代



第6図　土師器変遷図（1）

S＝（1/8）



第7図　土師器変遷図 (2)　　S = (1/8)

となる。「東海型」の共通性はすでに7世紀後半には崩れており、これが何に起因するのかはっきりしないが、律令体制における「国」の設置時期と近く、何等かの関係があるのかも知れない。Ⅲ期（9世紀中葉から10世紀前葉）は尾張では「尾張型」甕が中心ではあるが、三河では「三河型」甕の後えいとして甕H（鍋）が誕生しつつある。伊勢でも「伊勢型」長胴甕が衰退の傾向を示し、新しい時代の「伊勢型鍋」の祖型が形づくられる時期である。この時期は前代の「某国型」長胴甕のなかから次代の“鍋”への芽が萌え出す時期とえいえる。Ⅳ期（10世紀中葉から11世紀）は各地で“長胴甕”が消滅してしまう時期である。尾張地方では独自の「尾張型」甕がなくなり、それぞれ搬入品と思われる“三河の”甕H[42]と“伊勢の”甕Ⅰが競合して存在するのである。Ⅲ期に芽生えた“鍋”が10世紀後半頃から国を越えて動き出し、11世紀代には複数の国にまたがって分布するようになる。土師器甕から見ても“中世への胎動”は始まっているのである。その後、甕Ⅰ（「伊勢型鍋」）のみが残り、唯一の煮炊形態として主流となる。「伊勢型鍋」は12世紀から14世紀頃まで伊勢から尾張、三河の煮炊具のほとんどを占めてしまい、その分布は中世における広域流通“商品”として太平洋岸を中心に鎌倉まで広範な地域に及ぶ。[43]

見方を変えてこの変遷を遺構との関係及び用途に関して見てみると、Ⅰ期は基本的には竪穴住居でつくり付けのカマドが明瞭にみられる時期である。甕Bの胴部はやや長胴で、カマドに合わせたやや長胴の形態の甕の出現ということがいえる。ところが、Ⅱ期になるとⅠ期のようなカマドの構造物が見られなくなり、床面に焼土が散っているのみという状況や竪穴住居の一辺が少し突出し、そこに土師器甕の底部のみを伏せた状態で据えているという状況[44]が見られる。土師器甕Cは胎土に砂粒を多く含む薄手のものとなり、胴部も大きな長胴となる。この様な胎土や形態の変化は熱の伝導などとも大きく関わってくることから、煮炊き形態に変化があったと考えられる。この地域には移動式のカマドはないが、何等かの竪穴住居の床面に接しない構造物で、しかも大きな長胴を支えるものが存在したのであろう。または住居外の炉も考えられるが、現在検出されていない。Ⅲ期は竪穴住居と掘立柱建物が両方存在する時期で、甕も“長胴型”と“鍋的な”ものが存在する。この時期からに煮炊き形態も掘立柱建物に適したような、そこの浅い“鍋的な”甕へと変化するのかも知れない。Ⅳ期になると竪穴住居はなくなり、甕から鍋へと変化していくのである。この甕から鍋へという変化は単に形態上の問題のみならず、住生活・食生活をも含めた奥の深い問題であり、より慎重に考えなければならない問題でもある。

以上、甕を中心として見てきたが、もう一つ問題点として残るのは土師器供膳具の欠如である。これは他の地域と比較して大きく異なる点である。三河や美濃も含めた尾張周辺地域では古代の猿投窯・尾北窯・美濃須衛窯といった巨大な生産地を背景にもつ地帯の特

殊性として片付けることができるかも知れない。しかし、土師器供膳具を用いることは8世紀前半頃においては特別な意味があり、律令体制の地方の浸透とも関連付けられて考えられる要素である。[45]尾張における土師器の欠如と8世紀前半頃の少量の畿内産土師器の存在は改めて、律令体制における土器のあり方を考える上で参考になるであろう。同じ頃、東国では土師器の赤彩等の行為を行う。これも律令制の浸透と関連して考えられている。[46]また、該期は「律令的土器様式」の頂点の時代である。この概念の構成要素の一つに土師器と須恵器の互換性という考え方[47]がある。この〈互換性〉という意味についてももう一度再検討してみる必要があるかも知れないが、今回は事実を指摘するにとどめる。

今まで尾張とその周辺部を含めて、土師器の変遷及び供膳具、煮炊具の特色について考えてきたが、種々の問題が残されたままになっている。時期区分やそれぞれの画期の背景などさらに検討しなければならない課題は多いが、本論はアウトラインをつかむことを主眼としていたため、それらの課題については別の機会に考えてみたいと思う。

(1990．2．20)

謝辞

本論を成すにあたり池本正明・宇野隆夫・鈴木正貴・野末浩之・前田清彦・宮腰健司の各氏から種々の御教示を得た。末尾ながら記して謝意を表したい。

註

1）例えば土田遺跡（(財)愛知県埋蔵文化財センター1987『土田遺跡』、1991『土田遺跡II』）、阿弥陀寺遺跡（(財)愛知県埋蔵文化財センター1990『阿弥陀寺遺跡』）、森南遺跡（甚目寺町教育委員会1990『森南遺跡』）などがある。

2）佐藤公保1986、1987「中世土師器研究ノート（I）、(II)」『(財)愛知県埋蔵文化財センター年報』昭和61、62年度

3）わずかに器種分類を中心とした池本正明1990「土師器煮沸具について」『志貴野・小島遺跡』(財)愛知県埋蔵文化財センター　などが見られるのみである。

4）西弘海1982「土器様式の成立とその背景」『小林行雄博士古稀記念論文集』

5）奈良国立文化財研究所1976『平城宮発掘調査報告VII』、1977『飛鳥・藤原宮発掘調査報告II』

6）宇野隆夫1981「白川北殿北辺の土器・陶磁器」『白川北殿北辺の調査』京都大学埋蔵文化財調査報告書IIなど

7）この成果は石川考古学研究会・北陸古代土器研究会1988『シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題』等に盛り込まれている。

8）(財)長野県埋蔵文化財センター1989『吉田川西遺跡』、1990『中央道長野線関係埋蔵文化財発掘調査報告書－総論編－』

9）城ヶ谷和広1990「清洲城下町遺跡下層出土土器の検討」『清洲城下町遺跡』(財)愛知県埋蔵文化財センター

10）(財)愛知県埋蔵文化財センター1990『清洲城下町遺跡』

11）(財)愛知県教育サービスセンター1984「朝日西遺跡」、1985「朝日西遺跡II」『年報II、III』

12）(財)愛知県埋蔵文化財センター1990『名古屋城三の丸遺跡（I）』

13）(財)愛知県埋蔵文化財センター1991『大渕遺跡』

14）稲沢市教育委員会1983『尾張国府跡発掘調査報告書（V）』など

15）一宮市史編さん室1974「清郷遺跡」『新編一宮市史資料編』四

16）清洲城下町では土師器甕は全体の出土量の約20%から40%を占める（註9文献）。

17) 新田洋1985「平安時代～中世に於ける煮沸用具－『伊勢型』鍋－に関する若干の覚書」『三重考古学研究』1
18) 楢崎彰一、斉藤孝正1983「猿投窯の編年について」『愛知県古窯跡群分布調査報告書』Ⅲ
19) 宇野隆夫1989「結び」『古代と中世の歴史と社会』
20) 清洲城下町遺跡のものについては奈良国立文財研究所巽淳一郎氏、玉田芳英氏、奈良県教育委員会林部均氏より御教示を得た。
21) 三重県斎宮跡調査事務所1985『年報1984』
22) ㈶静岡県埋蔵文化財調査研究所佐野五十三氏の御教示によると清水市でも同時期に見られるという。(清水市郷土研究会1981『静岡県清水市廬崎遺跡発掘調査概要報告』)
23) 註10文献
24) 岐阜市教育委員会内堀信雄氏より岐阜市内でも清洲城下町遺跡の例と同様、数十点がまとまって出土しているとの御教示を得た。
25) 小笠原好彦1980「近畿地方７・８世紀の土師器とその流通」『考古学研究』27－２
26) 西口寿生1983「土師器の地域色」『文化財論叢』
27) 多気町教育委員会1974『河田古墳群発掘調査報告』Ⅰ
28) 註26文献
29) 註26文献
30) 新編岡崎市史編さん委員会1989『新編岡崎市史』16
31) 愛知県教育委員会他1989「大海津遺跡」『愛知県埋蔵文化財情報』４・小林久彦1990「古墳時代後期の土師器について」『見丁塚遺跡』豊橋市教育委員会
32) 各務原市教育委員会1990『山の前１・２号古墳発掘調査報告書』
33) 岐阜市教育委員会1975『宇田遺跡発掘調査報告書』
34) 伊勢については註26文献、三河については註31小林1990による。
35) 註32文献
36) 地域差だけでなく、さらには時間差という視点も考えられる。体部外面下半を削るものは山の前２号墳のように７世紀に下がる時期的に後出の現象かも知れない。
37) 註26文献
38) 本文中では「東海型」・「尾張型」・「三河型」などと型という言葉をよく用いたが、この型という言葉の内容は曖昧で“特徴的にみられる”といったような意味で使用している。これは畿内地方や東国地方等の他地域と比較し、この地域の土器生産をも含めた土器の総体的理解を深める意味でも、敢えてその特徴的な甕を「型」として把握して、その動向を検討しようとしたからである。
39) 註21文献
40) 胎土分析の結果から、甕Ｈは産地として濃尾平野、西三河、静岡等が想定されている(鈴木正貴1990「土器胎土重鉱物分析報告」『清洲城下町遺跡』㈶愛知県埋蔵文化財センター)。型式変化がスムーズにたどれる点などを考えると産地として三河地方が有力であり、それが尾張にもたらされたものとも考えられる。
41) 新田洋「三重県における古代末～中世にかけての土器様相」1988『マージナル』９
42) 胎土分析の結果などから、全体的に三河の土器が濃尾平野地域にもたらされるという現象はみられるが、逆はほとんどないという一方通行的な土器の移動形態の存在が想定されている(池本正明1990「自然科学的分析」『志貴野・小島遺跡』㈶愛知県埋蔵文化財センター)。このような指摘を考え合わせると初期の甕Ｈ、Ⅰはそれぞれ三河、伊勢からもたらされた可能性は高いと思われる。
43) 註41文献
44) 城ヶ谷和広1990「古代集落の展開」『名古屋城三の丸遺跡（Ⅰ）』㈶愛知県埋蔵文化財センター
45) 註19文献
46) 鶴間正昭1990「奈良時代赤色塗彩土師器の様相とその意味」『古代学研究』122
47) 註４文献
48) 関市教育委員会1984『重竹遺跡』３
49) ㈶愛知県埋蔵文化財センター1990『廻間遺跡』
50) ㈶愛知県埋蔵文化財センター1989『諏訪・杉山端城遺跡』
51) ㈶愛知県埋蔵文化財センター1990『志貴野・小島遺跡』
52) 一宮町教育委員会1987『西浦遺跡の調査』
53) 豊川市教育委員会1989『郷中・雨谷』

天正地震下層の出土遺物
――清洲城下町遺跡90Ｄ区出土遺物の検討――

鈴木　正貴

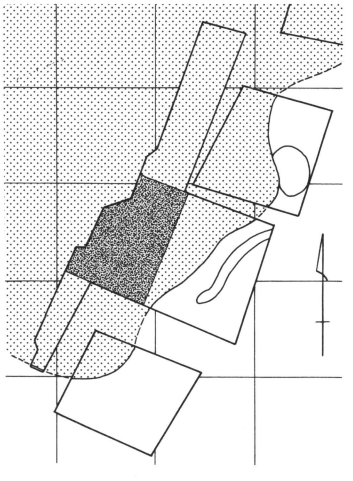
１．はじめに

愛知県西春日井郡に所在する清洲城下町遺跡は16世紀を中心とする全国屈指の城館遺跡であり、従来三重の堀を掘削した1586年を境に前期と後期に分けて遺構を論じていた。しかし、既に拙稿[(1)]で示したように全ての画期が1586年に位置付けられるか否かは疑問があり、前期の遺物群の様相・後期の遺物群の様相を改めて検証し直す必要がある。今年度調査した90Ｄ区[(2)]では、1586年に発生した天正地震によって吹き上げられた砂を多量に確認し、この砂に覆われた堆積層から多数の遺物が出土している。加えて、さらに下層に当たる旧流路の粘土層からは「永正五年」の卒塔婆が出土し、年代を知る上で良好な資料となっている。この90Ｄ区の天正地震の噴砂下層出土遺物を紹介することにより、1586年以前の遺物の様相を少しでも明らかにしていきたい。なお、今回は瀬戸・美濃窯産の陶磁器を中心とした陶磁器・土器類を対象とし、木製品・石製品などは別稿に委ねたい。

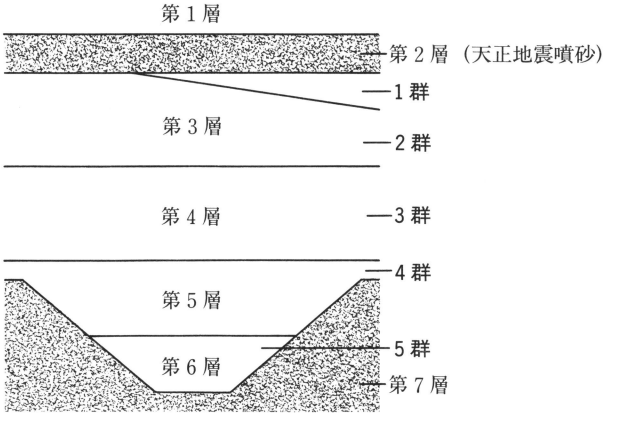
２．天正地震の噴砂と層位

今回取り上げる調査区90Ｄ区は、五条川左岸の現堤防下に位置し、直ぐ南には中堀が存在する地点である。調査区全体が旧五条川の中に入ってしまう90Ｄ区の層位を上位から説明していくと、

第１層　黄褐色シルト層などで、1794年の瀬替え時の盛土を中心とする清須城廃城以降の



第Ｉ図　90Ｄ区遺構図（Ｓ＝Ｉ／I500）
（薄いアミは旧流路、濃いアミは遺物の取上げ範囲をそれぞれ示す）



第2図　90Ｄ区層位模式図

盛土と考えられる。層厚は２ｍを越える。

第２層　黄白色砂層、地震による噴砂の堆積で、噴出量は約170㎥にのぼる。

第３層　灰色粘土層でブロック状を呈する。第４層と合わせて層厚は約１ｍである。

第４層　青灰色粘土層、第３層と第４層が五条川によって堆積した土層である。

第５層　黒灰色粘土層で、植物遺体などを含有する。旧流路が塞き止められ澱んでいた状況を示している。ここから「永正五年」の卒塔婆が出土した。最大0.5ｍの厚さを持つ。

第６層　青灰色粘土および砂層で、旧流路最下層に相当する。

第７層　灰色砂層、本遺跡の基盤層になる沖積上部砂層である。

となる。(第２図)。ここで問題となるのは第２層の砂層である。この砂層は淘汰の良い砂で断面に第７層の砂層から吹き上げた地割れ跡が認められることから、地震に起因する砂層である。また、第２層の砂層を貫いて吹き上げる砂（地割れ跡）が認められ、新旧２回の地震が発生していることが分かる。噴砂現象を起こす地震はこれまでのところ1586年の天正地震と1891年の濃尾地震などが考えられている。(3) 下層に1508年の紀年銘資料があり、これよりも前には遡らないことから、第２層の噴砂を天正地震、それを貫く砂を濃尾地震にそれぞれ起源を求めたい。

ここで取り上げる資料は、第２層以下から出土したもので確実に1586年以前の年代が与えられるものである。資料の出土層位を上位から順に紹介する。

１群　第２層・第３層間の炭化物と焼土を含む堆積からの出土遺物。第３層を掘り込む遺構埋土と考えられるがプランは判明していない。

２群　第３層（灰色粘土層）出土遺物。

３群　第４層（青灰色粘土層）出土遺物。

４群　第５層（黒灰色粘土層）出土遺物。

５群　第６層（青灰色粘土および砂層）出土遺物。

なお、1586年以前の出土遺物の様相を明らかにすることを本稿の目的とするため、用いる資料は天正地震の噴砂に確実に覆われている部分の約200㎡の範囲（第１図）から出土した資料に限定する。

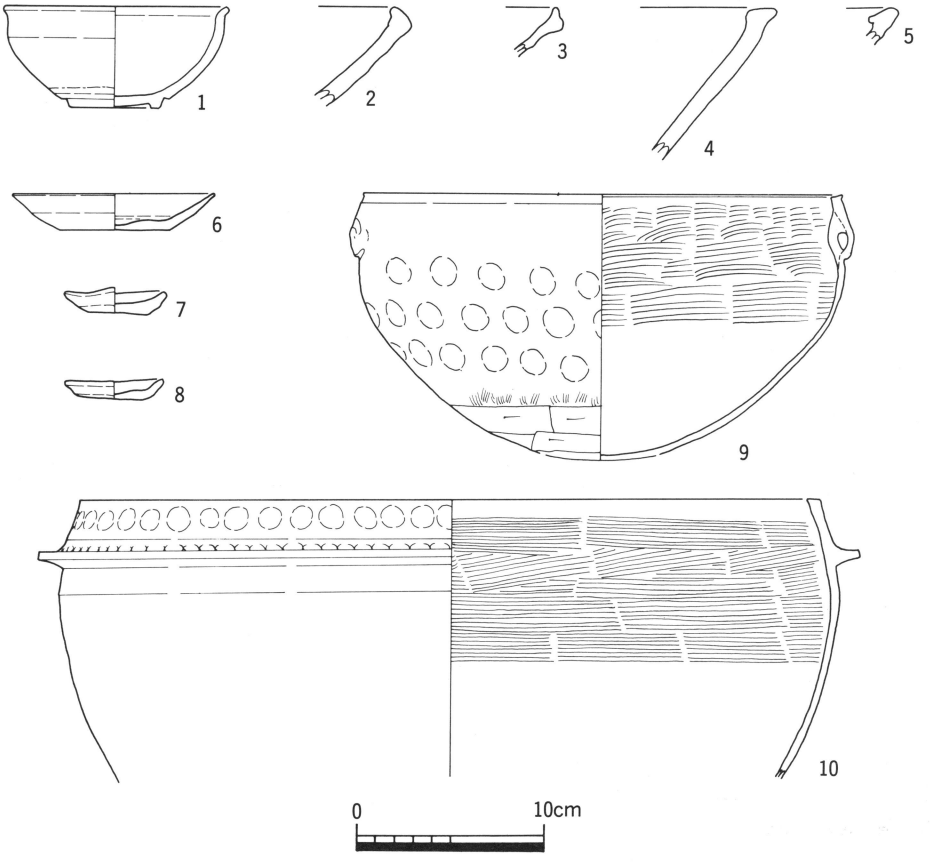
３．出土資料の紹介(4)

１群（第３図）　椀は天目茶椀と灰釉丸椀がある。天目茶椀は口縁部が括れ、化粧掛けを施した輪高台のもので窖窯後期第４段階に比定される（１）。皿は灰釉端反皿が多く灰釉丸皿も若干ある。擂鉢は口縁部が上方にやや伸びたもの（２）、口縁部が断面三角形状になるもの（３）、口縁端部が内側に張り出すもの（４）、口縁端部が内側に折り返される大窯Ⅲ期に比定されるもの（５）がある。土師器にはロクロ成形の皿（６）、非ロクロ成形の皿

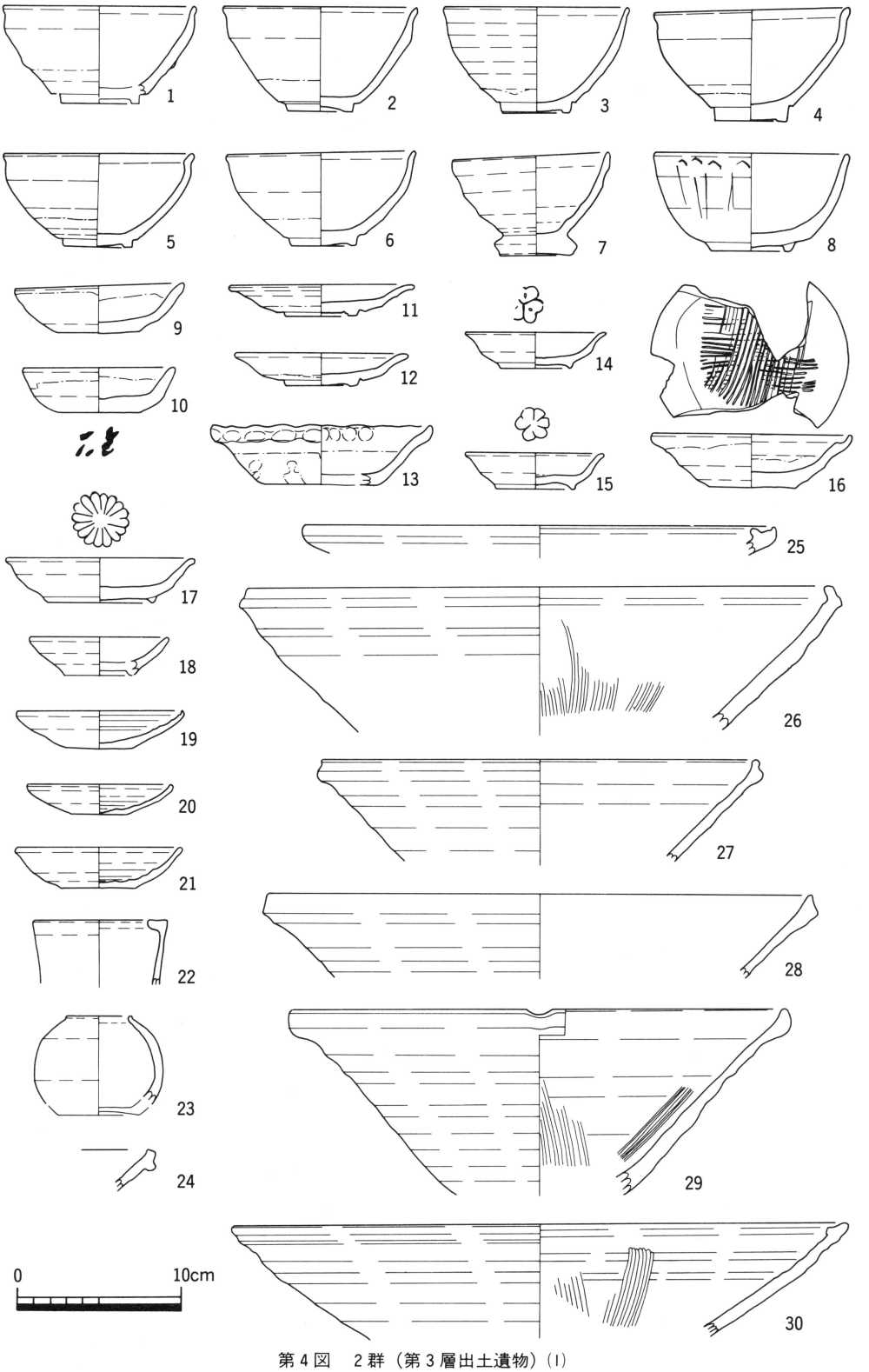
（7、8）、内耳鍋（9）、羽釜（10）がある。内耳鍋は口縁部が内湾し、内面上方にやや細かめのハケ目が施される。この他に、瓦の小破片などが若干存在する。

2群（第4・5図）　椀は天目茶椀・灰釉丸椀・台付椀・鉄釉丸椀・灰釉平椀がある。天目茶椀は外面下半部に錆釉を掛けて化粧掛けを施したものが大半を占める。口縁部が短く括れる高台幅が広い輪高台のもので窖窯後期第4段階に比定されるA類（4～6）・口縁部が直立し口唇部が玉縁状になる高台幅がやや狭い輪高台のもので大窯Ⅰ期に属するB類（3）・口縁部が直立してやや外反する内反高台のもので大窯Ⅱ期に属するC類（2）、外面下半部が露胎となり、口縁部が大きく括れる輪高台の大窯Ⅲ期に比定されるD類（1）の4類に分けられる。台付椀は底部に回転糸切り痕が残るもの（7）である。灰釉丸椀は外面に文様を施さない丸椀と、剣先状の蓮弁文を配したもの（8）、口縁部に近いところに縦線の入った椀の3者があり、いづれも大窯Ⅰ期に属するものである。

皿は灰釉縁釉皿・灰釉端反皿・灰釉腰折皿・重圏皿が主要なもので、鉄釉腰折皿（11）・灰釉丸皿（18）・灰釉卸皿（16）などが少量存在する。灰釉縁釉皿は口縁部が内湾する



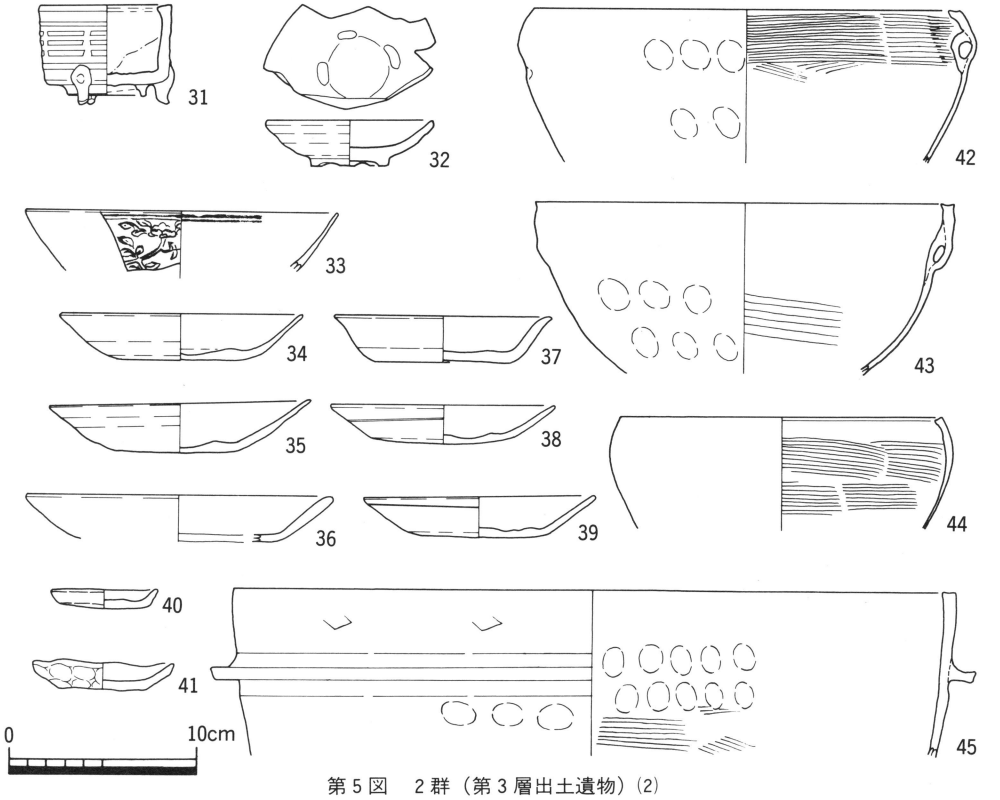
第3図　Ⅰ群（第2層と第3層の間の出土遺物）



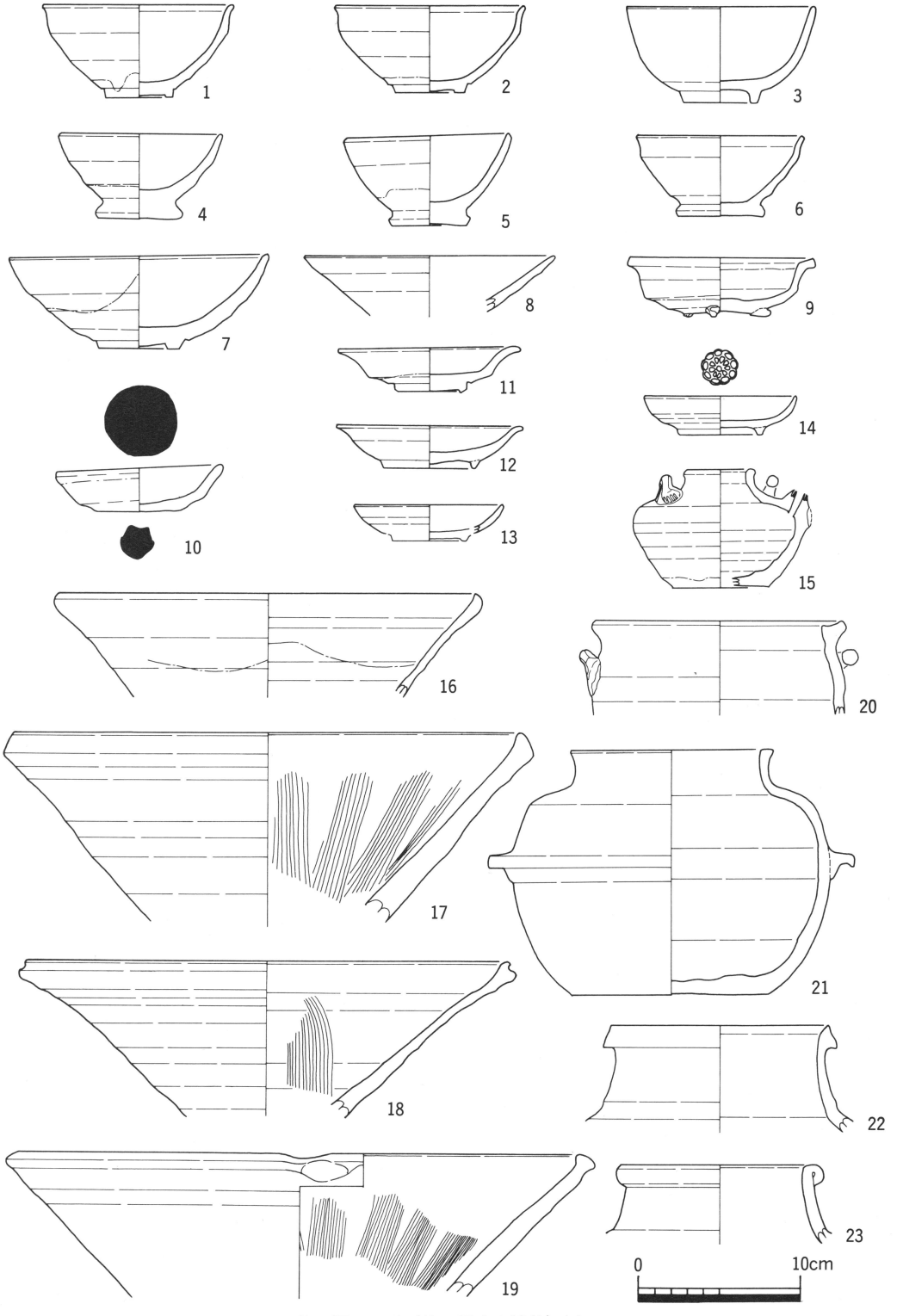
第4図　2群（第3層出土遺物）(1)

ものと外反するものがあり、底部に墨書を記したもの（10）がある。高台を削り出して作り、外面下半部に釉を掛けずに折れて立ち上がる灰釉腰折皿（12）は窯窯後期第４段階に比定される。灰釉端反皿は大小様々な大きさがあり、見込み部に印花を持つもの（14・15・17）と持たないものと分かれる。印花紋の種類も幾つかあり、いづれも大窯Ⅰ期に属するものである。重圏皿は圏線が螺旋状をなすものと同心円をなすものがある。圏線が螺旋状をなす重圏皿は口縁端部がそのまま開くＡ類（20）と、口縁端部が大きく内湾するＢ類（19）がある。前者を大窯Ⅰ期、後者を窯窯後期第４段階にそれぞれ比定する。同心円の圏線をもつ重圏皿Ｃ類（21）は大窯Ⅱ期に属すると考えられる。

擂鉢は口縁部の形態から７類に分類でき、口縁部の内側に突帯が巡るＡ類（25）、口縁部が上方にやや伸びるＢ類（26）、口縁部が断面三角形になり端部に凹線が走るＣ類（27）、口縁部が断面三角形状になるＤ類（28）、口縁部が玉縁状に丸くなるＥ類（29）、口縁端部が内側に折り返されるＦ類（30）、口縁部が縁帯を成すＧ類（24）がある。Ａ類・Ｂ類は窯窯後期第４段階、Ｃ類・Ｄ類は大窯Ⅰ期、Ｅ類は大窯Ⅱ期、Ｆ類・Ｇ類は大窯Ⅲ期にそれぞれ比定できる。このほかに陶磁器類には、香炉（22）・鍋・茶入（23）・壺・青磁の香炉（31）・朝鮮王朝製白磁皿（32）・染付の椀（33）・瓦・瓦器・常滑窯の甕などがある。



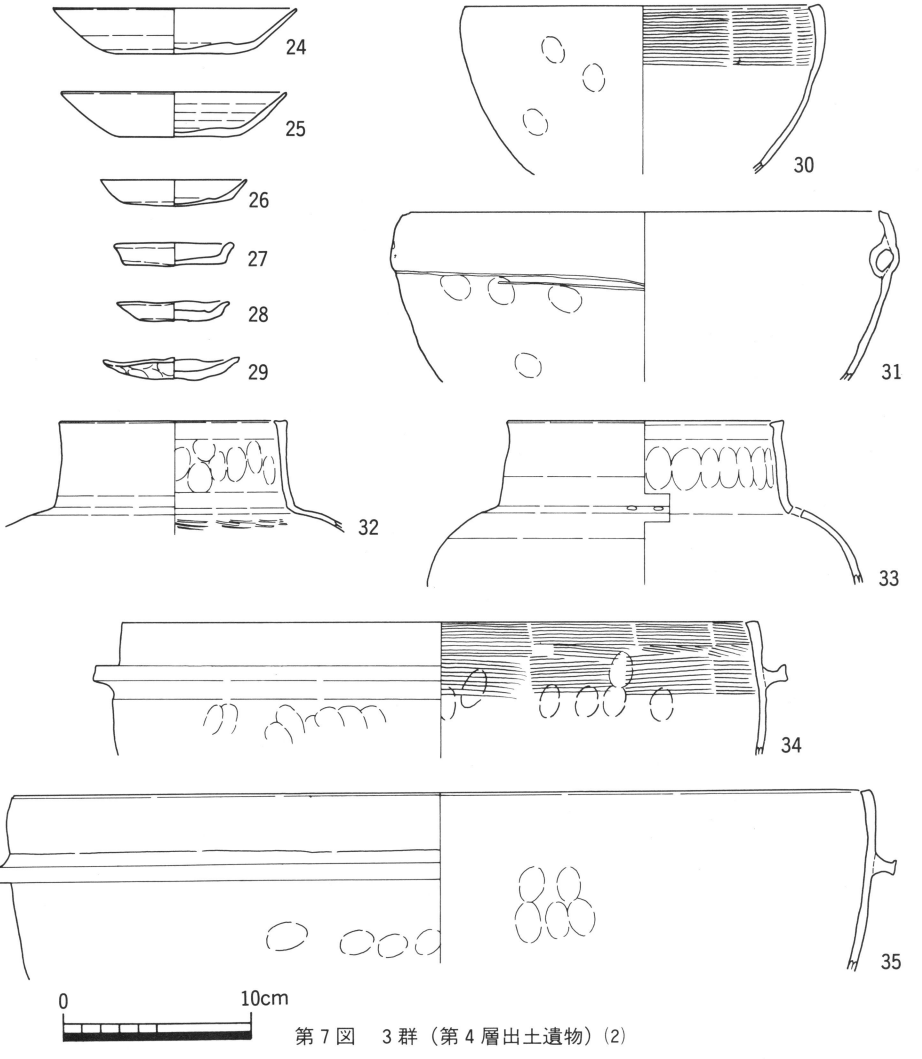
第５図　２群（第３層出土遺物）(2)



第 6 図　3 群（第 4 層出土遺物）(1)

ロクロ成形の土師器皿は、体部が直線的に伸びるもの（34・35）、体部が直線的に伸びて外面に一条微かな沈線が巡るもの（38・39）、口縁端部が厚くなるもの（36）などがある。非ロクロ成形の皿は、体部に横ナデを施すもの（40）と、横ナデがないもの（41）がある。このうち、後者は、拙稿(5)で示した清洲城下町遺跡II－4期に見られるナデのない土師器皿に比べ、外面に指押さえ跡が多く見られ、横ナデの代わりに指で押さえながら体部を作っている。内耳鍋は口縁部が内湾し、内面ハケ目が残る。法量に大小の2者がある（42～44）。この他に、羽釜（45）・茶釜型羽釜がある。

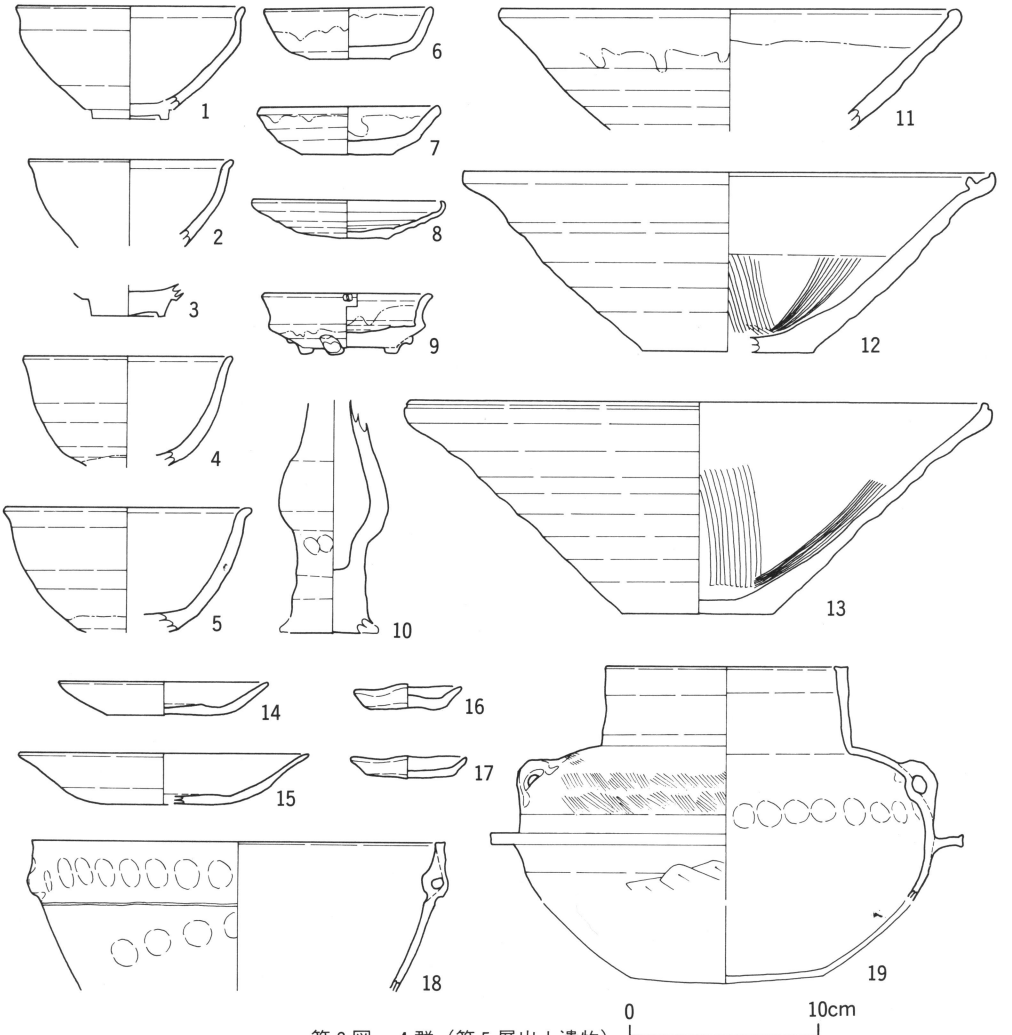
3群（第6・7図）　椀は天目茶椀・灰釉丸椀（3）・灰釉平椀（7）・台付椀・鉄釉平椀（8）がある。天目茶椀は2群のA類（1・2）・B類のみがあり、すべて外面下半部に錆釉を掛けて化粧掛けを施している。台付椀は底部に回転糸切り痕が残るもの（4～



第7図　3群（第4層出土遺物）(2)

6）で大窯Ⅰ期に相当する。皿は灰釉縁釉皿（10）・灰釉腰折皿（11）・灰釉端反皿（12）・重圏皿が主要なもので、鉄釉縁釉皿・灰釉卸皿・灰釉丸皿（13・14）が少量存在する。この灰釉丸皿は大窯Ⅰ期か大窯Ⅱ期かは特定できない。擂鉢は、口縁部が断面三角形状でやや厚く外側に張り出す大窯Ⅱ期に比定されるもの（17）が若干存在する他は、2群での分類のB類（19）・C類（18）・D類に属するものが大半を占める。この他に、瀬戸美濃窯産の陶器は釜（21）、壺（22・23）などがある。

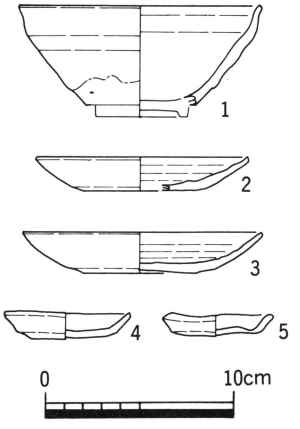
ロクロ成形の土師器皿は、体部が直線的に伸びるもの（24・25）、法量の小さいもの（26）がある。非ロクロ成形の皿は、2群と同様、体部に横ナデを施すもの（27・28）と、横ナデがないもの（29）がある。鍋類は内耳鍋（30・31）・茶釜型羽釜（32・33）・羽釜（34・35）がある。口縁部が内湾する内耳鍋は法量的に大小の2者があり、体部上方に沈線が



第8図　4群（第5層出土遺物）

巡るもの（31）がある。

3群の資料の中で2群の資料との接合が可能である遺物も幾つか存在し、第3層と第4層の成因は共に流路の堆積であることから、2群と3群を明確に区分することは難しいといえる。しかし、後述するように2群の方が3群より新しい遺物を含有することは、指摘しておきたい。



第9図　5群（第6層出土遺物）

4群（第8図）　椀は天目茶椀・灰釉丸椀（4）がある。天目茶椀は2群のA類（1・3）・B類（2）のみ存在する。皿は灰釉縁釉皿（6・7）と2群のB類の重圏皿（8）がある。擂鉢は、2群での分類のA類（12）・B類・C類（13）・D類に属するものがある。その他に、鉄釉平鉢・灰釉平鉢（11）・香炉（9）・花瓶（10）があり、すべて窖窯後期第4段階に所属するものである。土師器皿は、ロクロ成形で体部が直線的に伸びるもの（14・15）と非ロクロ成形で体部に横ナデを施すもの（16・17）がある。また、土師器鍋類は口縁部が直立して体部上方に沈線が巡る内耳鍋（18）と茶釜型羽釜（19）がある。

5群（第9図）　瀬戸美濃窯産の陶器は、2群のA類の天目茶椀（1）・窖窯後期第4段階に属する鉄釉平鉢・擂鉢の底部などが少量存在する。土師器はロクロ成形の皿（2・3）と横ナデを施す非ロクロ成形の皿（4・5）がある。

4．器種別組成と時期別組成

先に第1図で図示した範囲内の出土遺物を、層位ごとに器種別組成を算出したのが第1表である。また、瀬戸美濃窯産の陶器に限って、生産地の側から提示された編年を用いて層位ごとに時期別の組成を算出したのが第2表である。なお、ここにあげた数値はすべて接合前の破片数を求めている。(6)

1群　瀬戸美濃窯産の陶器は大窯Ⅰ期を主体とし、窖窯末期から大窯Ⅲ期までの遺物が存在する。擂鉢で最も新しい大窯Ⅲ期が出土することは注目に値する。全体から見ると、土師器の皿が5割を占めている。

2群　今回取り上げた資料の中では最も出土量が多い。瀬戸美濃窯産の陶器は窖窯後期第4段階と大窯Ⅰ期が主体となり、大窯Ⅲ期まで出土する。椀と擂鉢で最新期の遺物が見られ、1群と似たような傾向がある。

3群　瀬戸美濃窯産の陶器は窖窯末期と大窯Ⅰ期が主体となり、擂鉢で大窯Ⅱ期が少量出土する。なお、1群から3群までの資料には瓦・瓦器の小片が含まれる。

4群　全体から見ると、土師器皿の比率が増え、7割以上を占める。瀬戸美濃窯産の陶

			1群	2群	3群	4群	5群	合計
土師器	皿	ロクロ成形	157	1169	440	436	167	2369
		非ロクロ成形	46	188	118	42	14	408
	鍋	内耳鍋	4	259	52	12	6	333
		羽釜	2	11	3	0	0	16
		茶釜型羽釜	0	21	20	5	5	51
		不明	33	663	132	42	21	891
	その他		0	1	1	0	0	2
瀬戸・美濃陶器	椀	天目茶椀	13	119	38	9	1	180
		その他	7	65	29	4	0	105
	皿	灰釉皿	20	172	46	12	0	250
		重圏皿	0	86	10	3	0	99
		その他	0	3	1	0	0	4
	鉢	擂鉢	30	251	82	16	3	382
		その他	2	17	10	4	1	34
	その他不明		16	148	102	26	5	297
常滑			7	102	45	17	2	173
中国・朝鮮王朝陶磁器			3	24	0	2	0	29
瓦器			2	4	1	0	0	7
瓦			2	6	2	0	0	10
その他			3	11	0	3	2	19
計			347	3320	1132	633	227	5659

第1表　器種別組成表

		窯　窯		大　窯						窯　窯		大　窯			
		後期～3段階	後期4段階	I期	II期	III期	不明			後期～3段階	後期4段階	I期	II期	III期	不明
1群	椀	0	6	12	0	0	2	4群	椀	3	5	4	0	0	1
	皿	0	0	12	2	0	6		皿	0	14	0	0	0	1
	擂鉢	0	4	4	3	1	18		擂鉢	0	5	2	0	0	9
	その他	0	2	0	0	0	16		その他	7	6	1	0	0	16
	計	0	12	28	5	1	42		計	10	30	7	0	0	27
2群	椀	10	37	80	5	2	50	5群	椀	0	1	0	0	0	0
	皿	0	88	90	9	0	74		皿	0	0	0	0	0	0
	擂鉢	0	53	22	6	2	168		擂鉢	0	0	0	0	0	3
	その他	0	38	3	1	0	123		その他	0	1	0	0	0	5
	計	10	216	195	21	4	415		計	0	2	0	0	0	8
3群	椀	3	26	24	0	0	14	合計	椀	16	75	120	5	2	67
	皿	0	17	15	0	0	25		皿	0	119	117	11	0	106
	擂鉢	0	10	8	2	0	62		擂鉢	0	72	36	11	3	260
	その他	0	9	0	0	0	103		その他	7	56	4	1	0	263
	計	3	62	47	2	0	204		計	23	322	277	28	5	696

第2表　瀬戸・美濃陶器時期別破片数

器は窖窯後期第４段階が主体となり、大窯Ⅰ期が減少する。なお、大窯Ⅰ期の皿は見られない。土師器鍋は羽釜が見られなくなる。

５群　土師器皿の比率が８割と更に増え、窖窯後期第４段階の陶器が僅かにある。

全体を通してみると次ぎのようなことがいえる。なお、これらの指摘は調査地点特有の傾向を表す可能性があることを注意しなければならないことはいうまでもない。

１．下層になるにつれて、土師器皿が増大する。

２．土師器鍋類は、内耳鍋がどの群も一定量を占め、下層にいくほど羽釜が増え、茶釜型羽釜が減少する。

３．陶器の椀・皿の比率はどの群もおおよそ１：１である。

４．陶器の皿は、灰釉皿が多く、鉄釉皿はほとんど見られない。

５．いづれも常滑窯産の陶器は約３％、中国・朝鮮王朝陶磁器は約0.5％を占める。

６．各群とも、最新期の遺物は擂鉢（部分的には椀）が若干量存在し、主体はそれよりも古い段階の遺物が占める。

５．問題点

⑴　年代観

今回の資料紹介で、大窯編年の年代観については次の２点が確認できた。第１点は、1586年には確実に大窯Ⅲ期は出現し、大窯Ⅴ期は存在しないこと。第２点は、1508年の資料に伴って大窯Ⅰ期の遺物が存在すること。である。これは従来の年代観に符合する結果となった。今回は、天正地震の噴砂上層の良好な資料が無く、1586年以降の遺物の状況は把握できなかった。また、噴砂下層の遺物は、大窯Ⅲ期の遺物が少量で主体が窖窯末期と大窯Ⅰ期となることから、1586年直前の状況を示しているとは考え難く、1586年前後に関わる遺物の状況については結果として若干焦点がぼやけてしまった感がある。

ここで年代観の分析法について若干触れたい。年代観を考察する資料として、①遺物そのものに記された年代・②年代が分かる遺物・資料と共伴する遺物群・③絶対年代の判明する層位の把握から見る方法がある。前２者は年号が記された時期や目的・遺物が投棄された時期を考慮しなければならず、遺物の上限・下限の確かな根拠とはならない。それに対し後者はこの点の曖昧さは少ない。地震、火山灰、ひいては落城時の焼土層や盛土層などを把握して分析する方法が、曖昧さを残さない年代観を構築する手段となるだろう。

⑵　時期別組成

各層位時期別組成を見ると、上層の遺物には大窯Ⅱ期・Ⅲ期と共に、窖窯後期第４段階以降のものが混入とは考えられないぐらい多量に出土するのに対し、下層の遺物には窖窯後期第４段階よりも前の遺物をほとんど含有しない。清須城が本格的に機能して人々が住

み始めたと思われる窖窯後期第4段階以前の遺物がほとんど無いことから、人々がそこに生活を営み初めてから日常用品を入手し、これまで他所で用いた日常用品を持ち込まないことが想定されよう。逆に、相対的に新しい堆積から窖窯末期以降の遺物が連綿と出土することは、人々が継続して定着している場合には古い日常用品も破損などの廃棄される理由がない限り使用（伝世）していたことを思わせる。

6．まとめ

以上、若干の問題点を指摘したのに過ぎず、筆者の力量不足のためか単純な資料紹介に止まるものとなった。今回の90D区は陶磁器のみならず、木製品など多種多様な遺物が出土し、中世世界の内面に深くえぐり込む資料を多量に内包しているのであり、この点については後日まとめてみたい。

なお、最後になりましたが本論をまとめるに当たって、陶磁器の編年観については藤澤良祐氏に全面的にご教示いただきました。また、楢崎彰一氏をはじめ、城ヶ谷和広・尾野善裕の各氏にもご教示いただいた。記して感謝致します。

注

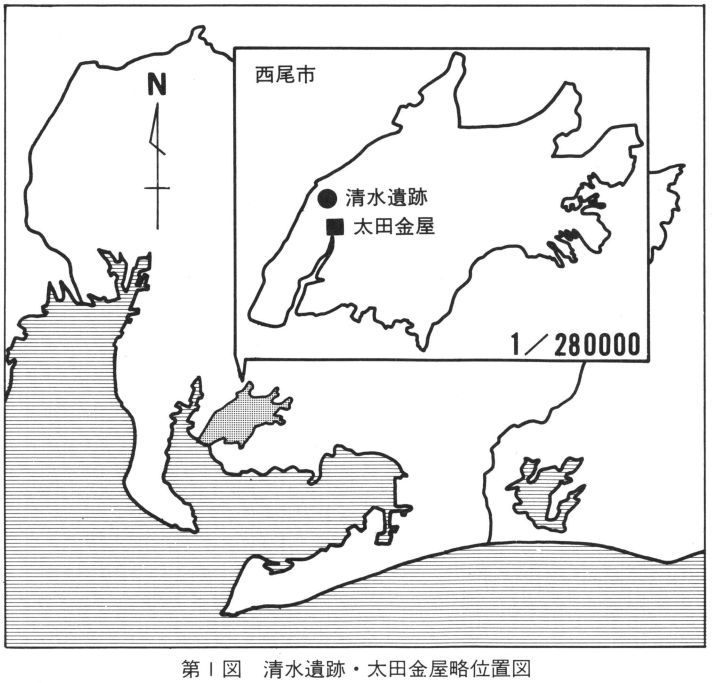
1）鈴木正貴「尾張の城館遺跡出土の陶磁器－16世紀を中心として」『考古学フォーラム1』1990
2）遺構などの詳細な説明は前述。
3）森勇一・鈴木正貴「愛知県清洲城下町遺跡における地震痕の発見とその意義」『活断層研究7』1989
4）瀬戸美濃窯産の陶器の編年については藤澤良祐氏に全面的にご教示いただいた。参考文献は藤澤良祐「"古瀬戸"概説」『美濃陶磁歴史館報Ⅲ』1984と、藤澤良祐「瀬戸大窯の編年的研究」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』1986・井上喜久男「美濃窯の研究(1)十五～十六世紀の陶器生産」『東洋陶磁　第十五・十六号』1988
5）鈴木正貴「第5章　第3節　C期の遺物」『清洲城下町遺跡』愛知県埋蔵文化財センター1990
6）この様な分析は他にも例がある。内堀信雄「岐阜千畳敷出土の瀬戸・美濃陶器」『考古学フォーラム1』1990・注1など。

清水遺跡出土の鉄滓と三州平坂鋳物師

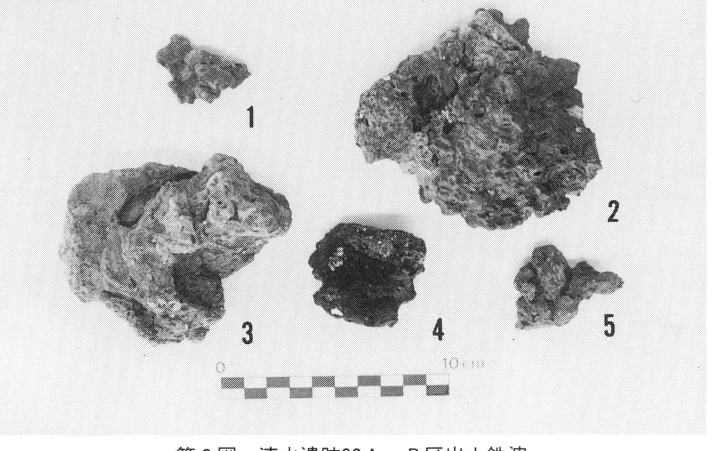
尾野　善裕

1

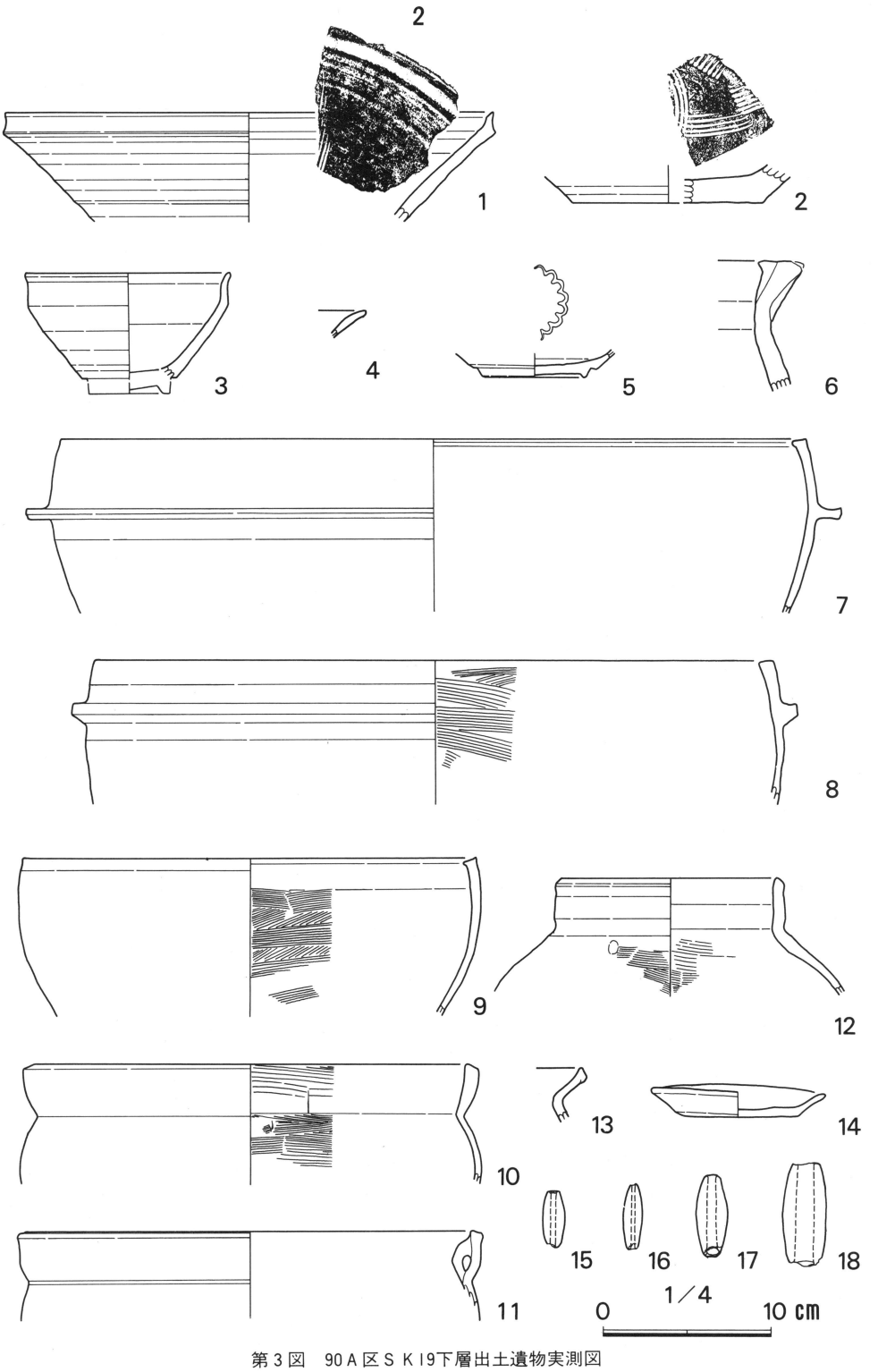
近世、三河国幡豆郡平坂村（現愛知県西尾市平坂町）には、近江国辻村から移住してきた鋳物師太田氏の工房・太田金屋が存在していた。㈶愛知県埋蔵文化財センターでは、平成元年度より平坂町に北接する西尾市中畑町地内に於いて清水遺跡の発掘調査を実施しているが、平成２年度の調査で近世の遺構から鉄滓５点の出土をみている。調査地点は太田金屋の故地から至近の位置にあり、明治以前は太田氏が当地の鋳造業を殆んど独占していたことから、これらの鉄滓が太田金屋の鋳物生産に関わる可能性は高いと思われる。これまで三河鋳物師の活動については、主として文献史学の方面で研究が蓄積されてきているが、[1] 本稿では考古学的アプローチの可能性を秘めた資料として、清水遺跡出土の鉄滓とその伴出遺物を紹介する。



第１図　清水遺跡・太田金屋略位置図



第２図　清水遺跡90Ａ・Ｂ区出土鉄滓



第3図　90A区SK19下層出土遺物実測図

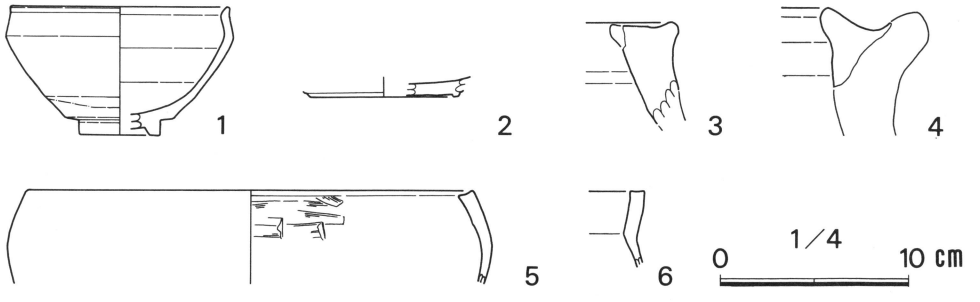
鉄滓は、90A区SK19・SD01から各1点、90B区SK36から3点出土している。但しこれは整理途上での確認点数であり、今後整理作業の進展に伴い増加することが予想される。

90A区SK19

径4.0m以上、深さ0.7mの不整形を呈する土坑。埋土はハマグリを主体とする貝層（上層）と、褐色土層（下層）の2層に大別できる、鉄滓（第2図1）はこのうち下層から出土している。重量15g。伴出遺物（第3図）には、瀬戸・美濃焼の擂鉢（1・2）・天目茶碗（3）・稜皿（4）・志野丸皿（5）、常滑焼の甕（6）、土師質土器の羽釜（7・8）・鍋（9～13）・皿（14）、管状土錘（15～18）の他、図示していないが炉壁片とみられる焼土塊、拳大の被熱礫がある。これらは、1が16世紀前半[2] 6が同後半[3]に遡るとみられる一方で、2・3・5が17世紀中葉から後半の年代観を示すなど多時期の遺物が混在する様相を示している。

90A区SD01

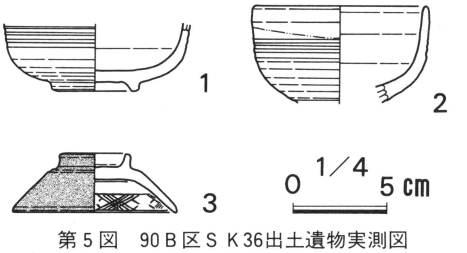
幅0.9m、深さ0.5mの溝。埋土は、ハマグリを主体とする混土貝層。鉄滓（第2図2）は重量310g。伴出遺物（第4図）には、瀬戸・美濃焼の天目茶碗（1）・志野丸皿（2）、常滑焼の甕（3・4）、土師質土器の鍋（5・6）、被熱礫多数がある。いずれも17世紀前半～後半の範囲内に位置づけ得ると思われる。



第4図　90A区SD01出土遺物実測図

90A区SK36

遺構が調査区域外に迄広がるため、平面形の全体像を窺い得ないが、長軸13m以上、深さ1.8mの計測値を得た。土坑とするよりも溝と呼ぶべきかもしれない。出土の鉄滓（第2図3～5）の重量は35～295g。伴出遺物は、瀬戸・美濃焼、常滑焼、土師質土器を始めと

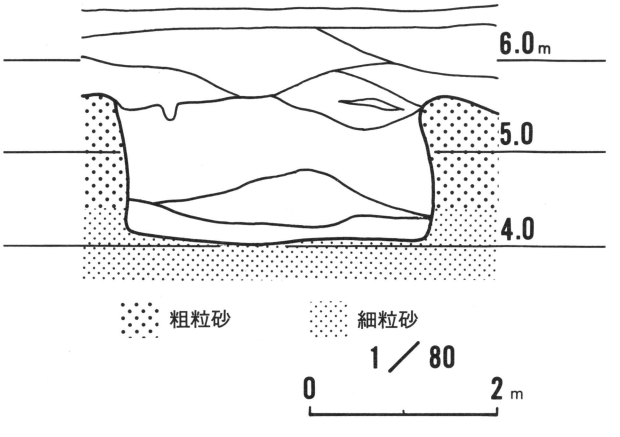


第5図　90B区SK36出土遺物実測図

して、伊万里、瓦、煙管、鉄釘、被熱礫、焼土塊など種類、量とも豊富である。遺構の年代観については、出土遺物の全容を把握するに至っていないため断定を避けたいが、第5図に示す瀬戸・美濃焼の腰錆茶碗（1・2）、外面に青磁釉が施された伊万里の蓋（3）の存在から、18世紀後半、乃至それ以降と考えられる。

3

以上、鉄滓出土の遺構について概観してきたが、いずれも多時期に亘る遺物の出土があり、複雑な様相を示している。しかし、当該遺構出土のうち、最も新しい遺物の年代観によって遺構の時期を決定するという考古学の基本に添って考えるならば、90A区SK19下層・SD01の年代を17世紀後半に、90B区SK36の年代を18世紀後半以降に求めることは許されよう。但しこの年代観は、あくまでも遺構のものであって、鉄滓自体の時期を必らずしも示しているとは限らない。しかし、寛文11（1671）年に近江国より移住し、明治初期まで生産活動を継続したという太田金屋の存続期間と一致していることは、両者の関係について極めて示唆的である。また第3図6など、鉄滓に伴って出土している常滑焼の甕には、焼成後の強い2次被熱のために器表面の剝離を生じているものが少なくなく、多数の被熱礫・焼土塊の存在と共に、遺跡近傍で何らかの高熱を発する作業が行われていたことを推測させる。さらに、平成元年度、及び2年度の調査で深さ1.5～2mを越える大型土坑数基を検出しているが、遺跡の基盤層が地表面より1m以下では砂層となることからみて、これらについても鋳物砂の採掘を目的としたものであった可能性を指摘できる（第6図）。



第6図　大型土坑（90A区SK17）断面図

このように、清水遺跡については単に鉄滓が出土したというにとどまらず、遺跡自体が鋳造業と何らかの関わりを有していたことが推測されるのであるが、鉄滓を除いていずれも状況証拠に過ぎず、鋳型・鋳造製品の出土をみていない現状では、清水遺跡を鋳物師の生産活動関連遺跡と断定するには、未だ証拠不充分と言わざるを得ない。しかし、生型の鋳型は、製品の鋳造完了後破砕して再度利用できることや、古鉄は鋳潰して新しい製品の原材料とされたであろうことを考慮すれば、これらの遺物の不在はむしろ

当然とすべきであるかもしれず、清水遺跡と太田金屋の関係を積極的に否定する根拠とはなり得ないと考える。

4

小稿では、清水遺跡出土の鉄滓について太田金屋との関連を想定したが、資料的制約から充分に論を展開し得なかった。しかし、平成2年度調査分についての遺物整理は、小稿で取り上げた遺構の出土分を除いて、殆ど未着手であるため、今後これらの整理作業を通して、清水遺跡の性格解明に努めたいと考えている。尚、小文を記すにあたり、西尾市教育委員会・松井直樹氏、平坂鋳工㈱・伊藤彰郎氏を始めとして、加藤安信・大橋正明・北村和宏の各氏から多くの教示を賜った。記して感謝する。

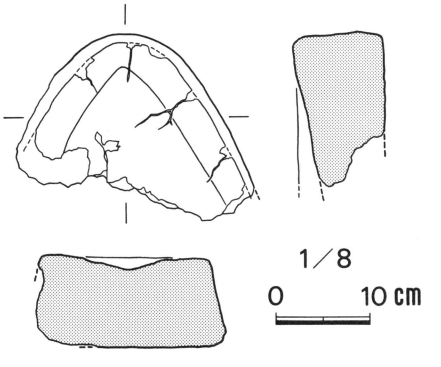
〔註〕

1）平坂鋳物師については、杉田公弘「平坂の鋳物業」『西尾市史』三　1976　に詳しい。

2）瀬戸・美濃焼の年代観については、藤澤良祐「瀬戸大窯発掘調査報告」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅴ　1986、同「本業焼の研究(1)～(3)」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅵ～Ⅷ　1987～1989に依った。

3）常滑焼の年代観については、中野晴久「近世常滑焼における甕の編年的研究ノート」『常滑市民俗資料館研究紀要』Ⅱ　1986に依った。

付記　本稿脱稿後、整理作業の過程で90Ｂ区ＳＫ36出土遺物中に挈先の鋳型片（第7図）のあることが判明した。清水遺跡出土鉄滓と太田金屋を結びつける資料として注目される。



第7図　90Ｂ区ＳＫ36出土挈先鋳型実測図

一宮市山中遺跡出土の石器について

金子 健一

I

今年度の一宮市・山中遺跡の調査では、弥生時代前期における多数の石器及びその関連資料を得ることができた。原石から石鏃、石斧等の製品に至るまで、石器製作の全工程を示す資料が出土しており、その総数は3553点にのぼる。これに昭和56年に実施された2次調査時の資料（岩野・赤塚1982）も含めると、製品110点をはじめとして合計3800点余にもなり、資料不足がいわれて久しい一宮市周辺の当該期の遺跡の中では、質量ともに最も充実したものといえよう。現在、資料整理の緒についたばかりであり、一定の成果を公表できる段階ではないが、中間報告という形をとり、資料を概観しつつ若干の問題提起を行っていきたい。

II

先に述べたように、製品は2・3次調査あわせて110点出土している。その器種構成は表1[(1)]の通りであるが、その大半は、今年度確認された弥生時代前期の中でも新相、水神平期に属するもので、石器製作関連遺構（SK32、50、57、75）や、居住域と墓域を画する溝（SD56、62）、住居跡周辺、方形周溝墓の周溝中から、条痕文の煮沸具、遠賀川式土器の貯蔵具とともに出土している。石鏃の中には、縄文的な形態を示すものもわずかではあるが認められることから、古相（樫王期）に属するものも含まれているようであるが、遺構出土で土器を伴う明確な資料は得られていない。

石鏃　凹基のもの（1～11）が最も多く、鏃身と基部の形態により細分が可能である。小型から中型品が多く、無茎のものが圧倒的に多い。凸基のもの（11～13）は、中型、大型品が多いが、有茎・無茎の区別が明瞭でなく作りも全体に粗雑である。平基のもの（14～17）は、凹基のものに次いで多いが、中型品が多く、凹基とは逆に有茎のものが多数を占めている。円基のもの（18、19）は図示した2点のみが出土している。なお、石鏃全体では有茎、無茎のものが同数となっている。

石錐　5タイプの石錐（20～24）が1、2点づつ出土しており、目的別に使い分けていたものと考えられる。

石斧　磨製のものは、蛤刃石斧が1点出土している他は、偏平片刃石斧（25）と柱状片刃

石斧（26）がほぼ同数出土している。25は小型品で木器加工用の可能性もある。28は棒状の石斧で三河地域で見られる形態である。打製のものは9点出土しており、33のような一般的な形態のものの他に、34のような礫の大型剥片の縁辺に調整加工を加えた、石庖丁とも考えられるものも含まれている。

その他　30はサヌカイト製のスクレイパー。31は縦長の剥片の縁辺に調整加工を加え、両端に半円の抉りを入れた不定形刃器である。32は形状は石庖丁であるが、刃に意図的な刻み目が入っており、別の用途も考えられる。岐阜県関市の大杉遺跡で類例が出土している。

III

縄文時代晩期から弥生時代前期にかけての当地方における石器組成についての研究は、石川日出志氏が伊勢湾岸地方という広い視野から、各遺跡の比較・検討を行い、低地型・台地型石器組成を提唱されたのが最も最近の成果といえよう（石川1988）。その中で氏は一宮周辺の弥生時代前期の3遺跡（元屋敷・弥勒・二タ子）をとりあげ、その石器組成の中にみられる「打製石鏃と打製石斧の卓越」が、「犬山扇状地から東濃地方の河岸段丘や丘陵上に立地する遺跡」の組成と共通する事実を指摘し、それを「台地型石器組成」と呼称された。しかし、氏も述べておられるように、当時、一宮周辺の当該期の遺跡の調査例は乏しく、傾向を把握するにも資料の絶対数が不足していたことは否めない。その後、大きな状況の変化はなく、新たな見解も出ていない中で、今回の山中遺跡の資料はどのような位置づけがなされるのであろうか。

今年度の調査における石器の器種別点数、及び各々の占有率は表1の通りであるが、これらのデータから以下の点が指摘できるのではないだろうか。まず第1点は、「台地型石器組成」の一つの特徴である打製石鏃の卓越であり、約62%と高い占有率を示している。次いで多いのが磨製石斧類であり、約13%を占め

大別	器種					点数		占有率 器種内訳		占有率 全体
A	石鏃	I	凸基	a	有茎	8(5)	10(7)	11.8	14.7	61.8
				b	無茎	2		2.9		
		II	凹基	a	有茎	8	33(32)	11.8	48.6	
				b	無茎	25(24)		36.8		
		III	平基	a	有茎	15(14)	19(18)	22.1	28.0	
				b	無茎	4		5.9		
		IV	円基			2		2.9		
			不明			4		5.8		
			小計			68(63)		100		
C	打製石斧					9(8)				8.2
D	石庖丁（磨製）					1				0.9
F	磨製石斧	I	偏平片刃			4		28.6		12.7
		II	柱状片刃			5		35.7		
		III	太型蛤刃			1		7.1		
		IV	その他・不明			4		28.6		
G	石錐	Type I				2		22.2		9.1
		Type II				2		22.2		
		Type III				2		22.2		
		Type IV				2		22.2		
		Type V				1		11.1		
	スクレイパー					1				
H	石鏃					1				7.3
	敲石					2				
	不定形刃器					5(2)				
合計						110				100

表1　山中遺跡2・3次調査出土石器組成
（　）内は今年度調査出土内数

るが、これに対し、打製石斧の占める割合が8.2%と必ずしも多数派ではなく、組成を特徴づける程大きな存在にはなっていない点が「台地型石器組成」と最も大きく異なる部分である。そして、各種加工具である石錐が８%存在することも含めて考えると、山中遺跡の石器組成は、同じ一宮周辺に位置する縄文時代晩期後半の馬見塚遺跡Ｆ地点(澄田ほか1970)、及び弥生時代前期を主体とする朝日遺跡貝殻山地点(柴垣ほか1972)のそれと最も類似することが指摘されるのである。また、これに似た組成は、絶対量が不足しているものの、山中遺跡の南に位置するほぼ同時期の二タ子遺跡(澄田ほか1967)[2]でも認められることから、敢えて極論すれば、一宮市周辺における弥生時代前期の遺跡の石器組成は、縄文時代晩期後半の馬貝塚Ｆ地点の段階、すなわち、打製石斧激増の前段階[3]の石器組成と大きな差異はなく、むしろそのまま石包丁や磨製石斧が安定的に存在する弥生的な低地型石器組成へ移行してゆく過渡的な様相を呈しているといえよう。このことは、一宮市周辺の弥生時代前期の遺跡から縄文的色彩を濃く残す削痕を施した土器が出土することからも推察できるのであり、今回の山中遺跡においても、前期の中で削痕土器が大部分を占める段階(樫王期)から、削痕・条痕文及び遠賀川式土器が共伴する段階(水神平期)へという流れを追うことができる。そうした意味からも、今回出土した石器の大半が水神平期に属するものであることは、非常に示唆的であり、一宮周辺においては土器の変化と軌を一にするように石器組成の面でも縄文時代晩期後半の枠組を受け継いでいる可能性が高いと考えられるのである。とすれば、縄文時代晩期後半から条痕文期の間に石川氏のいわれる五貫森遺跡や里原遺跡のような打製石斧の激増する時期が当地域に存在した可能性は極めて小さいといえよう。

以上、石器組成について思いつくまま述べてみたが、まだこの他にも検討すべき点はあまりに多い。例えば、比較検討すべき遺跡数が十分でないのはもちろん、伴出土器や石器の器種ごとの詳細な分析が不足しており、生業パターン等の具体的な考察は見送らざるを得なかった。また、今回は取り上げなかったものの、石材の問題は非常に大きく、製品の80%前後、製作過程資料のほぼ100%を占めるガラス質石英安山岩(下呂石)の円礫は、その採集地点や供給体制、ルート等の詳細な検討が不可欠であり、製作技術や製作体制とあわせて、今後の大きな課題となることは間違いないであろう。

文末ではあるが、この小文を成すにあたり、加藤安信、森勇一、赤塚次郎、石黒立人、伊藤隆彦、楯真美子の各氏には数々の有益な御助言を頂いた。また、遺物の実測、トレースにあたっては日栄智子氏(南山大学学生)の御協力を得た。記して感謝する次第である。

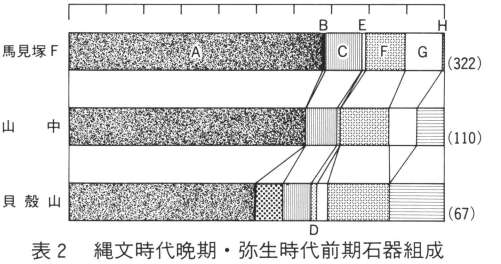
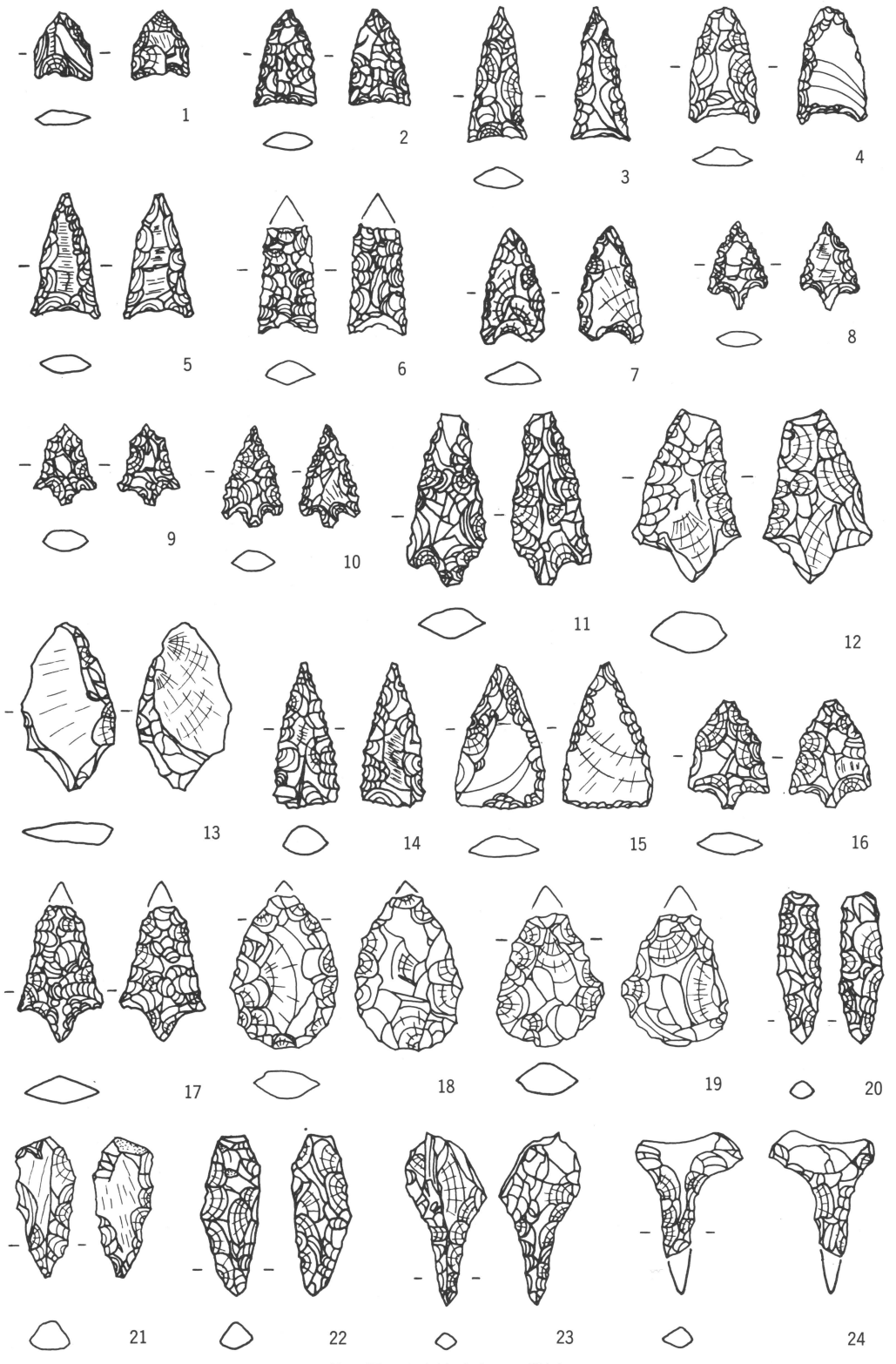
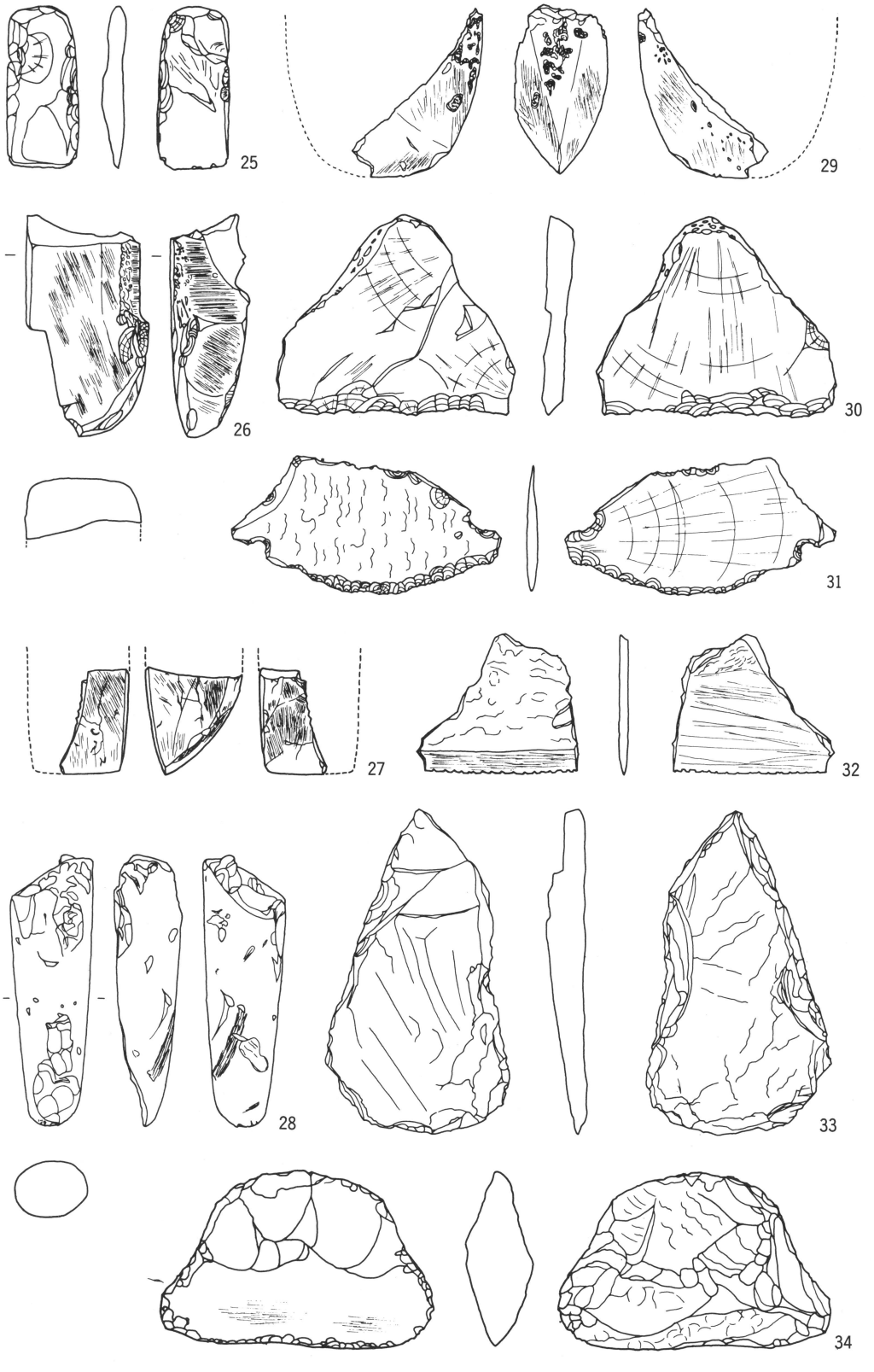


表２　縄文時代晩期・弥生時代前期石器組成
(石川日出志氏原図に加筆)



第Ⅰ図　山中遺跡出土石器(1)



第２図　山中遺跡出土石器(2)(25～33はⅠ：２、34はⅠ：４)

註

1）表１中の石器の大別は、石川日出志氏がかつて提示（石川1988）されたもので、使用目的別にＡ狩猟具、Ｂ漁撈具、Ｃ土掘り具、Ｄ農具、Ｅ食料加工具、Ｆ木工具、Ｇ各種加工具、Ｈその他となっている。本稿においても、他遺跡との比較検討を行う関係上、そのまま使用させていただくこととした。

2）二タ子遺跡では、発掘及び採集による36点余の石器が知られており、Ａ26点以上（72%）Ｃ１点（３%）、Ｅ２点（5.5%）、Ｆ５点（13.9%）、Ｇ２点（5.5%）という組成を示している。

3）打製石斧の増加は、縄文時代晩期における西日本共通の現象であるが、石川氏は伊勢湾沿岸においては「馬貝塚Ｆ地点の年代幅のなか」で増加が進展した可能性を指摘されている。

参考文献

1）岩野見司・赤塚次郎　1982『尾張病院山中遺跡発掘調査報告』一宮市教育委員会

2）石川日出志　1988「伊勢湾沿岸地方における縄文時代晩期・弥生時代の石器組成」『〈条痕文系土器〉文化をめぐる諸問題』愛知考古学談話会

3）澄田正一、大参義一、岩野見司、1967『新編一宮市史』（資料編１）一宮市

4）柴垣勇夫、伊藤　稔ほか　1972『貝殻山貝塚調査報告』愛知県教育委員会

遺物番号	器種	出土遺構	長(cm)	幅	厚	重(g)	石材	備考
1	凹基無茎式石鏃	ＳＫ50	1.3	1.1	0.3	0.37	頁岩	
2	同上	ＳＫ41	1.9	1.2	0.35	0.66	チャート	
3	同上	ＳＤ62	2.6	1.2	0.35	0.81	ガラス質石英安山岩(下呂石)	
4	同上	検出	2.2	1.3	0.35	1.00	頁岩	
5	同上	ＳＫ19	2.4	1.3	0.35	0.89	頁岩	
6	同上	ＳＫ75	(2.1)	1.1	0.4	(0.99)	チャート	
7	同上	ＳＫ38	2.3	1.2	0.4	0.98	ガラス質石英安山岩(下呂石)	
8	凹基有茎式石鏃	ＳＫ75	1.7	1.1	0.3	0.40	同上	
9	同上	ＳＫ75	(1.6)	1.2	0.35	0.51	チャート	
10	同上	ＳＫ75	2.0	1.2	0.35	0.58	ガラス質石英安山岩(下呂石)	
11	同上	ＳＫ57	(3.3)	1.5	0.6	(2.16)	同上	
12	凸基有茎式石鏃	ＳＤ48	3.3	2.1	0.8	(3.55)	同上	
13	同上	ＳＤ49	3.2	1.8	0.5	2.43	同上	未成品か
14	平基式石鏃	ＳＢ19	2.8	1.2	0.6	1.44	同上	
15	同上	検出	(2.8)	1.7	0.4	1.32	同上	
16	平基有茎式石鏃	ＳＫ36	(2.1)	2.6	0.4	0.96	同上	
17	同上	検出	(2.1)	1.6	0.5	(1.26)	同上	
18	円基式石鏃	検出	(3.1)	2.2	0.6	(3.56)	同上	
19	同上	ＳＤ48	(2.6)	2.1	0.5	(2.37)	同上	
20	石錐(TypeⅠ)	検出	2.9	0.9	0.4	1.11	同上	
21	同上(TypeⅡ)	検出	2.7	1.2	0.6	1.71	同上	
22	同上(TypeⅢ)	ＳＺ01	3.1	1.2	0.6	1.93	同上	
23	同上(TypeⅣ)	ＳＫ32	3.3	1.6	0.9	2.87	同上	
24	同上(TypeⅤ)	検出	(2.4)	2.0	0.6	(1.59)	同上	
25	偏平片刃石斧	ＳＤ61	5.1	2.2	0.75	14.26	緑色岩	
26	柱状片刃石斧	検出	(6.9)	(2.5)	(3.6)	(65.41)	頁岩	
27	同上	検出	3.4	2.1	3.0	(21.86)	頁岩	
28	磨製石斧	検出	(8.5)	2.6	2.1	(51.80)	砂岩	
29	太型蛤刃石斧	ＳＤ62	(5.3)	(4.1)	(2.9)	(39.12)	硬砂岩	
30	スクレイパー	検出	6.2	7.5	1.4	51.77	サヌカイト	
31	不定形刃器	ＳＫ32	8.5	4.3	0.4	16.29	同上	
32	石庖丁	ＳＺ01	(5.1)	(4.3)	0.4	(11.84)	頁岩	刃部に刻み目あり
33	打製石斧	ＳＥ01	10.1	5.9	1.2	77.23	片状ホルンフェルス	
34	同上	ＳＢ19－ＳＫ01	17.1	11.1	4.2	706.0	砂岩	石庖丁の可能性もあり

表３　山中遺跡出土石器一覧表（　）内は残存値）

岩倉城遺跡下層の遺構と遺物
－平成元年度調査を中心として－

服部 信博

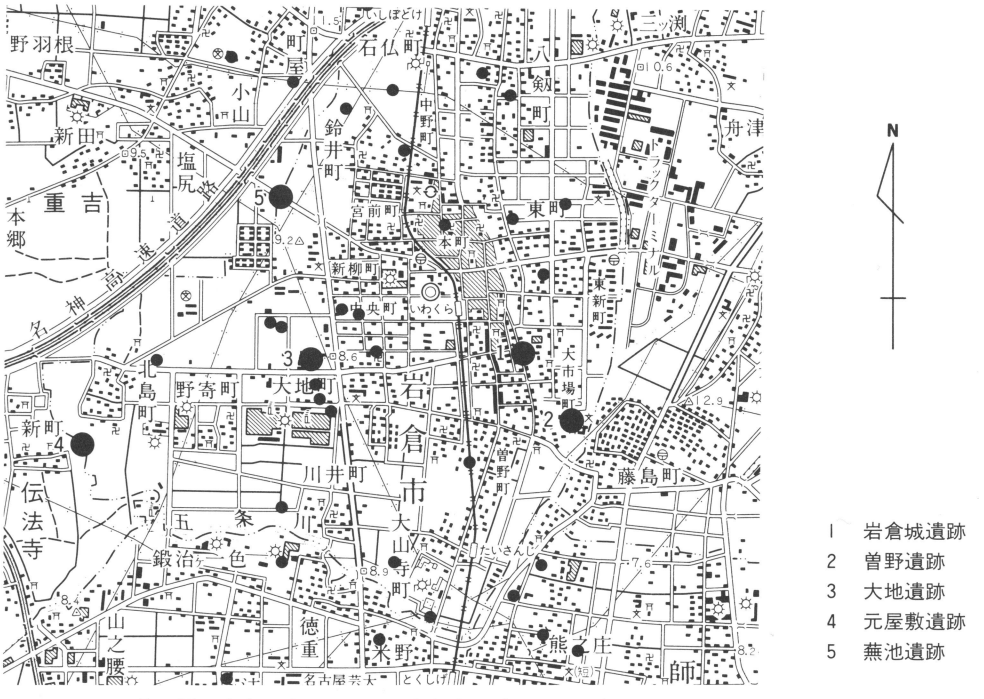
I はじめに

濃尾平野のほぼ中央部に位置する岩倉市の周辺は、犬山扇状地の扇端部にあたり、豊富な水に支えられ多くの産業・文化を育んできた地域である。また、木曽川水系の五条川や青木川の河川活動による自然堤防もよく発達し、安定した自然条件を背景に、大地遺跡や曽野遺跡など学史上著名な遺跡をはじめ数多くの弥生時代の遺跡が立地し、注目されてきた地域でもある。しかし、本格的に発掘調査が実施された遺跡は少なく、その実態については不明な部分が余りにも多いと言わざるをえない。

そういった状況のなかで、平成元年度の岩倉城遺跡下層調査において、近年盛んに議論される所謂「欠山期」の遺構と遺物がまとまって検出された。(1) これらは当地域の弥生～古墳時代の諸相を考究していく上で欠くことのできない貴重な資料と考えられ、その一部を紹介することとした。

II 遺構と遺物

平成元年度は、五条川の両岸に細長く延びる自然堤防を、東西に横断する形で調査区を



第Ⅰ図 岩倉城遺跡と周辺の弥生遺跡（Ⅰ：50000）

設定したため、遺跡の構造や広がり等を把握するには良好であったと言えよう。調査の結果、竪穴住居跡８棟、集石遺構２基、方形周溝墓１基を検出し、いずれの遺構からも「欠山期」の遺物が出土した。以下、遺構・遺物の概要を記していきたい。

１）遺構の概要（第４図）

竪穴住居（第２・６図）　五条川右岸の標高９ｍ前後の自然堤防上で、重複する形で８棟の竪穴住居を検出した。全形の窺えるものはなく判然とはしないが、いずれも一辺５～６ｍの方形状のプランを呈する。ＳＢ08を除き、幅20cm・深さ５cm程度の壁溝が巡るが、部分的に壁溝を消失する住居も認められ、戸口等の存在を予想させる。主柱は、残存状態の良好なＳＢ06等から推定すれば、４本柱であった可能性が高い。

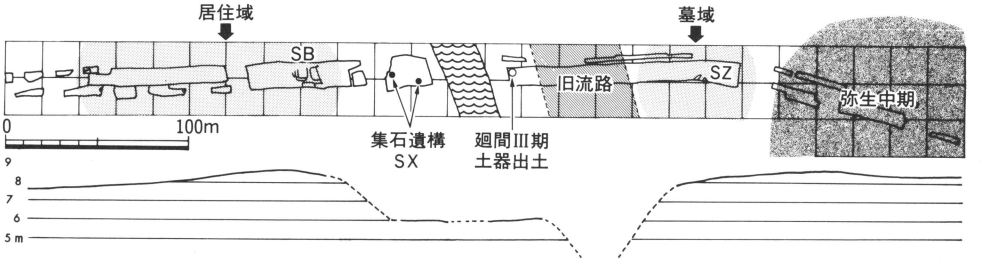


第２図　竪穴住居（南西から）

集石遺構（第３図）　五条川右岸の自然堤防から旧河道へと大きく傾斜していく変換点で２基検出した。検出地点の標高は６ｍ前後であり、竪穴住居が検出された地点との比高差は３ｍを測る。集石遺構は、拳大から人頭大の河原石を帯状又は楕円状に人為的に集積したものである。性格等は不明な部分も多いが、若干の出土遺物及び集石遺構を覆う暗褐色シルト層からは、竪穴住居とほぼ同時期の遺物が出土しており、それらと関連した遺構であることは明白である。



第３図　集石遺構ＳＸ01（南東から）



第４図　岩倉城遺跡下層遺構配置図（１：4000）

方形周溝墓（第５・12図）　標高８ｍ前後の五条川左岸の自然堤防上で１基確認した。遺構の大半が調査区外となり、僅かに周溝の一部が調査できたにすぎない。周溝は幅1.5ｍ・深さ60㎝程度の規模であり、平面形態は１ヶ所に陸橋部を有するタイプと考えられる。

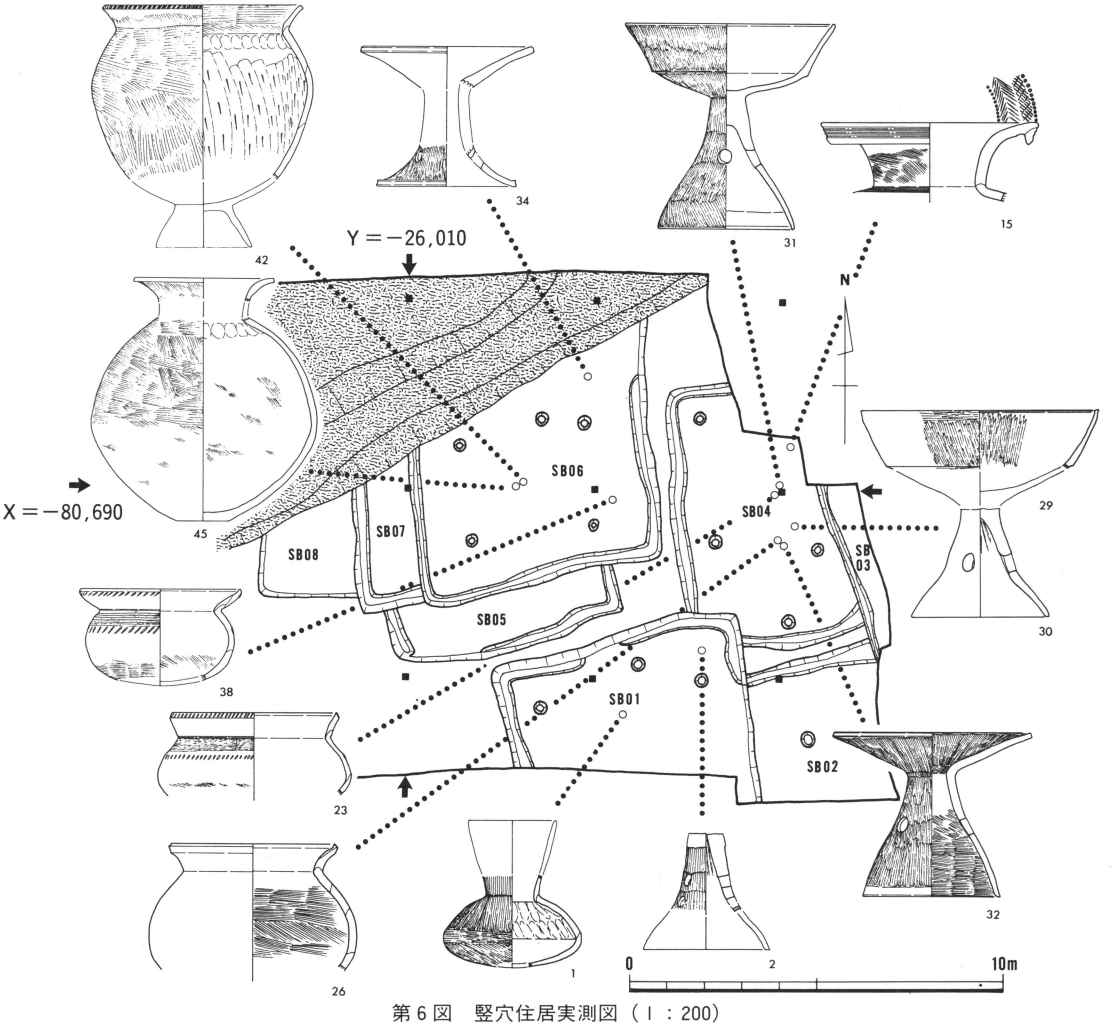


第５図　方形周溝墓（北から）

２）出土遺物の概要(2)

ＳＢ01出土遺物（第７図）　ＳＢ01出土土器の器種は、壺・甕・鉢・高杯・手焙形土器からなるが、全形を窺うことができる資料は少ない。

壺（１・８・９）　１は口頸部の大半を欠損するが内彎口頸壺であり、体部は偏平で最大径を中位に持つ。外面はヘラミガキ、内面はナデ・指押えで仕上げる。８・９は広口壺の



第６図　竪穴住居実測図（Ｉ：200）

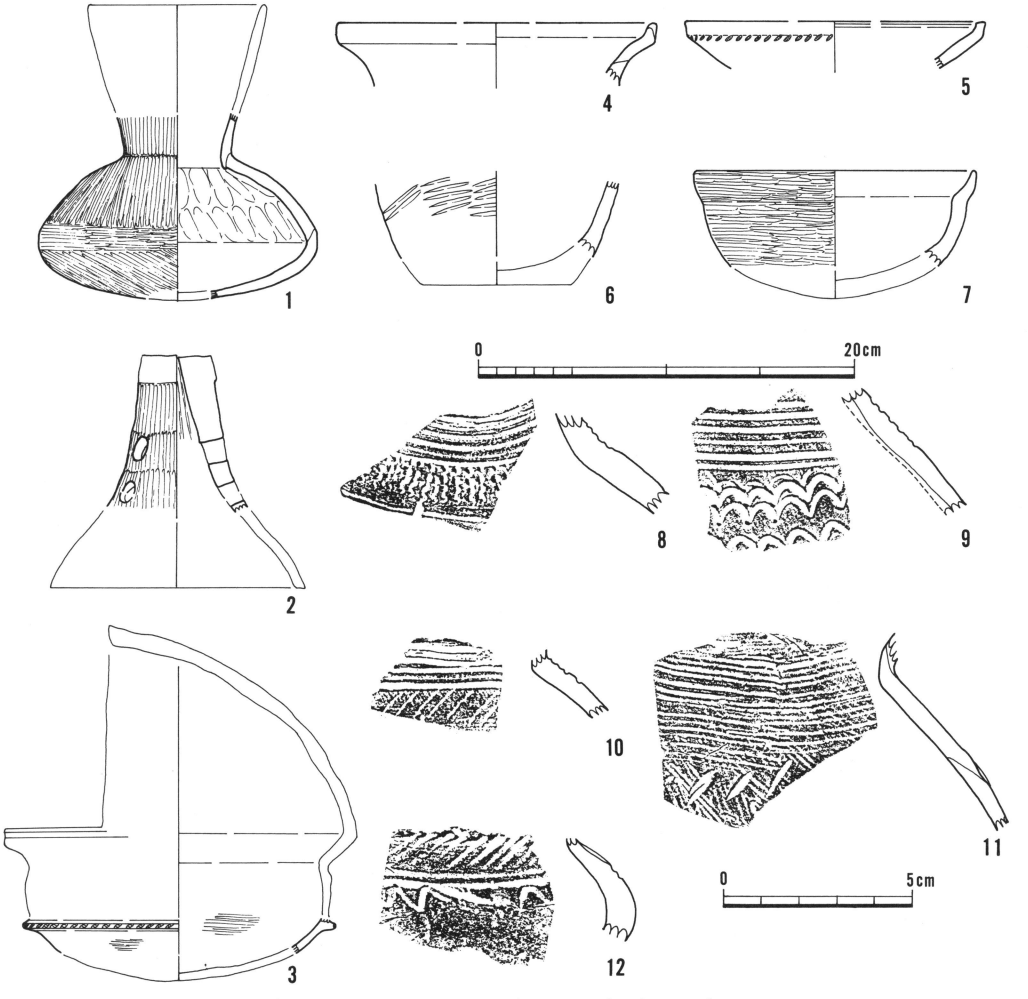
体部片で、直線文下に貝殻刺突・ヘラ描波状文を施す。

甕（4～6・10・11）　細片のみであり、鉢との区別が困難であるが、6を除き、すべて受口系口縁台付甕と考えられる。4・5は鋭く屈曲する口縁部片で端部に明瞭な面を持つ。10・11は体部上半の破片であり横線文下部にヘラ・ハケによる刺突を加える。6は外面に叩きを施す平底の甕である。

鉢（7・12）　7は浅い体部に、口縁内面を強くヨコナデすることによって短く内彎気味に立ち上がる口縁部をつくり上げる。12は、受口系鉢の体部片であり、ヘラによる刺突・横線・波状文を加える。

高杯（2）　杯部を欠損するが、やや内彎気味に外方へ伸びる長脚高杯の脚部片である。

手焙形土器（3）　細片であり全形は不明であるが、鉢部を巡る凸帯部分と考えられ、凸帯上に刻みを施す。また、内外面にハケの痕跡が残る。



第7図　SB01出土遺物（1：4、拓影1：2）

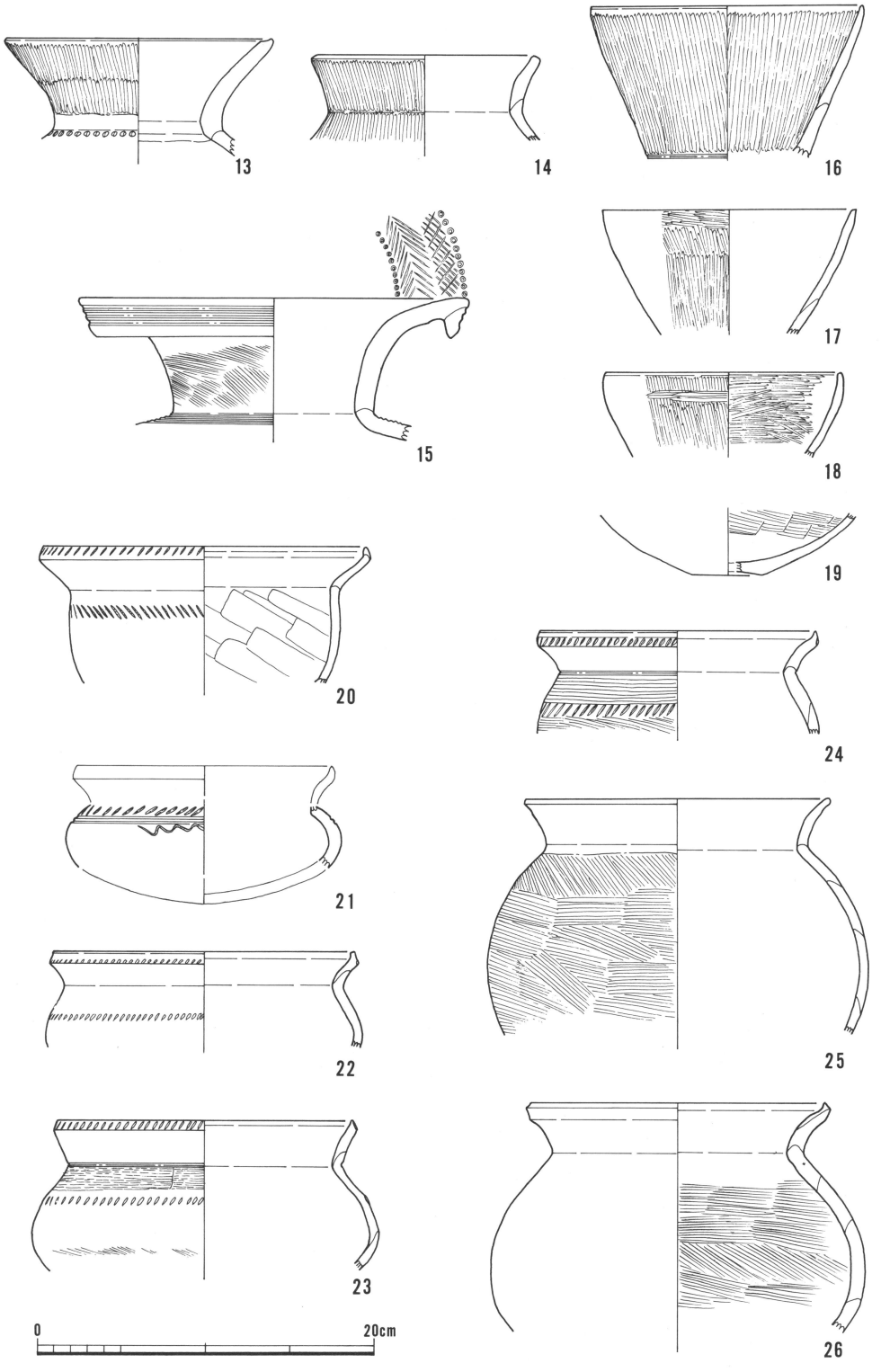
ＳＢ04出土遺物（第８・９図）　ＳＢ04出土土器は、壺・甕・鉢・高杯・器台がある。

壺（13～19）　広口壺（13～15）と内彎口頸壺（16～19）がある。13は、外方へ直線的に広がる口頸部片であり、頸部に円形の刺突を施す。14は、短く外反する口頸部を持ち、外面はヘラミガキによって調整される。15は加飾性豊かな所謂パレススタイル壺の口頸部片である。拡張・垂下した口縁部に擬凹線を施し、口縁内面には、ヘラ・竹菅による装飾を加える。僅かに残る体部には直線文が確認できる。16～18は、内彎口頸壺の口頸部片であり、緩やかに内彎しながら大きく外方へ開く。ヘラミガキ又はナデによって調整される。19は底部片であり、やや上げ底状となる。

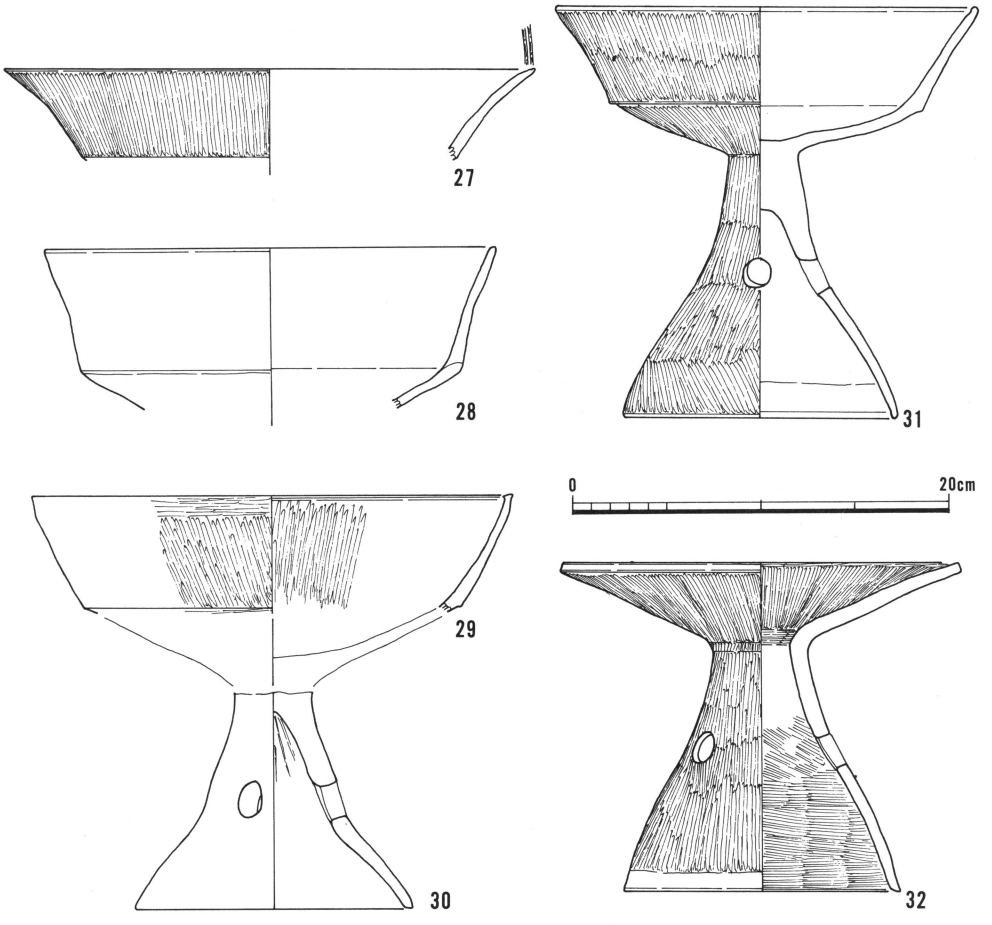
甕（24～26）　口縁部が受口状を呈するもの（24・26）とくの字状に屈曲するもの（25）との二つのタイプに分けられる。24は、台部を欠損するが当地域に一般的にみられる受口状口縁台付甕である。口縁部を摘みあげ鋭く屈曲させることによって受口状の口縁をつくりだす。口縁下部と体部横線文下に刺突を施す。26は24と同様に受口状の口縁を有するが、在地の土器には系譜のおけない異質なものである。体部は球形状を呈し、器壁も厚く、外面はナデ調整が施される等より鉢の可能性も考えられる。25は、体部から単純にくの字状に屈曲する口縁部を有する。体部外面をハケ、その他の部分をナデによって調整する。

鉢（20～23）　すべて受口状の口縁を呈するものであり、体部が口径より大きく張り出すもの（21～23）と逆に口径が体部径を陵駕する（20）二つのタイプがある。22・23は、鋭く屈曲する口縁部を有するが、その手法はいずれも摘み上げ状に整形する。体部から口縁にかけての外反は緩く、体部もやや偏平化する傾向が窺える。また体部の文様は、ヘラによる刺突は施すが、この種の鉢に特有な体部上半部の横線はみられず、ナデ又は板ナデ調整される。21は体部片であり、ヘラによる刺突・横線・波状文を施す。20は頸部から強く外反させた口縁部を鋭く屈曲させ受口状口縁とし刺突を加える。端部は丸くおさめる。体部は全く張りをもたず、上半部にハケによる刺突を加える。外面はナデ、内面は板ナデにより調整する。

高杯（27～31）　杯部の形状から、杯部が浅く強く外反しながら立ち上がるもの（27）と杯部がやや深くなり、内彎気味又は外反するが弱く立ち上がるもの（28～31）の大きく２つの器種に分類できる。27は、山中期にみられる杯部が浅く、杯部上半が外反するものであり、端部に２条の沈線を巡らす。外面は縦方向のヘラミガキ、内面はナデによって調整する。31は、唯一全形を窺うことができる資料である。杯部下半で明瞭な稜を有し上半部は緩やかに外反しながら広がる。脚部は長脚であり、円柱から円錐状に大きく開く。外面はヘラミガキ、内面はナデによって調整する。28は杯部のみ残存するが、31と同様に中位下半で稜を持ち上半部は緩やかに外反して立ち上がる形状を呈する。内外面ともにナデに



第８図　ＳＢ04出土遺物（Ｉ：４）



第９図　ＳＢ04出土遺物（Ｉ：４）

よって仕上げられる。29と30は同一個体と考えられる。杯部は中位で稜を持ち、上半部は緩やかに内彎しながら立ち上がる。内外面ともにヘラミガキ調整される。脚部は内彎気味に外方へ広がる。

器台（32）　脚部から鋭く屈曲し大きく外方へ広がる受部を持つ。脚部は高杯と同様に長脚であり、受部との接合部より内彎気味に円錐状に開く。外面及び受部内面はヘラミガキによって調整されるが、脚端部はヨコナデが施され、微妙に外反を示す細部彎曲調整が認められる。脚部内面にはヨコハケを残す。

ＳＢ06出土遺物（第10図）　ＳＢ06出土土器は、壺・甕・鉢・高杯・器台がある。

壺（43～45）　45は頸部の一部を欠損するが、ほぼ完形に復元することができる広口壺である。頸部からほぼ直立気味に立ち上がり、緩やかに外反する口縁部を有すると考えられ、端部は平坦で明瞭な面を持つ。内面はヨコナデ調整されるが、外面にはハケを残す。体部

は球形状であり、最大径は中位にある。外面のほぼ全域にハケを施すが、最大径より下半部はナデにより打ち消される。43・44は広口壺の体部片であり、直線文やヘラ・クシ等による刺突が施される。

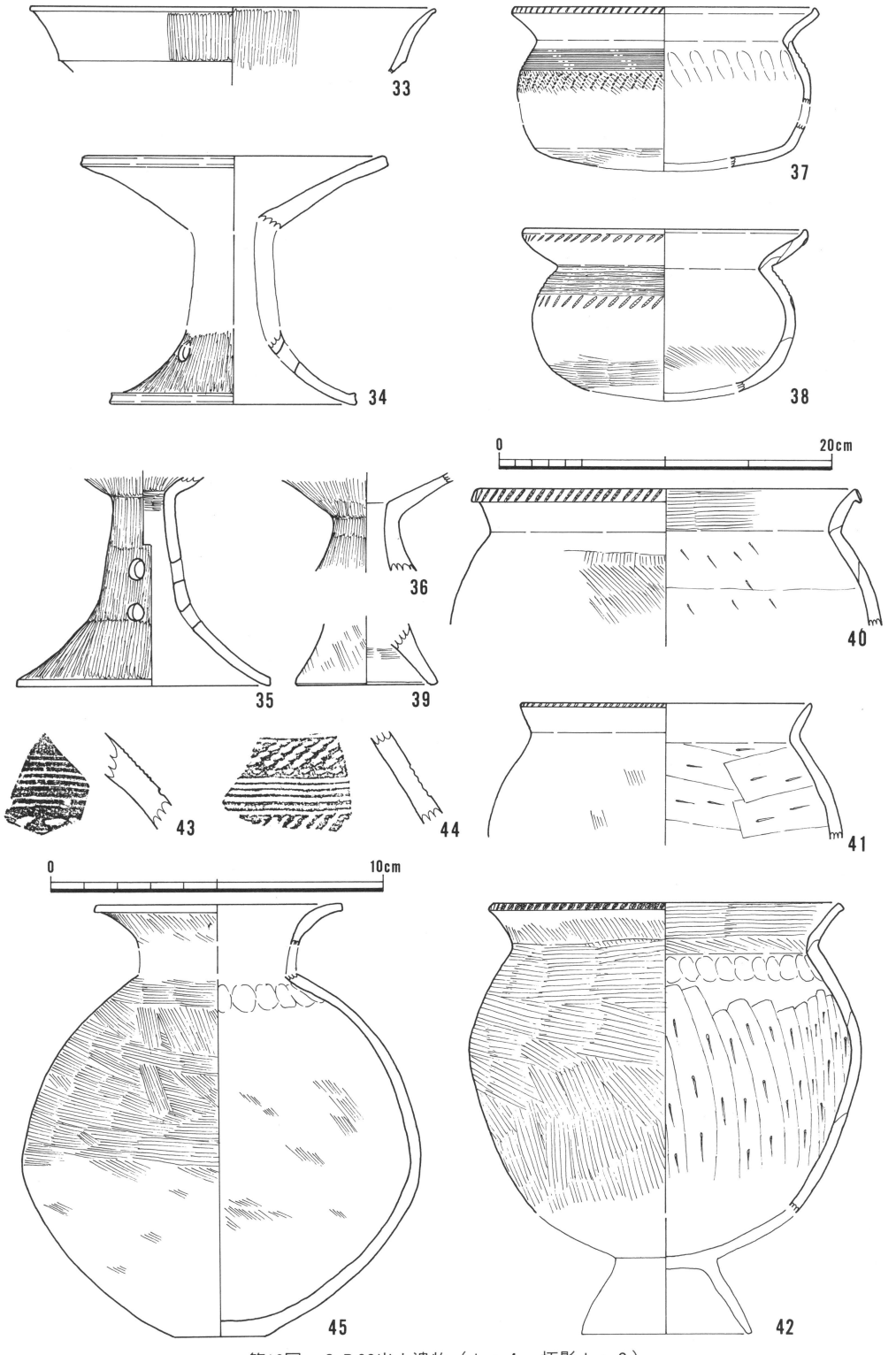
甕（39～42）　すべて体部から単純にくの字状に屈曲する甕であるが、口縁端部の形状は微妙な違いをみせる。40は体部から緩やかに屈曲し、口縁端部は平坦で垂下する。ハケ原体による刺突が加えられる。体部外面はハケ、内面はヘラケズリ調整される。41の口縁端部は、面を有さず丸くおさめる。剝落が著しく調整は不明瞭であるが、口縁内外面はともにヨコナデ、体部外面はハケ、内面は横位のヘラケズリが施される。42は台部を欠損するが、ほぼ全形を窺うことができる資料である。口縁は大きく外傾し、端部に明瞭な面を持つ。ハケ原体による刺突が加えられる。体部はやや楕円状であり、横位または縦位の粗いハケが施される。口縁内面には横位のハケ、体部は、ヘラケズリによって調整される。39はハの字状に開く台部片である。

鉢（37・38）　37・38ともに口縁端部を摘み上げることによって、受口状の口縁を形成する鉢であり、この種の鉢に特徴的な、体部上半部の櫛描横線文、口縁部分と横線文下の刺突が明瞭に認められる。37は体部から強く屈曲する口縁を有する。体部は中位に最大径をおき、下部で鋭く屈曲し底部をつくる。38も同様に体部から強く屈曲する口縁部を持つが、体部は球形状を呈する。調整はいずれもナデが基本であるが、体部下半には横位のハケが残る。

高杯（33）　山中期に通有にみられる高杯である。浅い杯部の上半部片であり、中位で稜を持ち、口縁は外反しながら立ち上がる。内外面ともに縦位のヘラミガキによって仕上げる。

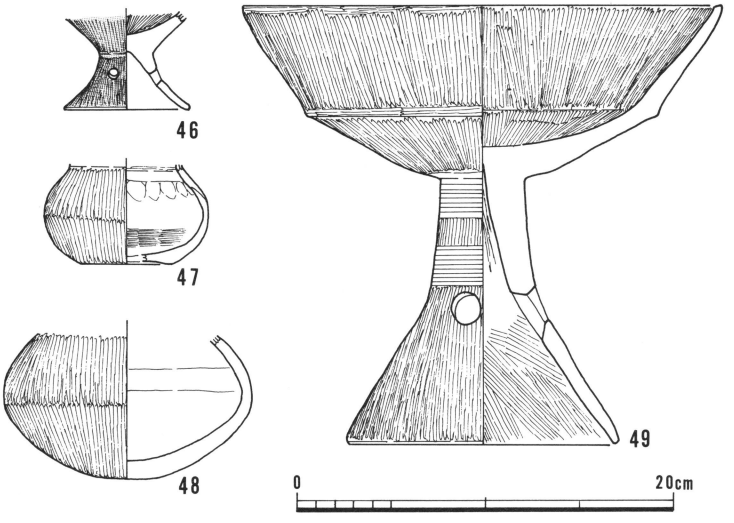
器台（34～36）　全形を窺うことができる資料はないが、いずれも同様の形態を示すと考えられる。34は脚部上半部を欠損する。受部は脚部から鋭く屈曲し、端部は平坦で面を持つ。内外面ともにナデ調整される。脚部は外反しながら円錐状に開き、端部は平坦に仕上げられる。外面にはヘラミガキが施される。35は脚部のみ残存する。外反しながら大きくラッパ状に開き、端部は面を持つ。透孔は2段3方に穿つ。外面は縦ヘラミガキ、内面はナデによって調整される。36は、受・脚部の屈曲部片である。

集石遺構出土遺物（第11図）　集石遺構からの出土遺物は細片のみであり図示することが不可能なため、ここに紹介する遺物は、遺構を覆う暗褐色シルト層（47・48）及び89C区SD01（46・49）から出土したものである(3)。47・48は口頸部を欠損するが、体部の形状より内彎口頸壺と考えられる。48は最大径を体部中位におき、全体的に丸味を帯びた形となる。47は小型品で、底部はやや上げ底状である。いずれも外面は縦方向のヘラミガキ調整が施され、内面は、ハケの残存もみられるが、基本的にはナデによって仕上げられる。46



第10図　ＳＢ06出土遺物（１：４、拓影１：２）

は小型の高杯であり、外面にはヘラミガキののち赤彩が全面に施される。47は全形を窺うことのできる資料である。中位で明瞭な稜を持つやや深めの杯部と長脚の脚部からなる。脚部は中位より大きく外方に開く形状を呈し、横線文が2段にわたり施される。三方に透孔を穿つ。



第11図　集石遺構出土遺物（1：4）

ＳＺ01出土遺物（第13図）

ＳＺ01より出土した土器は、壺2、高杯2の4点である。第12図にその出土地点を示したが、50・52・53の3点の土器は、周溝最下層より転落した状態で、51は溝底よりやや浮いた状態で出土した。

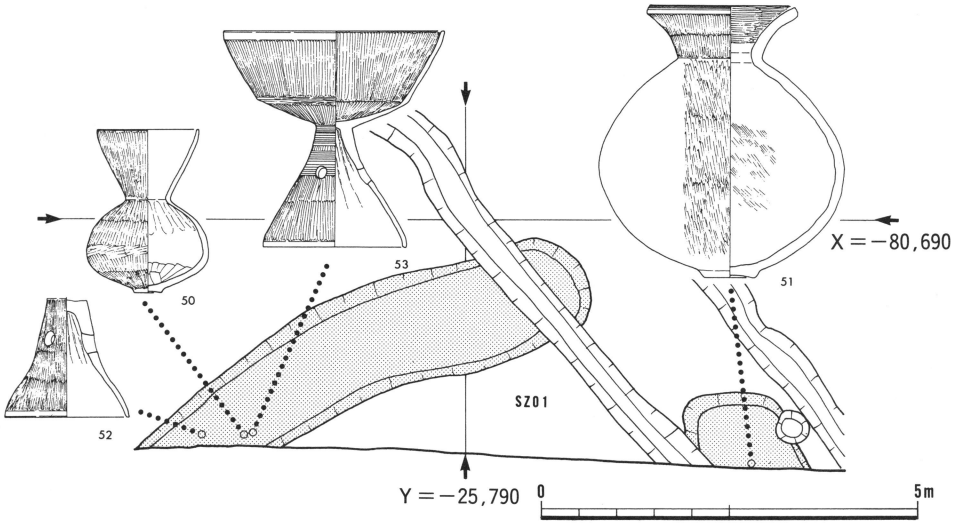
壺（50・51）　50は内彎口頸壺であり、口頸部は、大きく外方に開き、口縁部付近で緩やかに内彎する。体部は、最大径が中位より下方に移り、やや下ぶくれ状の形態を示す。底部は上げ底である。外面はヘラミガキ、内面はナデ、指押え、板ナデ等によって調整される。51は広口壺であり、口頸部は体部から強く屈曲する。口縁端部はやや肥厚し、面を持ち、凹線が巡る。内外面ともにヘラミガキで調整される。体部の形状は、最大径を中位に持ちほぼ球形状を呈する。外面は縦位のヘラミガキ、内面はハケが施される。

高杯（52・53）　53は全形を窺うことができる。杯部は下半で明瞭な稜を有し、内彎気味に外方に広がる。脚部は円錐状に大きく開き、横線文が2段にわたって施される。外面及び杯部内面はヘラミガキによって調整される。52は脚部のみであるが53と同様の形態を呈すると考えられる。52・53ともに口縁部と脚部裾部付近はヨコナデが施され、僅かに外反させる細部彎曲調整や内彎脚調整技法が明瞭に確認できる。

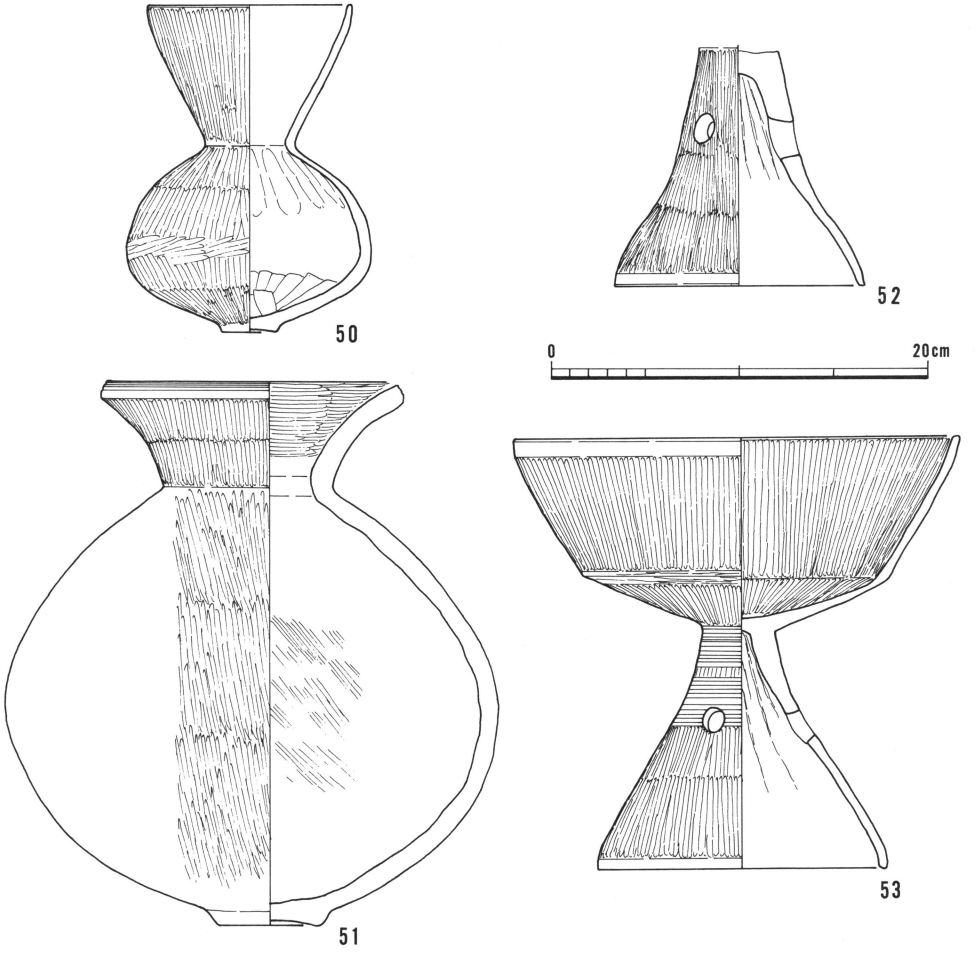
Ⅲ　まとめ

前節までに、平成元年度調査における岩倉城遺跡下層より出土した遺構と遺物の概略について記してきた。最後に出土土器及び岩倉城遺跡Ⅰ・Ⅱ期[4]における遺跡の変遷等について若干の検討を加え、まとめにかえたい。

1）出土土器について



第12図　方形周溝墓実測図（1：100）



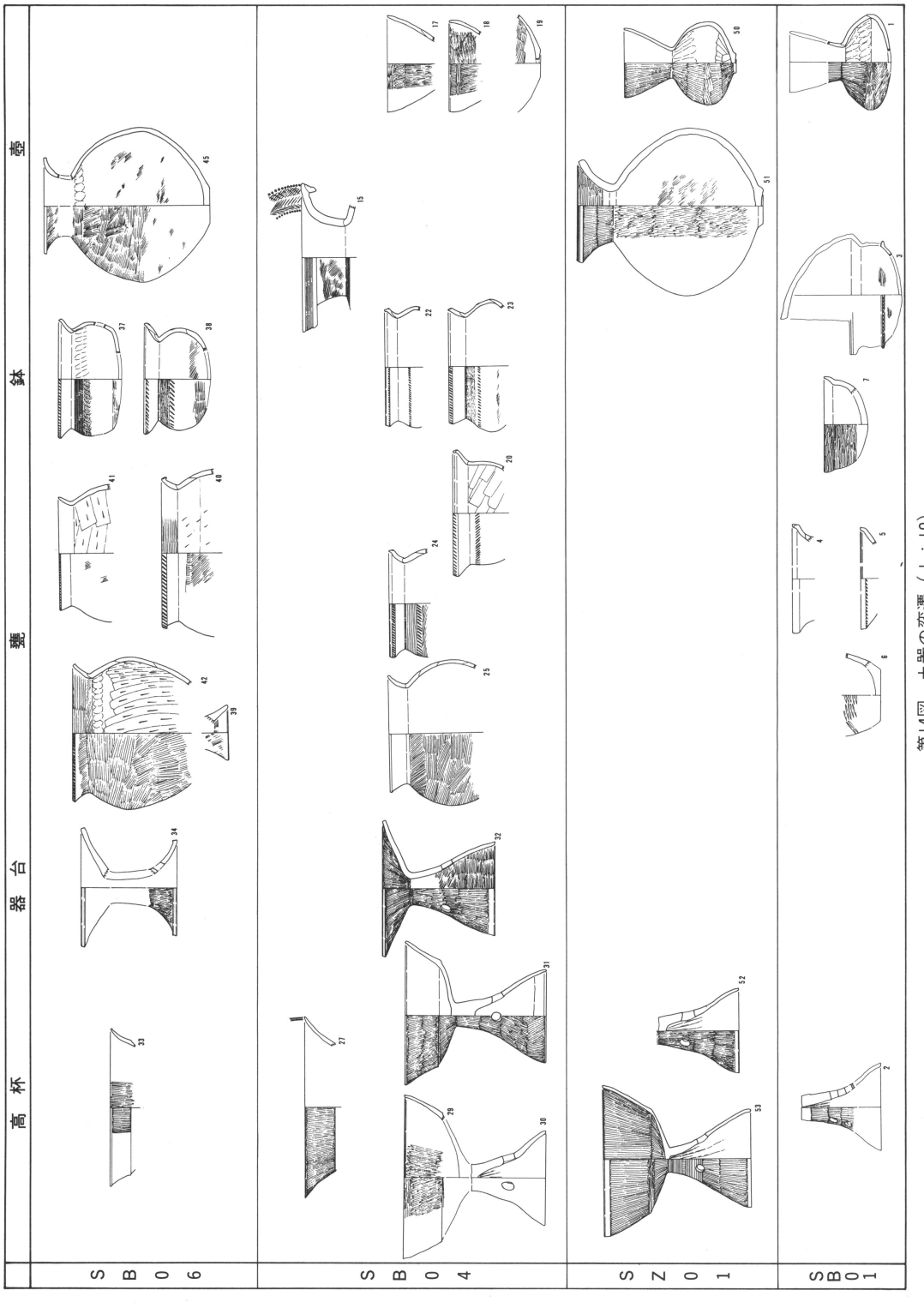
第13図　ＳＺ01出土遺物（1：4）

岩倉城遺跡下層遺構より出土した土器は、従来の編年に照らせば、「欠山期の古段階」を主体とし、比較的短期間の変遷を示す資料と言える。この「欠山期」は、当地域における弥生時代から古墳時代への変遷を捉えるうえで重要な問題を内包しているが、1968年に大参義一氏が編年案を提示[5]して以来、久しくこの時期の研究は低調であった。しかし、近年、調査例の増加に伴い当該期の再検討に関する議論が盛んに行なわれ、多大な成果を納めつつある。[6]そこで、最も詳細かつ精密な分析をすすめられた赤塚次郎氏の研究成果[7]に依りながら、岩倉城遺跡下層出土遺物について、その編年的位置付けを考えてみたい。

各遺構より出土した土器は、全形を窺うことができる資料に乏しく、また、各遺構間で出土量及び器種にバラツキがみられる等、若干の問題も残るが、第14図に示したように、おおむねＳＢ06→ＳＢ04→ＳＺ01→ＳＢ01といった変遷が考えられよう。特に、ＳＢ06出土資料とＳＢ04出土資料との間で、土器の形態等に大きな変化を見出すことができる。ＳＢ06出土土器は、山中期に通有にみられる杯部が浅く上半部が外反する高杯、口縁部に刺突文を施し、内面ケズリ調整を持つくの字甕、外反しながら大きく開く脚部を有する器台、体部に明瞭な横線文を施し、口頸部が強く屈曲する受口系の鉢等からなる。それに対し、ＳＢ04出土土器は、高杯・広口壺等にＳＢ06出土土器段階にみられるような古い様相も残る[8]が、内彎志向を持つ高杯・器台の登場、口縁端部に刺突を有さず、内面ナデ調整のくの字甕、体部の横線文は消失・形骸化し、口頸部の屈曲が弱く外傾する受口系の鉢[9]等全体的に新しい様相を看取できる。とりわけ、器台の脚部裾に施される細部彎曲調整の出現は印象的であり、廻間期の開始を特徴づける技法[10]である。よって、ＳＢ06とＳＢ04出土資料との間に大きく一線を画し、ＳＢ06出土資料は、山中様式新相終末期（瑞穂４次ＳＢ02段階）に、ＳＢ04出土資料は、廻間Ⅰ式１段階の古相に位置付け、以降の土器を古式土師器の範疇として捉えたい。次に、ＳＺ01出土資料であるが、調査区の制限もあり、出土量は少なく検討すべき土器は壺・高杯に限られる。形態の変化が明瞭とされる高杯の形状は、廻間遺跡分類の高杯A_2の誕生期の形態に酷似しており、口縁端部における細部彎曲調整・脚部の内彎脚調整技法も明瞭に確認でき、廻間Ⅰ式１段階の新相に位置付けられる資料と言えよう。また、内彎口頸壺も体部の形状が下ぶくれ状となり、当該期の様相を示す。ＳＢ01出土資料は、全形を窺うことのできる資料が存在しないため、不明な部分も多いが、内彎口頸壺の体部は偏平化しており、ＳＺ01出土資料より、明らかに後出的な様相を持つ。小片ではあるが、受口系の甕は、廻間３期にみられる口縁部の立ち上がりの縮小、刺突文の省略されるものもみられ、廻間Ⅰ式２段階に比定することができよう。

２）遺跡の変遷について

岩倉城遺跡は、五条川の両岸に形成された自然堤防上に立地する遺跡である。この微高



第14図　土器の変遷（1：10）

地上で展開した岩倉城遺跡Ⅰ・Ⅱ期における遺跡の変遷について簡単にまとめてみたい。

調査により確認されたⅠ・Ⅱ期の遺構・遺物は、縄文時代晩期や弥生時代中期のものもみられる(11)が、それらはいずれも局所的な存在であり、遺跡全体を通して安定したヒトの定着は認められない。五条川流域の自然堤防上に居住域と墓域を設定し、集落としての様相が整いだすのは、弥生時代後期（山中期(12)）以降のことであり、その主体は、前述した遺構と遺物より山中様式新相から廻間Ⅰ式前半におくことができる。その後、遺跡は急激に衰退する傾向が窺え、僅かに廻間Ⅲ式後半期に祭祀的色彩の強い遺構・遺物が認められるのみとなる。しかし、それは特異な場所に築かれた単発的な存在であり、日常生活を語るものとは考えられない。(13)再び、ヒトの動きが明確となるのは、5世紀後半以降のことである。自然堤防上には方墳・集石墓群といった墳墓が築かれるようになり、遺跡は広く墓域として展開していく。(14)

小文を成すにあたり、赤塚次郎氏、岩中淳之氏をはじめ多くの方々に有益な御教示を頂いた。文末ではあるが謝意を表する次第である。

註

1）服部信博・金子健一1990「岩倉城遺跡」『年報　平成元年度』㈶愛知県埋蔵文化財センター・服部信博1991「“幻の城”から“現実に存在した城”へ－岩倉城遺跡の発掘調査を総括して－」『広報いわくらNo.475』等に簡単ではあるが、その概略を紹介しておいた。

2）以下、使用する用語等は、赤塚次郎1990「廻間遺跡」㈶愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第10集におおむね従った。

3）89C区SD01は、岩倉城の外堀に比定される遺構であり、堀の最下層より「欠山期」の遺物が多数出土した。これらの遺物は、堀の築造に伴い、集石遺構を覆う包含層を掘削した結果の所産であると考えられる。

4）岩倉城遺跡は出土遺物よりおおむね6時期に区分される。Ⅰ・Ⅱ期は縄文時代晩期から古墳時代までを指す。

5）大参義一1968「弥生式土器から土師器へ」『名古屋大学文学部研究論集』ⅩLⅤ11

6）1986年に開催された「欠山式土器とその前後」（第3回東海埋蔵文化財研究会）と題するシンポジウムを契機として、赤塚次郎・加納俊介・宮腰健司の各氏らを中心として研究がすすめられ、当地域における弥生時代から古墳時代に至る土器の変遷が明らかにされてきた。

7）赤塚次郎1990「廻間式土器」『廻間遺跡』㈶愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第10集及び同氏1991「古墳時代の時代区分と集落の動向－濃尾平野を中心として－」第91回愛知考古学談話会資料

8）第8・9図の15・27は山中期に通有みられる形態であり、混入した可能性もある。しかし、遺物の出土状況は、他の土器とともに床面に密着した状態で出土しており、古い様相の残存と考えたい。SB04出土土器と同様の状況は、廻間様式圏内の三重県伊勢市隠岡遺跡SB44出土遺物にもみられ、山中型高杯と内彎する高杯が共伴している。岩中淳之1987「隠岡遺跡発掘調査報告」伊勢市教育委員会

9）従来、不鮮明であった受口系の鉢は、本遺跡出土例よりみるならば、SB06→SB04の形で変化すると考えられる。しかし、当該期の受口系鉢の出土例は少なく、他遺跡との比較検討をすることができなかった。当地域の変化に適用できるか否かは、将来の資料の増加を待ちたい。

10）赤塚次郎氏御教示

11）服部信博1991「岩倉城遺跡」『年報　平成2年度』㈶愛知県埋蔵文化財センター

12）昭和63年度の調査において、山中期の遺構が若干検出されている。松原隆治1989「岩倉城遺跡」『年報　昭和63年度』㈶愛知県埋蔵文化財センター

13）服部信博1990「岩倉城遺跡下層出土の古墳時代前半期の遺構と遺物」『年報　平成元年度』㈶愛知県埋蔵文化財センター

14）五条川右岸で方墳を1基（6世紀前半）、左岸地区の調査で方墳2基（5世紀後半以降）と集石墓群（6～7世紀）を検出している。前掲註（11）・（12）参照

岩倉城跡出土の陶磁器

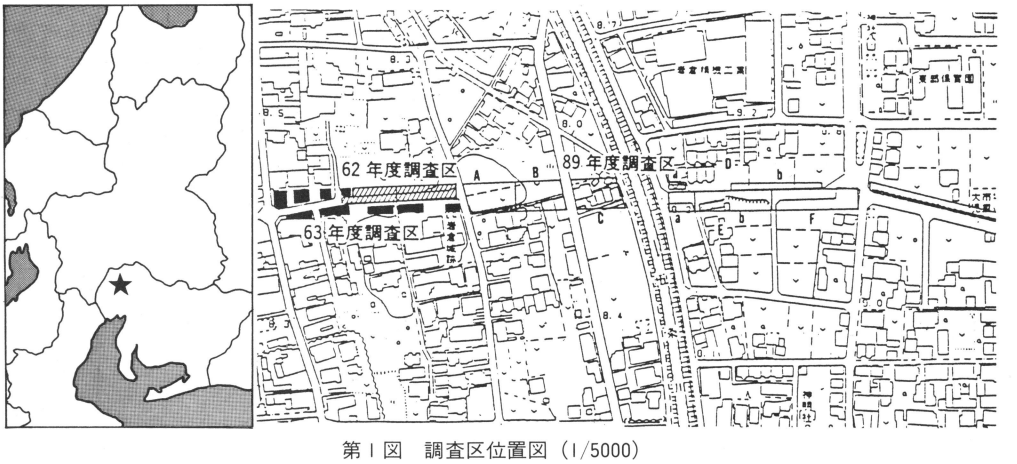
松原　隆治

Ⅰ　はじめに

最近では全国的に中・近世の城館跡の発掘調査がかなりの数に上り、愛知県下でも名古屋城三の丸遺跡、清洲城下町遺跡などを初めとする織豊期の城郭の調査例が多くなり、16世紀代の資料の増加が顕著である。こうした消費地遺跡の遺物・遺構の年代決定に際し、文献記録による城郭の存続期間を考慮しながら、生産遺跡である窯跡調査による遺物の編年を利用することが通例であった。このような状況にあって、消費地遺跡なりの遺物の年代決定の方法があるのではないかとして、複数の城郭の存続年代と発掘調査による出土遺物の分析から編年を行い、従来の窯跡調査による遺物の編年に対して幾つかの問題提示がなされた（鈴木　1990）。消費地側と生産地側とそれぞれに編年を行うことによって、より正確な編年が可能であることが明らかにされたといえよう。

ここでは、消費地遺跡出土の陶磁器の編年を検討するための若干の資料提示を目的として、織豊期の代表的な城郭の一つである岩倉城を取り上げ、切り合い関係の明らかな遺構出土の遺物を紹介したい。

なお岩倉城跡（県遺跡番号1105）は愛知県岩倉市下本町字城跡に所在し、五条川右岸の標高約10mの自然堤防上に立地すると推定されていたが、県道建設に先立つ発掘調査が進むにつれて、五条川左岸の大市場町にも城郭が広がることが次第に明らかになってきている（第１図）。



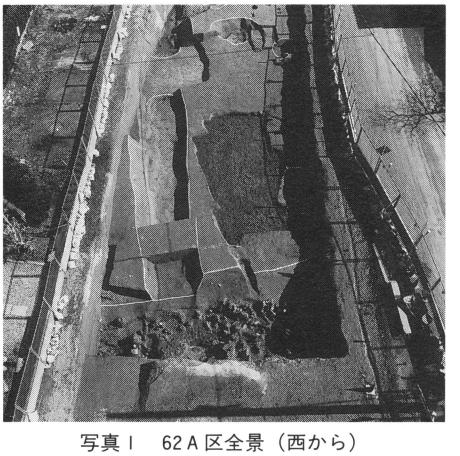
第Ⅰ図　調査区位置図（1/5000）

II　文献による岩倉城の存続年代（水野　1985）

岩倉城の築城年代ははっきりしない。ただし、稲沢の下津にあった守護所をめぐって、織田敏定と織田敏広が争い、文明11年（1479）の和睦まで混乱が続き、和睦後は織田敏広が岩倉に在城したことは、ほぼ間違いないと考えられている。したがって1479年には岩倉城があったことは確実であろう。城主については、織田信長が尾張統一後に系図を操作したらしく、確実には解明できていない。諸説があるものの、最近注目されている「前野家文書」によれば、敏広…寛広…敏信…信安…信賢と続き、永禄二年（1559）に信長に攻め滅ぼされたらしい。

初代岩倉城主であった敏広は応仁の乱頃を中心に活躍した人物で、文明13年までには没したらしい。幼少の千代夜叉丸（寛広）が後継者になったすきに乗じて、清洲の織田敏定は長亨２年（1488）岩倉城を落城させた。寛広は下津へ逃れたらしい。岩倉城へは敏定の子の敏信がはいった。明応４年（1494）美濃の斎藤氏とその家臣石丸氏との争いに端を発して、尾張でもそれぞれ姻戚関係から、敏定・敏信と寛広の争いになり、敏定は陣中で病没、敏信は戦死した。敏信の跡を弟の六郎（信安）が継いで、寛広と戦ったが翌年、両者は講和した。信安については確実な資料が乏しく、ほぼ半世紀にわたって岩倉城主の事跡は空白である。一方、清洲においては三奉行のうち織田信秀が勢力を伸ばし、ついにはその子織田信長が弘治元年（1555）清洲城主になった。翌年、美濃の斎藤道三が子の義龍と戦って長良川畔で死んだが、この時、道三支援に出掛けた織田信長軍に対して、信安は下之郷村に火を放って後方攪乱を狙った。その後、岩倉では信安の跡を長男の信賢と次男の信家が争い、弘治３年か永禄元年(1557か1558)信賢が家督を継いだ。信長は、永禄元年五月と七月に岩倉城攻略を謀ったが、このときは主として城外での戦闘にとどまった。信長は、翌年春に再び岩倉城を攻めた。城下町を焼き払い、数か月の籠城戦の後、落城させた。岩倉城は破却され、ことごとくはき捨てられた。

したがって、岩倉城は寛広と信安の頃の記録が乏しいが、少なくとも1488年と1559年の二度の落城とそれによる建物の焼失の可能性が考えられる。



写真Ⅰ　62Ａ区全景（西から）

III　遺構の検討

ここでは、62Ａ・Ｂ区で検出した遺構のうち、62Ｂ区の焼土層と62Ａ区の溝ＳＤ03上層・下層、ＳＤ01′、ＳＤ01を検討対象として取

り上げ、切り合い関係から新旧の順序を把握する。さらに、63Ｂｃ区でも焼土層とＳＤ03の一部が見つかっているため、その成果も加える。（第２図、写真１）。

１　焼土層、ＳＤ03上層、ＳＤ03下層（写真２、第３図）

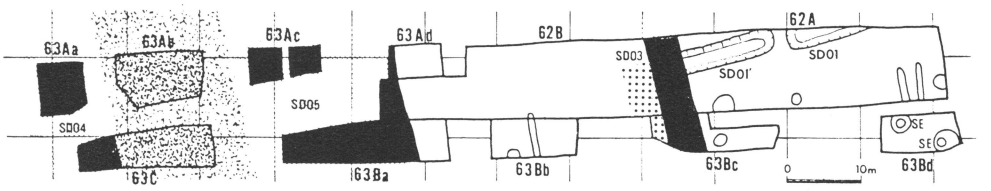
焼土層を62Ｂ区の東端と63Ｂｃ区の西端で検出した。ＳＤ03の西側の肩の検出面より約10㎝下で確認、南北に長く、幅３ｍ、長さ５ｍ、厚さ10㎝であった。１㎝程から拳の半分ほどの大きさの焼土の塊に炭化物の細粒が密に混じって広がっていた。焼土塊を注意してみると、スサが明瞭に確認でき、また平滑な面もある事から建物の壁土が焼け落ちたものと考えられる。ＳＤ03を検出した時点では焼土層はまだ確認できなかったこと、焼土層を検出したときＳＤ03では焼土層は認められなかったことから、焼土層はＳＤ03より古いことは明らかである。焼土層のもとになった建物とＳＤ03が同時に存在していたと仮定すると、建物がＳＤ03の西に接していたことになるから、建物の焼失に際して、焼土層と同様に多量の焼土がＳＤ03の底に堆積しているはずである。しかし、実際にはＳＤ03の最下層でわずかに焼土塊が確認できただけである。この事は建物の焼亡の後、しばらくして建物が在った位置に少し重なってＳＤ03が掘削されたことを物語っている。溝の底の焼土塊は、溝の斜面に覗いた焼土層から転落したものである。

ＳＤ03の最下層は灰色粘質土で滞水状況を示していた。木製品や土器が出土した。この上に厚く砂が堆積し、やや東へずれて再び溝が掘削されていた。最初の溝（幅5.4m、深さ２ｍ）とその埋土をＳＤ03下層、再掘削した溝とその埋土をＳＤ03上層とする。

ＳＤ03上層は、家屋転居の際に掘削された大規模なごみ穴によって、東側の肩を攪乱され、規模は推定せざるをえない。幅７ｍ、深さ1.7m程であろう。最下層に灰色粘質土があり多量の土器、陶器、木製品などに混じり、火を受けて表面が赤く変色した拳大の河原石やもとは人頭大の規模だったらしい割れた河原石が土のう袋に３袋出土した。岩倉城が焼けた記録は無いが、織田信長に永禄２年（1559）に攻められて完全に破壊され、その後は近年に至るまで長く畑であったことから、ＳＤ03上層の焼けた河原石は、信長によって城は火を放たれたこと、多量の遺物は、焼け落ちた城跡を片付けて畑にする際に、溝が邪魔な物を捨てたごみすて場であったことを想像させる。したがってＳＤ03上層の遺物は1559年頃の一括遺物である可能性が高いと言えよう。

２　ＳＤ03上層、ＳＤ01′

ＳＤ01′はＳＤ03の北端近くで確認した東西にのびる溝で、検出面での幅2.7m、深さ１ｍ。底でわずかに滞水性を示し、土器、陶器、木製品などが出土した。ＳＤ03上層とＳＤ01′の関係を知る手掛かりとしては、両者にまたがる位置に残した畦の南壁セクションがある。畦はＳＤ01′の中央に、東西に長く、ＳＤ03にかかるように設定した。東から西へ斜めに落



第２図　昭和62・63年度遺構配置図（1/1000）

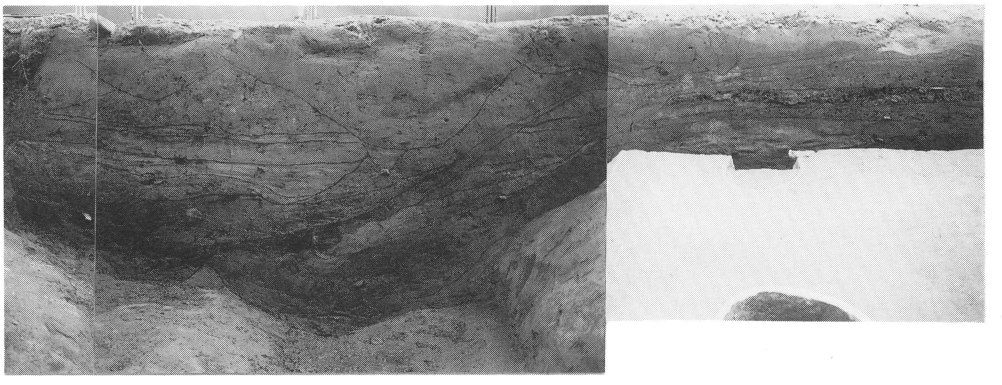
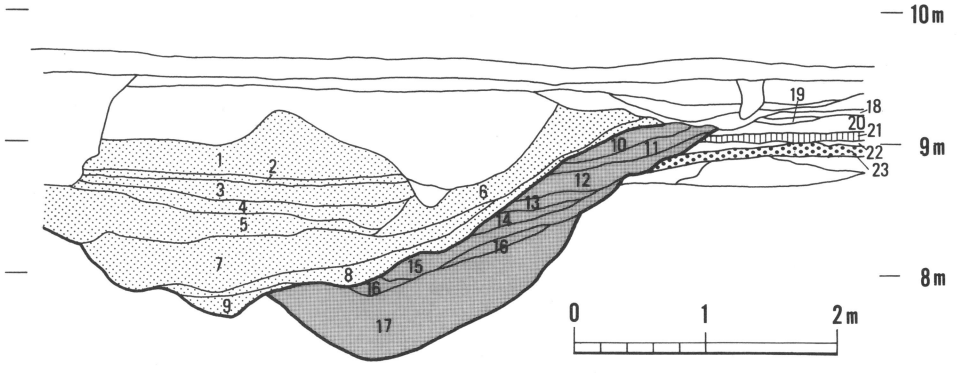


写真２　62Ａ・Ｂ区ＳＤ03南壁セクション



1	ＳＤ03上層	（オリーブ黒色10Ｙ3/1砂質土）
2	〃	（オリーブ黒色7.5Ｙ3/1砂質土）
3	〃	（オリーブ黒色7.5Ｙ3/1砂質土）
4	〃	（暗オリーブ灰色2.5Ｇ Ｙ4/1砂）
5	〃	（オリーブ黒色10Ｙ3/1砂質土）
6	〃	（黒褐色2.5Ｙ3/2砂質土）
7	〃	（黒色7.5Ｙ2/1粘質土）
8	〃	（黒色7.5Ｙ2/1粘質土）
9	〃	（灰色7.5Ｙ4/1粘質土）
10	ＳＤ03下層	（にぶい黄褐色10Ｙ Ｒ4/3砂質土）
11	〃	（オリーブ褐色2.5Ｙ4/3砂）
12	〃	（にぶい黄褐色10Ｙ Ｒ4/3砂質土）
13	ＳＤ03下層	（黄褐色10Ｙ Ｒ5/6砂）
14	〃	（暗褐色10Ｙ Ｒ3/4シルト）
15	〃	（灰オリーブ色５Ｙ4/2砂）
16	〃	（暗オリーブ褐色2.5Ｙ3/3砂質土）
17	〃	（オリーブ黒色2.5Ｙ3/3砂質土）
18	〃	（にぶい黄褐色10Ｙ Ｒ4/3砂質土）
19	〃	（褐色10Ｙ Ｒ4/4砂質土）
20	〃	（暗褐色10Ｙ Ｒ3/3砂質土）
21	焼土層	（赤褐色５Ｙ Ｒ4/8焼土）
22	〃	（にぶい黄褐色10Ｙ Ｒ4/3砂）
23	14世紀遺物包含層	（にぶい黄褐色10Ｙ Ｒ4/3砂）

第３図　62Ａ・Ｂ区ＳＤ03南壁セクション

ちる土層とそれに切られた水平な堆積を示す土層を確認した（写真３）。これによってＳＤ01′がＳＤ03上層より古いことがわかる。ＳＤ01′をそのまま西へ延ばすとＳＤ03下層と切り合うことになる。ところがＳＤ03下層の西にはＳＤ01′が認められないことから、ＳＤ01′とＳＤ03下層は同時期に存在した遺構と考えられる。

３　ＳＤ01′、ＳＤ01

ＳＤ01はＳＤ01′とは上端幅約２ｍの掘り残し部分をはさんで、東へ伸びる溝である。北側の肩は調査区外になるため、規模は不明である。しかし溝の南側の傾斜や深さからＳＤ01′とほぼ同規模と推定できる。最下層の滞水性を示す灰色粘質土からは、多くの木製品や土師皿が出土した。調査区北壁（写真４、第４図）は溝に対して斜めの位置関係のためやや見にくいが、溝の掘り残し部分の上面、標高９ｍ付近にかなり固くしまった薄い層があり、道として機能していたことが推定できる。ここを土橋と考えることに無理はないと思われる。土橋をはさんで東西へ対称的にＳＤ01′とＳＤ01へ続くのでＳＤ01′とＳＤ01は土橋と共に同時期の遺構といえる。

したがって焼土層→ＳＤ03下層・ＳＤ01′・土橋・ＳＤ01→ＳＤ03上層という時期的な移り変わりを指摘できよう。

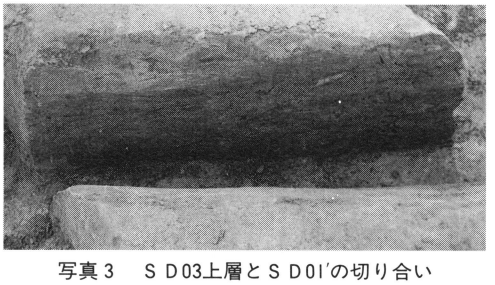


写真３　ＳＤ03上層とＳＤ01′の切り合い

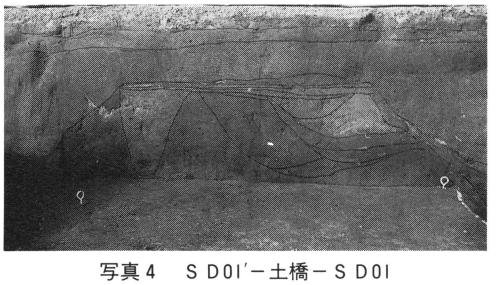
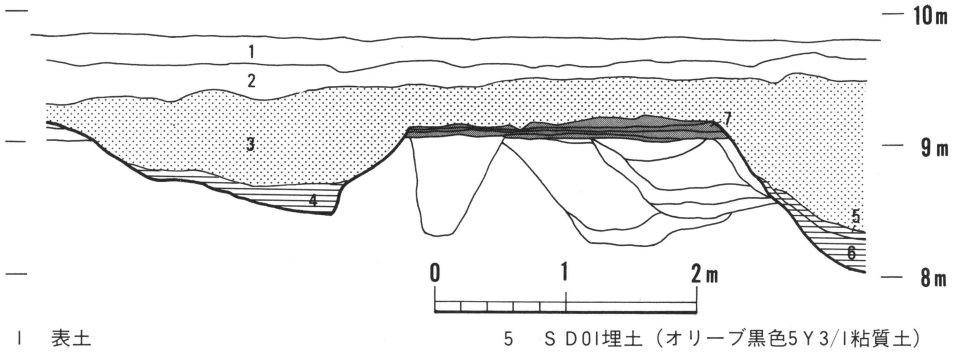


写真４　ＳＤ01′－土橋－ＳＤ01



１　表土
２　耕作土（褐色10Ｙ Ｒ4/4砂質土）
３　整地層（褐色10Ｙ Ｒ4/4砂質土）
４　ＳＤ01′埋土（黒褐色10Ｙ Ｒ3/2シルト）
５　ＳＤ01埋土（オリーブ黒色5Ｙ3/1粘質土）
６　ＳＤ01埋土（黒褐色2.5Ｙ3/1粘質土）
７　土橋（にぶい黄褐色10Ｙ Ｒ4/3砂質土）

第４図　ＳＤ01′－土橋－ＳＤ01セクション

Ⅳ　遺構出土の陶磁器

明らかになった遺構の相対年代順に、遺物について検討をする。

1　焼土層出土遺物（写真５、第５図）

一般的に城郭から出土する貿易陶磁の割合は、数％に過ぎない。しかし、この焼土層はかなり異常で、48％もの高率である。実測図を描けないような細片を含めても土師器皿29点、天目茶碗３点、擂鉢３点、鉢６点、壺８点、その他25点、計74点に対して、貿易陶磁は染付31点、白磁７点、青磁25点、合計63点を数える。

①土師器皿　１・２のいずれもろくろ整形の軟質の皿である。内面は丁寧に仕上げられ、外面底部には糸切り痕が明瞭に残る。１は口縁部が直線的にのびる。黒く油煙が付着しており、灯明皿として使用されたことが明らかである。２は口縁部が内湾気味に終わる。細片のため図示できなかったが、内面を丁寧に撫でて仕上げ、外面にはかなり凸凹と指圧痕を残す直径６㎝ほどの小皿が１点だけ含まれる。

②天目茶碗　３・４共に高台が残存していない。口縁部は直立し小さく外へ折れる。３は全面に厚く鉄釉が掛かる。４は内外面ともに鉄釉がかかり外面下半にサビ釉の化粧掛けが施される。いずれも瀬戸・美濃製品で大窯Ⅰ期の特徴を有する。

③擂鉢　口縁部の小さな破片しかない。５は口縁端部が内側に断面三角形状に突出する。６は口縁部内側に小さく折れるが外面にも小さい縁帯が形成されている。

④鉢　７は、全面に擂鉢と同様な薄いサビ釉を施す。内面は丁寧に仕上げられているものの、外面は粗くろくろ目が残る。口縁端部はまるく終わる。５～７は黄白色の胎土である事から、瀬戸で生産されたと考えられる。

⑤壺　８はかなり堅く焼きしまり、白色の砂粒が混じる。そのうえ内部から白色の粟粒のような吹き出し物が認められ、表面はザラついた感じが強い。信楽焼きであろう。９は体部の下半部で外面には褐色の釉薬が厚く掛けられている。露胎の削り出し高台がつく。

⑥染付　10は碗で、端反りの口縁部の内外面に界線がある。外面には界線の下に唐草文らしい花文が認められる。小野分類の碗Ｂ群に属する（小野　1982）。11～14碁笥底の皿で、いずれも見込み部に２条の界線があり、10・11はその内側に花文が描かれている。小野分類の皿Ｃ群に属する。15～19は付高台の皿で、15・16は端反りの口縁部である。18・19はいわゆる折縁の綾花皿で、口縁を綾花形にヘラ



写真５　焼土層中の遺物出土状況

切りし、強く外方へ曲げている。

⑦白磁　20は端反りの皿で、他に同一固体らしい破片が4点ある。21は灰色の胎土で、陶質の焼成。口縁部は緩く外方へ開く。端部は角にヘラ切りされており、長石に似た釉が厚く掛かり、細かい貫入が認められる。遺構の年代が肥前陶磁の開始以前であることはまず間違いなく、朝鮮からの輸入品と考えられる。

⑧青磁　22は酒会壺の蓋らしい。上面には鎬文を示す2条の縦方向の線がある。淡い青緑色の釉が厚く掛かる。23は外面に線刻の蓮弁文をもつ碗である。24・25は鉢の一部で内面にヘラで花文が彫られている。25は高台が欠けているが、底裏には蛇ノ目に釉が掛かっている。

2　ＳＤ03下層出土遺物（第6図）

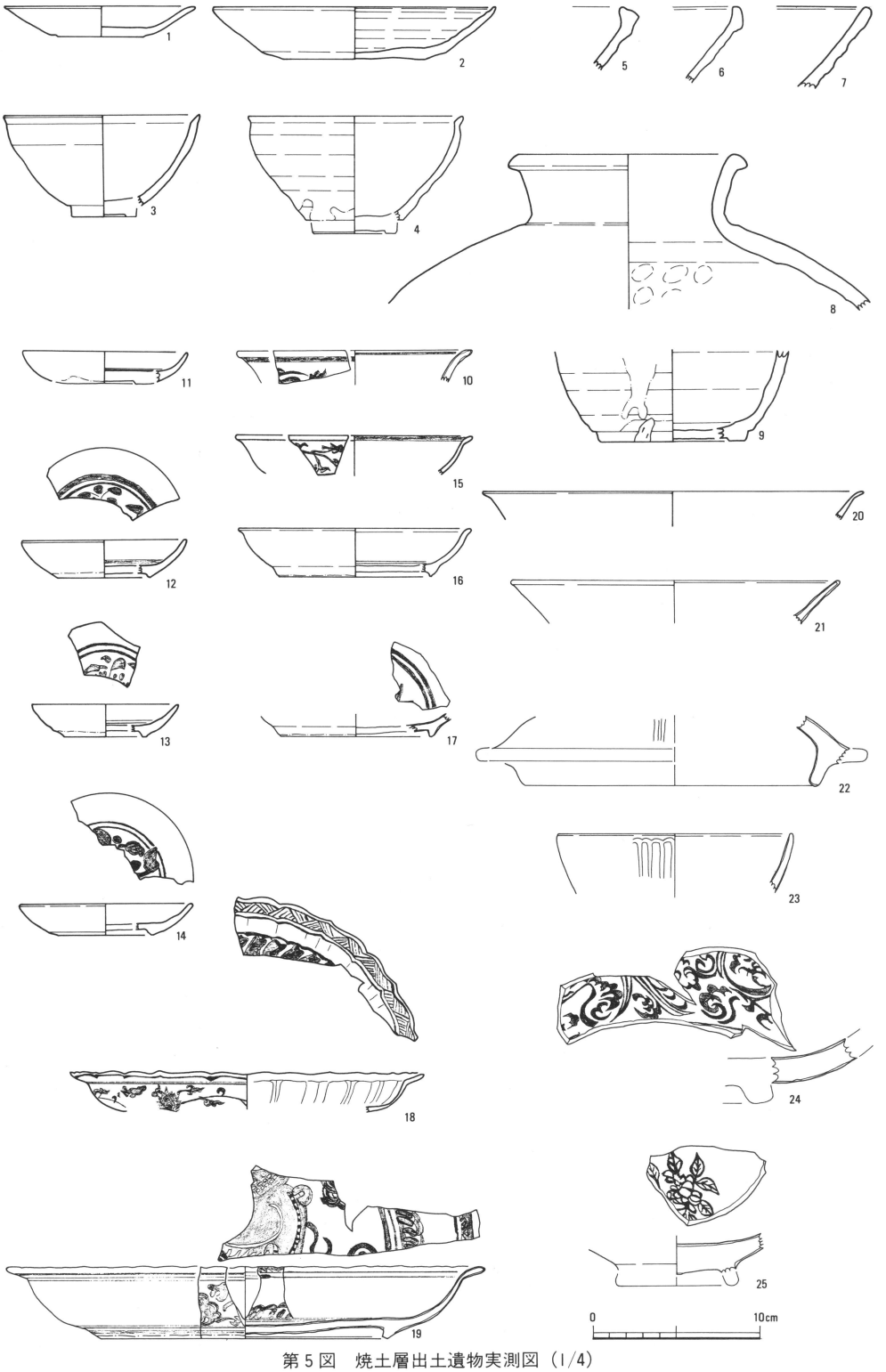
板切れなどの加工材の他には遺物は少なかった。26・27はロクロ成型の土師器皿。糸切り痕から外側へ1㎝ほどほぼ水平に拡げた後、逆ハ字状に直線的にのびる体部を形成。内外面ともに丁寧な回転ナデ調整。28は擂鉢である。口縁部外側に小さく断面三角形の縁帯がつく。瀬戸・美濃製。

3　ＳＤ01′出土遺物（第6図）

土師器皿がまとまって約20点出土したほかは陶器、磁器はほとんど見られなかった。29は土師器皿である。ロクロ成型。糸切り痕の端から体部を形成。口縁部は外反気味。30は酒会壺である。底径16㎝、外面に鎬文がある。畳付き以外は厚く青緑色の釉が掛かる。磁胎は灰白色。

4　ＳＤ01出土遺物（第6図）

検出した遺構の面積の割に、出土遺物は多く、土師器皿は60点ほど集中して出土した。31～33は土師器皿である。31は非ロクロ成型。直径約7㎝。端がやや反り上がる広い底部から、体部は短く折れて外反気味の口縁部になる。内面は不定方向のナデ調整。体部外面は丁寧な横ナデ。32はロクロ成型。内外面ともに回転ナデ調整。口縁部に油煙が付着しており、灯明皿としての使用がわかる。33はロクロ成型。糸切り痕からやや外側へ広げてから体部が立ち上がる。内外面共に丁寧な回転ナデ調整。34は灰釉の皿の底部である。見込み部の釉は薄い。外面底部は露胎。削り出し高台。35は灰釉の折縁深皿。内外面とも口縁部5㎝ほど施釉。34・35は古瀬戸後期の製品。36は染付碗である。端反りで、口縁部内外に界線、外面に唐草文が描かれている。小野分類の碗Ｂ群である。37は青磁の綾花皿。折腰で口縁部に向かい緩く外反する。内面には口縁に沿って1条の沈線が認められる。ややくすんだ青緑色の釉がかかり、磁胎は灰色である。



第5図　焼土層出土遺物実測図（1/4）

5　ＳＤ03上層出土遺物（第６図）

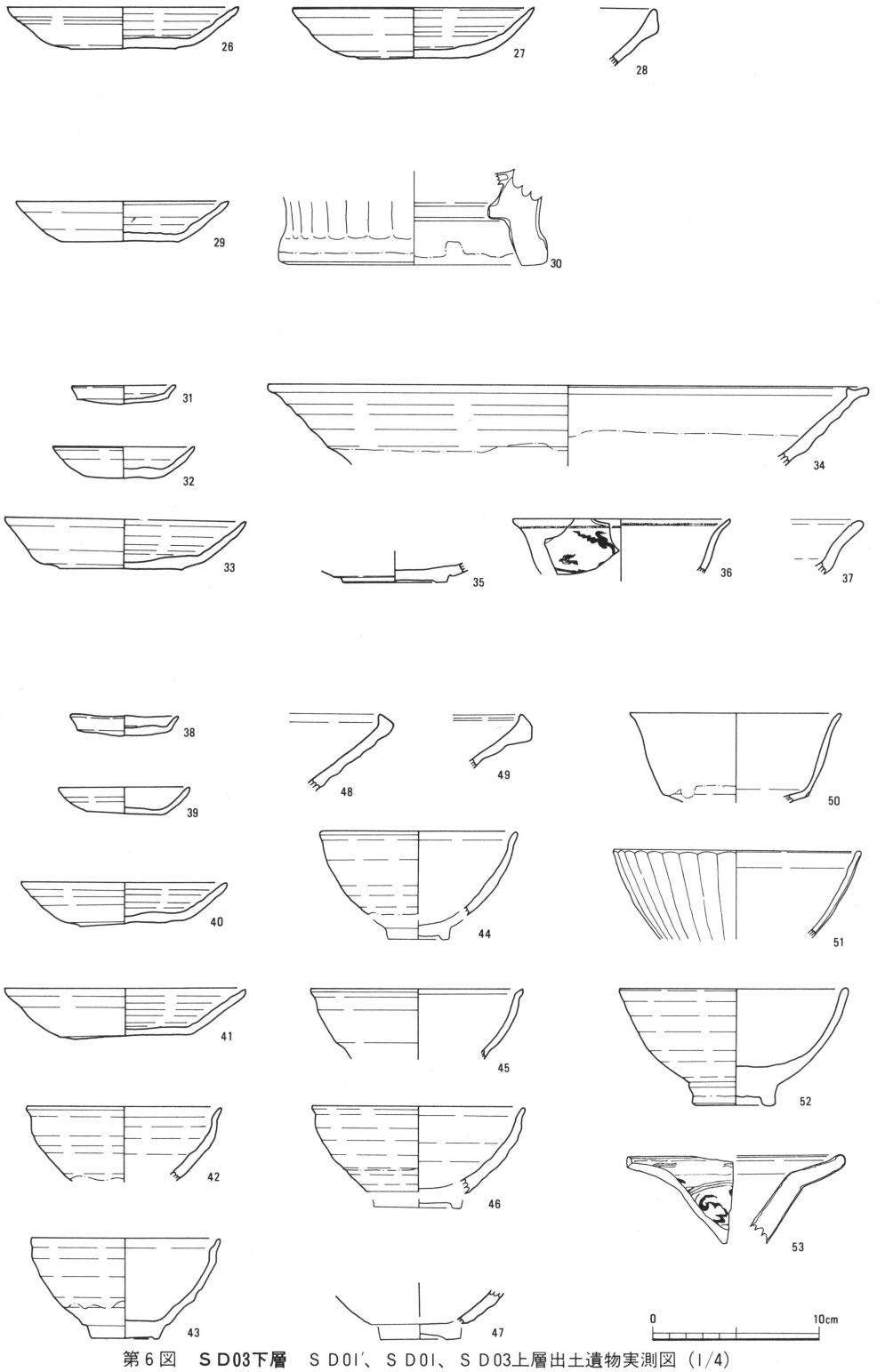
非常に多くの遺物が出土した。38～41は土師器皿である。38は非ロクロ成型で31と同じタイプであるが、作りが粗雑で底部も凸凹が顕著。39はロクロ成型。やや内湾気味に体部が立上がる。40もロクロ成型。糸切痕の少し外側から体部は内湾気味に立上がる。41もロクロ成型。体部は直線的に広がる。口縁端部は内面が直線的、外面が丸く終わる。42～47は天目茶碗である。42～46は口縁部が短く外反する。43は化粧掛けを施し、削り出しの輪高台をもつ。いずれも大窯Ｉ期の特徴を有する。47は化粧掛けが施されておらず、大窯II期の製品であろう。48・49は擂鉢である。いずれも口縁部は内側に折れるが、49はさらに外側に断面三角形の縁帯がつく。50・51は灰釉の碗である。50は、端反りで、腰部は強く曲がる。内外面ともに淡い緑色の釉がかかる。腰部は露胎。51は丸ノミで丁寧に蓮弁が彫られている。52は青磁の碗である。釉は黄褐色で、貫入が多い。磁胎は灰色である。

Ⅴ　まとめ

ここでは遺構と遺物の年代について今一度考えておきたい。

前述のように62Ａ区ＳＤ03上層は1559年頃に埋没した遺構と考えられる。その後の発掘調査によると、62Ａ区と幅４ｍの道を隔てた東の89Ａ区西端では、62Ａ区ＳＤ03と平行する幅３ｍ、深さ1.7ｍの溝ＳＤ03を検出し、溝の東側一帯で検出した焼土と炭化物が溝の中へ落ち込んでいる事を確認した（山仲　1990）。またこの焼土と炭化物の層から大窯Ⅲ期の天目茶碗が出土した（楢崎　1990）。陶磁器の年代はいうまでもなく、さらに62Ａ区ＳＤ01の底から大小７組見つかった、折敷の底板を幅１～３㎝ほどに木目に沿って割ったものを３枚組み合わせて作った＊状の用途不明木製品と同種のものが、89Ａ区ＳＤ03上層から１組出土した。これらの成果に加え、地籍図を検討すると、1559年の落城時には89Ａ区ＳＤ03上層と62Ａ区ＳＤ03上層、ＳＤ01、ＳＤ01′によって囲まれた東西43ｍ（地籍図によれば南北100ｍ）の部分が、本丸内の主要建物の位置と推定されるにいたった（金子　1990）。同時期の遺構の見解が異なるため厳密な考察は報告書を待つにしても、62Ａ区ＳＤ03上層はやはり1559年頃の遺構という点では一致している。

ここで一番問題になるのは、焼土層出土遺物の年代である。建物が火事にあっただけと考えるか、それとも落城に際して主要建物が炎上したととらえるかで、ずいぶん意味合いが異なってくる。もちろん前者の場合も考え得る。この場合、火事は（すなわち焼土層出土遺物は）15世紀末から16世紀前半という年代幅に位置づけられる。しかし後者の可能性もかなり大きいのではないか。岩倉城の歴史を振り返ってみると、後者の場合は1488年の落城が該当する。焼土層のすぐ下に炭化物を多く含んだ遺物包含層が認められるが（第３



第6図　**ＳＤ03下層**　ＳＤ01'、ＳＤ01、ＳＤ03上層出土遺物実測図（1/4）

図)、弥生土器、須恵器、灰釉陶器、山茶椀（14世紀）の細片が出土しているだけで、大窯製品は全く認められないことからも、この蓋然性は高い。

焼土層出土遺物に大窯Ⅰ期の天目茶碗が含まれていることから、これまで考えられていた大窯Ⅰ期の開始年代が、静岡県韮崎市堀越御所が焼き払われた延徳３年（1491）以前、からわずかではあるが遡ることになる。貿易陶磁の編年上の位置付けを調べると、染付碗Ｂ群が14世紀後半～15世紀末で中心は15世紀前半、染付皿Ｃ群が15世紀中頃～16世紀中頃（小野　1982)、蓮弁文の青磁碗の施文法から15世紀代（上田　1882）となり、三者が重なるのは15世紀後半になる。矛盾はなさそうである。

ただ１点だけ出土した朝鮮からの輸入品と考えられる遺物が、まさしくそうであるならば、東海地方においては清洲城下町遺跡と名古屋城三の丸遺跡の出土例しか知られていなかったことから（河内　1990)、しかもこの内で最も古い例として、注目に値するであろう。また焼土層から貿易陶磁が異常に多く出土したことから、焼土層を形成したもとの建物の性格などについて関心のもたれるところである。

一括遺物として重要な62Ａ区ＳＤ03上層、89Ａ区ＳＤ03の出土遺物についてほとんどふれることができなかったが、発掘調査報告書をまとめる段階での検討課題としたい。

なおこの小論をまとめるにあたり、小澤一弘、遠藤才文、鈴木正貴、加藤安信の諸氏に多くのご教示を頂いた。また図版作成にあたって岡田智子氏にご協力を願った。記して謝意を表す次第である。

参考文献

水野博隆　1985「中世」『岩倉市史』上巻、岩倉市、359～427頁。
上田秀夫　1982「14～16世紀の青磁碗の分類」『貿易陶磁研究』２、日本貿易陶磁研究会55～70頁。
小野正敏　1982「15、16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究』２、日本貿易陶磁研究会、71～88頁。
金子健一　1990「戦国城下町岩倉の復元的考察」『年報』、財団法人　愛知県埋蔵文化財センター、118～130頁。
河内一浩　1990「東海地方」『遺跡出土の朝鮮王朝陶磁』、茶道資料館、111頁。
鈴木正貴　1990「尾張の城館遺跡出土の陶磁器」『考古学フォーラム』１、愛知考古学談話会、77～96頁。
楢崎彰一　1990「総括」『尾呂』瀬戸市教育委員会、437～462頁。
山仲廣司　1990「岩倉城遺跡」『年報』、財団法人　愛知県埋蔵文化財センター、36頁。